二人のギルドカード

近衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人のギルドカード

【Ｎコード】
Ｎ６３１３Ｒ

【作者名】
近衛

【あらすじ】
突如、異世界につれてこられた者たちは各々の考えで、己のために行動をはじめる。
ある者は前の世界に帰るために、ある者はこの世界になじむために、そしてまたある者は自らの正義を振るうために・・・。
その中の一人である少々平凡ではない高校生、朱山　大和もまた同じであった。

※異世界がモンスターハンターの世界とは転生者は知りません。独

自設定が少々あります。

一話　始まり（前書き）

初投稿です。そして駄文です。
誤字脱字、意味不明な語句がある可能性があります。
暇つぶしにでも、読んでいただけたら幸いです。

一話　始まり

目をあけると。
目の前に青空が広がっていた。
太陽を直視してしまい顔をしかめ、腕で、目を覆う。時折聞こえる聞き覚えのない動物の声。
寝転んでいる地面に目を向けると、現代では珍しくなった青々とした草原。その先には木々がうっそうと茂っている。
そして、一匹の鷲と思われる大きな鳥が上空でないた。
俺はその状態に何か色々といいたいこと、突っ込みたいことがあったが、数秒後口からまず出たのはこの言葉だった。

「勘弁してくれよ・・・」

どうやら、面倒ごとにまた巻き込まれたらしい。
・・・・
さて、自己紹介をしよう。
俺の名前は朱山大和（シュヤマ ヤマト）。
高校一年。
学校には行くが勉強はあまりやる気がない。というか苦手である。
度重なる喧嘩により、不良扱いとなっている。
しかし、面倒ごとに巻き込まれるから、喧嘩するのであって、別に不良とかではない。
あと、ついでにだが、髪は黒い。染めてないぞ。
・・・・
ため息を一つつく。さすがにこれは異常すぎる。
「ため息をつきたいのはこっちの方だ」
急に声がし、体が反射で震えた。
体を起こし周りを見渡すと、一人の俺と同じ学校の制服を着た男

が俺の隣で座っていた。
「急に現れんな、御影」
「大和が起きる前からいたけどな」
「そうかい」
まったく人がいる気配がしなかった。が別に驚きもしなかった。
これは俺がうっかりしていたわけではなく。
横に座っている親友、蛭沼御影（ヒルヌマ ミカゲ）本人の特徴である。
御影は影が薄いのである。意識しないといるかいないかさえも分からなくなるような奴だ。
クラスに一人ぐらい物静かで影が薄い奴はいる場合が多いが、御影はそれの数倍も影を薄めたようなやつだ。
おそらく自分も、とあるきっかけがなかったのなら、友達にすらならなかったかもしれない。
「で、今回はどんな面倒ごとに巻き込まれた？」
「いつも分かったら苦労しない」
そう、俺が答えると、御影が周りを見渡した。同じく自分も見回すと、目の前には草原が広がり、後ろ辺りには森が広がっている。
ここがちょうど森と草原の境界線なのだろう。
「この状態になる前何してた？」
「寝てた」
「俺もだ、ついでに何所だ？」
「家」
「俺もだ」
一つため息をつく。高校入学一週間がたち、明日は休みだと思って寝たのだが・・・。
御影はだるそうにこういった。
「選択肢1、ワープしてヨーロッパのどこかにいる。
選択肢2、実はここは死後の世界である。
選択肢3、2人して異世界にやってきた。
選択肢4、これは夢である」

騒がしかった獣の鳴き声が一段と騒がしくなった気がする。自分はそんなに動物に詳しくないが、その鳴き声はほとんど日本では聞いたことのないようなものばかでである。
「選択肢４で」
「そうだとしたら、どうしようもないな」
地面をける音が聞こえる。御影もこちらに目をあわしてうなずく。
「もう一回寝ればなおるだろ」
「そうか寝れればいいな」
といって２人同時に地面をけりながらすばやく転がった。
次の瞬間、さっきいたところに大きな物体が突進してきた。
「どうやら選択肢１はないみたいだな」
いつの間にか立ち上がった御影が隣にきて、だるそうにしゃべる。
「現実に自分の身長ほどもある猪はいない」
御影が指差した方向にはこちらに突っ込んできた物体。
物体、つまり長い角を持った大きな猪はもう一度こちらを向こうとしていた。
「どうする？」
「おとりを頼む」
御影は折りたたみナイフを手に持っていて、横に離れていく。
どんな物騒な物もってるんだよ。いや、確かに自分が巻き込まれる事件は大体物騒だからもっててもある意味しょうがないのだが・・・。
「おとりって何をすれば・・・」
と御影の方を向いていったところで突進する猪が目に入った。
「ちっ！」
横に転がりながら避ける。
よく考えてみれば、影の薄い御影を専制攻撃するはずもない。
いつもそうだ、あいつは。御影から喧嘩を売らない限り、まず狙われるのは自分だ。
御影は影が薄く、意識しないと存在すら気づかれないこともある。

気づけばいなくなっており、気づけば一緒にいるということも多々ある。
そう考えているうちに御影が猪の横に回りナイフを突き刺していた。
この角度からはよく見えないが目の辺りをさしている。おそらく、御影のことだから大丈夫だと思うが、何故か一瞬嫌な予感が頭をよぎった。
「避けろッ！」
なぜそのような言葉が出たのかは分からない。
しかし、その予感は現実の物となる。
猪は確かにひるんだ。しかし、逃げることも、ひるみ続けることもなく、いきなり猪が角を大きく振るい、御影を数メートル吹き飛ばした。
「おいッ！」
吹き飛ばされた御影は受身を取りながら、転がりそのまま、ゆっくり、よろめきながらも立ち上がった。
顔をしかめ、数回咳をした。特に出血は無さそうだが片足を怪我したようだった。
「逃げるぞ」
そう顔をしかめながらいいながら御影はポケットにナイフをしまった。
目線の先には猪。一瞬見えたしまったナイフと御影の手には鮮血が確かについていた。
しかし、その猪は怖がることもなく片目から血を流しながらそれでもなお突進しようとしている。
「おまえ、足は大丈夫か？」
「折れてはない・・・と思う」
「何所へにげる？」
もう一度猪が突進してきた。
動こうとしたが、御影はとっさに動かなかった、いや、足の痛み

で動けなかったのだろう。
このままでは、御影は大怪我、最悪の場合死ぬ。
御影の逆方向に避けようとしていた体に数秒間の迷いが生じる。
頭が一瞬真っ白になり、まずいと焦った時には猪が目の前にいた。
死を覚悟したそのとき。

後ろからドンとい音がし、前から爆発音がした。猪の顔が爆発した？
熱気で思わず腕で顔を覆った。
思わず後ろを振り向くと鎧をまとった、異常に大きな銃のようなものを持った人がいた。
「大丈夫かしら」
聞こえてきたのは女の声であった。
思考は停止していた。何が起こったのか全く理解ができなかった。
ただ、目は猪が逃げていっているのを捕らえていた。
そこで思考は一気に復活した。
「ええ、俺は大丈夫です、ただこいつが」
軽く焦りながら御影の方を見ながらそういった。
言った後で、鎧を着ているという状況に違和感を覚えた。
鎧きてるとは凄い怪しい感じがする。しかもその鎧は金属製ではなく、緑色の鱗が鎧の大半をしめており、それが違和感をさらに増長させた。
「足怪我したの？」
その女は鎧の兜を脱いで、御影の足をじろじろと
顔が見えたその女は若かった。大体歳は２０代ぐらいだろうか・・・？
「折れてません。ただ、痛いですね」
御影は顔をしかめながらも相手は鎧を着ているのに普通にはなしている。

「その手はどうしたの？」
御影の手には猪の血がこびりついている。
「いえ、これは、アイツの血です」
御影が大猪が去っていった方向を指差しながら言った。
すると、女は、首をかしげ、何かを考え始めたが、次の瞬間には考えるのをやめていた。
「そう、じゃあ、・・・ここにほっとくわけも行かないし」
いってポーチから筒のようなものを取り出し、ピンのような物を抜いて投げた。
その筒は地面に落ちると緑の煙が噴出した。
のろしのような物だろうか。
その上がっていく緑の煙を見ながらため息をついた。
とりあえず助かったことと、
やっぱりこれは現実ではないということだ。

二話　猫力車（？）の上で

のろしを上げて誰かに何を知らせているかわからないが、「ちょっとまってね」と言われたからには待つしかない。どうせ他に頼りはないのだ。

待っている間に女の人を観察できる精神的余裕がうまれた。

驚くべきは、鎧を着ているということ、武器を持っていること以外に、赤髪であったということだ。よく知らんが、普通、髪は染めない限り赤くならないだろう。そして、染めたという感じは半分以上勘だがしない気がする。顔は二十代前半から十代後半・・・かな？

美女、と形容するのは多少大げさであるが、じゅうぶん、かわいらしいと思う。

そんなことを考えていくうちに、何かがきているのが見えた。おそらく、荷台のようなものであろう。おそらく人を呼んだのであろう。

しかしやってきたのは、おそらく、骨と何かの皮と植物でできた粗末な人力車。いや猫力車といった方がいいのか？

「なんでもありだな」

「ああ」

思わず自分が漏らした言葉を肯定する御影。

つまりは、猫が、ひいていた。しかも、その猫は二本足でたっていた。

あまりに非常識すぎる光景を見続けているため感覚が完全に麻痺していたのか、特段驚くことはなかった。最早、ああ、そういうものなんだと思う程度である。

「ご苦労様」

「そこの二人はどちら様ニャのですか」

首をかしげ、お決まりの如くニャがついていることに笑いそうに

なってしまった。
「ちょっとね」
と女の人は苦笑いをしながら、こちらを少し振り向き、なにやら猫と話し始めた。
御影は休めの姿勢であたりを見回しており、自分は猫をじっと観察していた。驚きはしなかったがやはり、気にはなる。自分に見られていることに気がつくと、その猫は首をかしげた。現実の、つまりは四足歩行の猫とはまた違ったかわいさである。
「さあ、乗って」
といつの間にか、猫力車―（？）に乗っている女の人にいわれた。
どこへつれていく気だろうと一抹の不安を感じはしたものの、現実とは思えない、自分が一切知らない世界にいるという異常性を考えると、乗らざるを得ないということを頭で確認しつつ、猫力車―（？）に壊れないかどうか足で大丈夫であるかどうか確認下ののちに乗った。
・・・・
猫力車の上は案外狭く、女の人と自分は向かい合わせに座り、御影はその横で頭を自分側に向けて寝ころんでいた。驚くべきは猫が一匹―（単位は匹でいいのか？）で三人が乗った猫力車を引いていると言うことだ。
初めて乗ったことで緊張しているのもあり、できるだけ面積をとるまいとがんばっていたが、女の人に笑われてしまったので、今は普通に座っている。
対して御影は「足痛いから」と一言言うなり、寝転んだ。正論なのだが、遠慮とか、引け目とかないのだろうか・・・。
御影の目は閉じているが時折車がゆれる中で体勢を時々変えているので寝てはいないと思う。
ついでに、その女性は大猪を追い払った巨大な銃は折り畳んで背負っていた。兜は脱いだままだが緑の鱗でできた鎧はいまだに着ている。

「あなたたちの名前は？」
と女性はなかなかに厳しい声できいてきた。まあ、自然な質問だろう。
しかし、自分は恩人とはいえ見知らぬ人に名前を言うことに躊躇してしまった。
「私の名前はアリス。近くの村でハンターをやってるわ」
と朱山の戸惑いを感じてか自分から名乗り始めた。
ハンター、「狩る者」？猟師か？と考えてみるが全くイメージと目の前のアリスが噛み合わない。
自分はいろいろ困惑気味だったが、いつもの自分のことを考えると普通に名乗るだろうと考え名乗ることにした。
「朱山大和だ」
「あなたは？」
御影に名前を言うように促すが、当の本人はなぜか狸寝入りである。
気まずい沈黙が数秒流れる。
「こいつは蛭沼御影です」
結局自分が言うことにした。
「ヤマトにミカゲね。どういう関係？」
友達ですと自分が答えようとすると、
「さっき出会ったばっかです」
片目だけあけた御影が答えた。自分が怪訝そうな顔を御影に向けたがその時には開けた片目を閉ざしていた。
「あなたたちはどうしてあそこにいたのかしら？」
「それは・・・」
言葉に詰まる。自分でも分からないというわけにはいかないし、事情を説明してもおそらく理解してくれないだろう。精神病院があるのかどうかはしらないが、行きたくないのは確かだ。
詰まったところで御影が体を起こしながら、
「二人仲良く記憶喪失なんです。それで・・・・」

前半、嘘の話をふまえながら、大猪が突っ込んでからの後の話を正直に話していた。
どうやら、嘘を狸寝入りしながら考えていたようだ。
声に震えもなく、普通の人が聞けば嘘だと分からないだろう。
親しくない者に対してはあまりしゃべろうとはしない御影を見てきた朱山は違和感を禁じえなかったが、アリスは自分たちと会ったばかりのためあまり気にしなかった。
「記憶喪失・・・ねぇ」
完全にアリスは怪しんでいた。まあ、普通怪しむよな。というより、記憶喪失だろうがなんだろうが、いきなりこのような状況になった場合、自分のように現状の把握で手一杯であるのが普通であり、御影のように少々とはいえ先のことまで考えれるのは少々異常だとも思う。
「嘘じゃありませんよ。ハンターと言うのもなんだか知りませんしね」
「はぁ～、ほんとに記憶喪失なのかね・・・」
ため息と同時に口調が柔らかい物へと変わった。代わりに目には信用できないという色がありありと浮かんでいた。
これまた、気まずい沈黙が流れる。
「俺たちはどうなるんですか？」
さっきからずっと気になっていた質問を今、口にした。
今までの質疑応答が口調的にも職務質問の類であるとしか思えない。
「一応、密猟者としてギルドにさしだすわ」
この言葉にはさすがにため息をつかずにはいられなかった。いきなり分けわからんところにいると思えば犯罪者となっているのである。逆にため息をつかない奴がいたら教えてほしい。御影でさえもため息をついて、ないな。うん、隣にいたよ、ため息つかない奴。灯台下暗しってやつだな。
「と、言っても記憶喪失の人をほっとくわけにはいかないのよね」

そう、小声でつぶやきながら、意味ありげにアリスはニヤリと笑った。

このとき御影を見る余裕などなかったからきずかなかったが、御影もニヤリと笑っていた。

二話　猫力車（？）の上で（後書き）

実は題名に特に意味はなかったりする。
思いつかなかったのだよ・・・。

三話　キャンプと薬（前書き）

更新遅いですよねすいません。

三話　キャンプと薬

そこから、特に会話もなく、自分にとっては誰も喋らないという居心地の悪い時間が流れていった。御影と喋ろうにもあまりにも親しく喋ったら記憶喪失という嘘がばれる（信じてもらっているかどうかは微妙だが）ので、そう親しげにはしゃべれない。
御影は御影で寝ころびながら、外の景色を見ている。
現実にはいない草食恐竜もどきを見つけていく。
アリスはアリスでなにか考え事をしているようであった。
自分は、気まずく思いながらも、どうしてこうなったか考え始めるが、これは夢か？夢だとしてはリアルすぎる。頬をなでるそよ風。猫力車の揺れと二足歩行猫のにゃーにゃーいっている鳴き声。どれをとっても現実としか言いようがない。しかし、現実だとするには異常すぎる。だったら、やっぱり夢か？とどうしても思考が堂々巡りになっていく。
とりあえず、寝てみるかと思うも、夢で寝たら夢が覚めると言う確証もなく。しかも、猫力車の揺れはそこまできつくないとはいえ、寝たら落ちてしまいそうだ。寝転んでいる御影は時折体を動かして落ちないように注意しているのだ。
一度ため息をついて、どうしようもない思考を停止し、現実にはそうない、青々とした草原と森と現実には存在しない草食恐竜もどきを眺めるのであった。
・・・・
いきなり猫力車が止まり、慣性で転びそうになった。
「ついたわよ」
とアリスが不意に言った。御影と自分は隣や後ろを眺めていた目を前に向けた。
猫力車が止まったのは、木の杭で囲まれた場所の前であった。
壁のように打ち付けられた杭は上れないように先をとがらせており、

その付け根には溝が掘っており、とがった杭がこちらを威嚇するがごとく斜めにさしてある。さっきの大猪とか、野生動物が入れないようにするためにあるのだろう。
アリスは、はやく降りるようといった後、唯一堀に橋が架かっているところにいき、扉を開けこちらに来るようといった。
扉にはいると、屋根はぼろぼろな布で寝心地がいいとは思えない簡素なベッド、赤い箱に青い箱、石で囲ったたき火をするための場所などが目に映った。
一言で言うならばキャンプ場であった。
アリスは御影にベッドに寝ころぶよう言うと、青い箱を探り始めた。どうやら、その青い箱の中は、物資が入ってるようであった。
「応急薬は・・・、あった」
取り出したのは緑と薄い青が混じったような色がした液体のはいった小瓶であった。
アリスは御影に怪我したところを見せるようにいい、動かないようにいい、大猪の反撃で赤くはれて怪我している部分にその液体を塗り始めた。
湿布かなと、自分は思った次の瞬間、赤く腫れていた足の怪我が魔法のごとく治っていた。
「これはなんですか？」
御影が思わずアリスに聞いた。
「応急薬よ。ある程度の怪我ならなおせるわ」
御影は驚きその小瓶と治った足を交互に見、なにやら考え始めたが、すぐ首を振って思考を停止させたようであった。
自分としてはあんなに驚いている御影はなかなかに滑稽であったが、自分も驚いた。
「ここでちょっと待ってて、中いじっちゃダメよ」
アリスは応急薬がはいっていた、青い箱と赤い箱をさしながらいい、入ってきたところとは反対側にある扉から出ていった。
「さっきのどう思う？」

と御影に聞いてみた。
怪我が一瞬でしかも、変な液体をかけたことで治ったのだ。あまりにも異常である。猫が二足歩行でしゃべったことぐらい衝撃的であった。もっとも、さっきのは湿布だと思っていたものが実は凄い薬でしたという、びっくり箱を渡されたときのような驚きであったが・・・。
「夢である確率が高まったな」
御影は当たり前の如く答える。その顔にさっきの驚きは残っていない。
「頬でもつねるか？」
「足を強打して結構痛かったから遠慮しとく」
御影はそう答えて顔をしかめながら短く息を吐いた。
「にしてもなあ・・・。密猟者か・・・」
どうしても、この先どうなっていくのかが気になった。
頼りはアリス以外ない。それに、アリスの立場は詳しくはよく分からないが、自分たちの味方かどうか、人格的にはわからないが、立場的には微妙だと思う。
「もう成り行きに身を任せるしかなさそうだな」
いつも良くも悪くもマイペースな御影らしからぬ発言だったが、現在の異常性を考えるとそれも当たり前だった。自分も現実に思考が追いついていないのである。
「だな」
おれも、それに同意せざるを得なかった。
後で考ええれば、御影は数倍、自分よりも色々考えていたのであるが・・・。

三話　キャンプと薬（後書き）

場面変更時が「・・・・」じゃあちょっと虚しいですね。
次回から変わる・・・かも・・・。

四話　猫力車から鳥車へ

その後、アリスが出ていった扉つまりは、キャンプに入った扉とはまた別の扉を開けこちらに来るよう言われたのでいってみると、意外なことに、そこは平原でも森でもなく、白色の岸壁があり、その脇に道が続いていた。異常なのはその道中央にダチョウのような丸い鳥が引いているリアカーのような、というか馬車のようなものがあった。

馬車は簡素ながらも屋根ちゃんとがあり、扉がないため中が見えるが椅子もちゃんとある。

大和は馬車になど乗ったことは勿論ないが、普通の馬車と言った感じであった。

普通でないのは、引くのが馬でなく鳥でその御者はまた人ではなく二足歩行する猫であった。

猫力車のあとは、鳥車か・・・しかも、業者は猫。と思いながら、アリスに促され鳥車に乗った。

進行方向を前とすると、後ろに御影、右に自分、左にアリスが座った。

時折ダチョウもどきがグワッとなきながら、岸壁に沿いながら鳥車は進んでいる。

「街にはすぐ着くわ」

とアリスがいった。

「近くに街があるんですか？村ではなくて？」

こんな大自然の近くに大きな町があると言うことはあまり想像していなかったので、村ではないかと思ってしまった。

「ええ。結構おおきい街よ。この周りでは結構名のしれた街でシュタールって街なんだけど・・・」

としってる？と語尾につきそうな感じで答えてくれたが、

「初耳ですね・・・」

そう、当たり前ながら完全に初耳だった。
「まあ、行商人とか近くの村とかから来る人もいるし、もしかしたら知ってる人いるかもしれないわよ。もちろんその前にギルドに引き渡すけどね」
とアリスはわらった。こちらとしては笑い事じゃないと思うのだが、いまいちどうなるかがわかないので、ですよねーと答えた。
まあ、たぶん知り合いには会えないですと思いますけどね。とは口が滑ってもいえない。
「密猟の罪はどれくらいなのですか？」
と御影が他人事の如く聞く。確かにそれは気になるところだ。
「牢の中で一ヶ月生活だよ」
と言うことは禁錮一ヶ月ということかな？現代の刑法でどれぐらいの罪になるのかなど、一部を除けば、普通の高校生である大和にわかるはずがなかった。
冤罪か・・・。密猟かどうかどうやって決まるのかは、詳しく知らないけど、おそらく現行犯逮捕。現行犯の冤罪か、どうしようもないな・・・。軽く黄昏てる自分を無視して、続けて御影が聞く。
「それ以外の罰は？」
「ちょっとギルドの役人になりにくくなったりするぐらいかな。まっ、別に密猟なんて探せば何所でもやってるしね。だれも気にしないわよ」
とアリスは手をひらひらさせながら答える。
「その後はどうなりますか？」
「えーと、・・・その後って？」
「じゃあ、仕事を探せるところって知っていますか？」
「ああ、そういうことね。そっか、身寄りがないもんね」
というと、アリスは人差し指をこめかみに当てながらぶつぶつと時折独り言を言いながら考え始めた。
「いや、別にそこまで悩まなくていいですよ。町に送るだけでも十分世話になっていますし・・・」

と自分が取り繕おうとしたそのとき何かをひらめいて、大声でこういった。

「そうだ、あなたたちハンターになりなさい。それがいいわ！！」

「い、いきなりどうしたんですか？」

若干引き気味に御影が聞いた。

「ハンターなら、別に親が犯罪者であっても親がいなくても身分が何であっても記憶喪失であっても誰でもなれるし、それに収入は高いわよ」

御影をびしっと効果音が付きそうな感じに指差しながら早口で答えた。

「というか、その『ハンター』ってそう簡単になれるのですか？」

「たしかに、なるための費用は結構高いし、訓練所に入るための競争率は高いわよ」

駄目じゃん。そんな空気が馬車内にながれる。主な空気発生源は御影と自分のふたりだが・・・。

「大丈夫よ。一応私が色々いっとくから。まだ、十五歳だけど・・・」

「え゛」

思わず話を遮ってしまった。ちょっと待てよ・・・。同い年・・・？

「失礼だぞ、大和」

御影がぼそっと呟く。

「いやもうちょっと上かなって・・・」

いや、確かに失礼だったかな？

しかし、アリスはそのことにあまり気にしてないようであった。

「そういえばあなたたちっていくつなの？」

「十五歳です」

「それじゃあ私と変わらないじゃない」

こちらも、意外だったようだ。
「えーと、いくつだと思ってました？」
「うーん、もうちょいしたかとおってたわね。ドスファンゴは、その歳じゃあ倒せはしなくても追い払うことぐらいならできるから」
「ドスファンゴ・・・？」
「ああ、ドスファンゴって言うのはあの猪のことね」
「そういうものなのか？」
「といっても、ちゃんとした装備をしないときついと思うけどね、そういえばミカゲはいくつなの？」
「同じく十五です」
「じゃあみんな同い年なんだ、っと街が見えてきたよ」
とアリスが前を指差した。話に集中していたため、気づかなかったが、がけはそこにはなく、目の前には、草原が広がっていた。
アリスが指を指した方向には街の門らしき物があり、門の上にはでかでかと、シュタールと書かれてあるのが『読めた』。
「でかいな、なあ、御影？」
「うん？、ああ、そうだな。」
「どうした？足が痛むか？」
「いや、驚くべきことに足は完全に治ったのだが、ちょっとな」
といいながら、アリスをちらりと見、御影はなにかを考え始めた。
その後も、ハンターについての話から盛大に話題がそれた話を続けた。

四話　猫力車から鳥車へ（後書き）

電車のアナウンス：次は、御影ー、御影に～
友（俺が小説書いていることを知らない）：御影ってすげえ名前だな・・・。
俺：あ、ああ。

御影って駅名というか地名だったんだな・・・。
名づけるとき影がつく名前を適当に探したのだが、さすがに驚いた。
まあ、御影石とかありますけどね。

五話　シュタール

いままでは脇道だったようで、大きな道と合流した。地面も舗装はされていないもののさっきより踏み固められており、揺れも格段に小さくなった。他にも荷物を背負って歩いていく行商人や、おそらく、この町で仕入れをするであろうからの馬車、ではなく鳥車を走らせている者もいた。

待ちの看板は近くなっていった。そして近くで見ると門はかなりの大きさで、その両側には大きな人の像があった。どちらも鎧を着ており表情は見えないが、剣を地面に刺し、歓迎と言うよりは追い払うと言った感じに見え、その門の回りには壁で囲まれており中世の砦を思い出した。

憲兵が門で検問をしいているようで、旅商人や、旅人は、そこで一々何かをチェックされている。

この鳥車も同様にチェックを受けさせられた。

アリスは何かカードを取り出し、見せた。

「アリスさんですね。後ろの御二人は？」

そのカードを見る前に憲兵は『アリスさん』といった。知り合いだろうか？

「後ろの2人は、訳あって連れて行かないといけないの」

「分かりました。御名前と性別は？」

「ミカゲにヤマトよ。見ての通りどちらも男よ」

「はい。いっていいですよ」

と何かの紙を取り出し書きながら言った。

▽▽▽

鳥車に乗ったまま入るわけにはいかないらしく、鳥車から降りて、アリスを先頭に街を歩いていく。

通りは、レンガで舗装されており、道はなかなかに込み合っていた。アリスの赤い髪も珍しいと思ったのだが、どうやらこちらの常識は

通用しない。
歩いている人達は髪が凄いカラフルだ。赤だけでなく、緑、青そして自分たちのような黒もちらほらと見かけた。街の前から時折、髪の色が変わっている人を見かけたが、ここまでとは思わなかった。
アリスについていくが、アリスは歩くスピードがそんなに早くはないので見失い心配がなく、周りを見る余裕があった。
町の方ははにぎやかでありところところで、露天や武器屋などがみえてきた。
露天で売っている果実などが見たこともない物から、見たことはあるものの大きさが桁違いに違うものなどがならんでおり、武器屋の周りでは明らかに銃刀法違反だろと思うようなでかさの刃物を持った男しかも、鎧着用してる奴とかがたくさんいた。
しかし、店の看板を見ていくうちに、違和感を覚えた。
読めるのだ字が。看板にかかれえた文字が。
違和感なく読めることに違和感を感じた。
日本語でないのだ看板の文字が。
それは明らかに日本語ではない、そして英語でもなく見たことのない文字ばかりだ。強いて言うならハングル文字が近いが、それとも全く違う、文字でどれもかかれていた。
思わず歩みををとめる。頭が混乱し始めた。なぜよめるのか、いつよめるようになったのか。記憶をたぐってもたぐっても当然のことながら出てこない。
自分が本当に記憶喪失ならまた違った感じ方をしたのかもしれないが、俺は残念ながら記憶喪失ではない。
「気づいたか」
後ろから。御影に話しかけられた。どうやら御影はあの看板を見た時点で気づいていたようだ。今考えればあれを見た瞬間に気づかなかったのがおかしいのだろう。いや、それとも、無意識のうちに気づかない物なのだろうか？
「いったい、どういうことだ。あの文字は・・・」

「わからん。後に2人だけになったときに話そう」
「けど・・・」
「今考えても混乱するだけだ。それに混乱するのは色々と不味い」
一度、息を吐いて落ち着こうとする。今までの異常は外部の異常だったが、まさか、こっちの体の方、内部の方まで異常になってるとはな。けれど、異常と再確認すると逆に落ち着いてきた。
額に手を当てると冷や汗をかいていており、それをぬぐった。
「どうしたの？」
と先頭を歩いていたアリスがこちらを向いて止まった。
「いや、なんでもない」
と首を横に振る。しかし、態度がおかしいと感じ取ったのであろう。アリスは再び歩き始めながら何かを考え始めたそして、その理由はすぐに思い至ったらしく、いきなり急停止し、自分はアリスにぶつかりそうになった。
「あっ、そろそろ昼の時間だった」
勘違いではあるが、確かに腹が減ってきているのは確かである。と言うか、意識するとかなり腹が減っていることが分かった。そして、それは御影もどうやら同じのようだ。
「近くに食堂あるから、よる？」
「いいのか？」と自分が聞く。
確かにありがたいが、自分たちはよく分からないが密猟者ということになっている。密猟者って言うぐらいなら犯罪者と同義だろう、なら今は連行中といったところであろう。その途中でこういうことはいけないのでは？そういえばいまさらながら気づくが手錠もかけられえてない。
「いーのいーの、何とかなるよ。多分」
「それってよくないんじゃあ・・・」
っていうか、『多分』ってなに？
「いいのよ」とアリス。
「いいのだよ」と何故か御影。

「何でおまえが・・・」
「腹が減ったからだ」
当たり前の如く言い張る。
「いや、おれも減ってるけどさ・・・」
「じゃあ、決まりね。こっちよ」
とアリスと御影の独壇場で決定した。
アリスはそのままっすぐ進んでいき、十字路を横に曲がり、そのまま進んでいった。
すると食べ物屋が数件並んでいる所につき、そのうちの『満月食堂』と言う看板がかかった店の中にに入っていった。

五話　シュタール（後書き）

場面変わるときの『・・・・』を『▽▽▽』にしてみました。
ついでに私のこれを使ったときの第一印象は『微妙』です。
でも、『・・・・』は使い慣れてますが、虚しい感じがするんですよね。
とりあえず『▽▽▽』を使っていこうかと思います。

六話　酒場でのちょっとした騒乱（前書き）

この小説、親に隠して投稿してるんですけど、今日は親がいないので二日連続投稿が可能になりました。
今回は長いです。

六話　酒場でのちょっとした騒乱

満月食堂の中は騒がしくにぎわっていた。奥の方でコックが数人あわただしく料理を作って、できた料理をあわただしく接客係の店員が盆にのせて運んでいる。内装は簡素な物であるが、壁にかけてある多くの額縁に入った魚拓がひときわ目を引いた。しかも、その魚拓の隅には魚の名前も書かれてあるのだが、それが、やはりと言うかなんと言うか、知らない名前がほとんどであった。異常なのはそれだけではなく見回してみると、この食堂にいるほとんどの人、正確には客のほぼ全員が鎧をきて、武装をしていた。そうしていないのは、店の従業員ぐらいであり、雰囲気的には食堂というより酒場といった感じである。酒場兼食堂といった感じだろうか？

このとき、大和の勘は正しく、あまり一般には知られていないがこの満月食堂は、夜は酒のメニューがふえ、料理は昼とまた別のようなつまみのような物が多くなり酒場のようになっている。しかしながら、綺麗な景色が見れる酒場や、もっと酒の値段が安い酒場などが回りに多くあるのであまり知られてはいなかった。

空いた席に行くまで数度、人とぶつかりそうになりながらも、三人は席に座り、アリスはせおっていた武器を机の下においた。こちらとしては武器だけではなく鎧を着たまま座ったりするのは窮屈ではないか？と思ったのだが、アリスはなれているようであった。

若い女の子の店員がメニューと陶器で作られた水に入ったコップを渡してくれた。おそらく看板娘なのであろう笑顔を振りまきながら盆を持って厨房の方へ行った。

とりあえずメニューを見ると時折知らない料理があった。知らない料理を頼んで、自分が食えないような料理が出てきたら困るのでとりあえずしらない料理を無視して、適当にとんかつ定食的な物に即決し、頼むことにした。出されたよく冷えた水で渇いたのどを潤しながらメニューを見ていると、お金の単位はよく分からない記号で

あった。１０とか２０とか書かれてあるが、物価がよく分からない。
アリスは自分が知らない料理を頼み、御影は、アリスとは違う知らない料理を頼んだ。
訳分からん料理をよく頼めるな・・・。と自分がそんな目を向けていると、アリスも何故か、え？それを頼んじゃうの？と言った感じの驚いた目をしていた。
そんな感じで御影が頼んだ料理がどんなにえげつない料理か（さすがに食えるだろうが）想像しながら注文していたところ、店の中央から大声がした。
ビクッとからだが反射的に動き、そちらの方向に体ごと目を向ける。
「またですか」
と店員の女の子は見慣れたようにそれでも顔をしかめながら言った。
「またね」
とアリスは軽いため息をつきながら言った。視線の先には男二人が言い争っていた。
視線をアリスに戻し質問する。
「喧嘩ですか？」
「ええ、時折喧嘩があるんですよ」
といいながも、女の子以外の店員もなれているのか見てみぬふりであり、そこを避けて通っていっている。うーん現代日本なら、誰もが煙たがって近寄らないだろうが、こちらはほとんどの客完全に無視しており、店員すら、困ったなと思っている人が少ないように見えた。
それでいいのか、と思っていると分かったのか。
「まあ、武器を抜かない限りは問題ないしね。それに、まだ口喧嘩だし」
とアリスが喧騒の中ちょっと声量をあげていった。確かに口喧嘩ならまだ大丈夫だろう。まあ、日本じゃあ「はい、ちょっとこっちこようか」と警察が連行していくぐらいだろう。
「まあ、無視ね」

「それでいいのか？」
「ええ、騒ぎが大きくなったら憲兵がくるし、店の物を壊したらその分払う額が増えるだけだし、それに、つかまえちゃえばいいだけだしね」
「つかまえちゃえばいい？」
「ええ、ギルド領内では罪を犯した人を捕まえてギルドに引き渡せるの、例えば、あなたたちは現行犯の密猟でしょ？だから、私が今やってるみたいに拘束できるのよ。もちろん証拠は後から調べるわよ」
と例えばのあたりから店員の女の子に聞こえないように言った。
「拘束の割には緩いですが・・・」
「あはは、まあ、逃げそうにないしね♪」
「ていうか、俺たちはともかく拘束ってそう簡単にできますかね・・・」
一応暴れれば自分たちも逃げれる自信はあるのだが、その後が問題である。
いってしまえば、変に行動をすると只でさえ悪い状況がもっと悪化する可能性が高い。
と、もう一度流れに任せようと心で確認した。
「もちろん、相手が暴れた場合、大けがを負わせない限り、許されるわよ。まっ、そんなめんどくさいこと誰もしたがらないけどね」
「俺らは今拘束されてますが・・・」
「あら、猪と追いかけっこの方がよかった？」
「いいえ、遠慮しときます」
自分はわざとらしく言い、笑った。
すると、アリスも楽しそうに笑った。
そんな和やかな笑いに反し、口喧嘩は激しさを増して、ここまでその内容がはっきりと聞こえるようになりはじめ、いつものことだと無視していた客たちも連れとの話を中断しそちらへ視線を向ける者が現れ始めた。

自ずと自分の視線も再び喧嘩している二人へと移る。
同じテーブルで、たって口論している二人とも、銀色の鎧を着ており、それは、自分たちつまり、現実の西洋の鎧と同じような感じの鎧であった。片方は短め、といっても３０センチはある剣、アリス曰く片手剣、を背負っており、もう片方は身長ほどある剣、アリス曰く太刀、を同じく背負っていた。
ダンッと音が鳴り、陶器おちてが割れる音がする。テーブルをたたいた拍子にコップが落ちたようだ。もちろん二人は顔を真っ赤にしながら口論しているためそんなことは歯牙にもかけない。もしかしたら顔が赤いのは怒っているだけではなく酒によってるのかもしれない。
「さすがにまずくね？」
「うーん確かに」
とアリスが困ったように言った。手を出すかどうか迷っているようだ。
しかしながら、アリス以外のほとんどが周りの人達は無視を決め込むか観戦モードだ。
そう考えている間にも、口げんかは激しさを増していく。
机を再びたたき、太刀を背負っている男がまわりに、いや、食堂中に聞こえる大声でこう言った。
「この無能が！！」
「てめぇ！！」
その言葉にもう一人の男が片手剣を構え、目の前の男に対しふりおろそうとする。そのふりおろされた片手剣は太刀を持った男に大けがを負わせる距離であった。
それを見ていた客はおそらく男の断末魔が上がるだろうと思った。
しかし、男のうめき声、叫び声は一切せずパリンという、これまた陶器が割れる音がした。
「あ、ごめん」
こちらを向いて目を白黒させている店員の女の子に謝っておく。女

の子からすれば横に何かが通り過ぎた程度にしか思っていないだろうが。
「おまえって本当に器用だよな」
と御影が軽く笑いながらいってくる。
「うるさい、おまえの方が器用だろ」
そういいながら、喧嘩していた2人と目が合わないように、視線を机に向ける。
「手先ならな」
と顔だけ笑いながら。
さっきまで手にあった水が入ったコップは手元にはなく、喧嘩している2人の机に割れた状態で転がっていた。
ついやっちまった。気づけば手が出ていた。と後悔しても時間は戻ってこない。
自分が思わず――――反射的といってもいい、投げたコップは片手剣の側面にあたり、水をまわりに撒き散らしながら割れた。勿論、その割れた破片と水は机と2　人にかかる。いきなり水と陶器の破片が掛かったために、振り下ろされた片手剣は思いっきり空振り、2人とも何がおきたか分からないという顔をしている。
「おい！！そこのお前！！」
あ、ばれた。
片手剣を持った男はこちらに近づいて、店員の女の子を押しのけ、自分を睨んだ。
「どういうつもりだ！！なんだ、女連れて浮かれてるのか？それとも、殴られてえのかぁ？」
こっちに絡んできた。反射的な行動とはいえ殺人にならなかったのだから感謝してもらいたいものだ。まったく。というか、『女連れて～』とかいってるから、いつものことながら完全に御影気づかれてないよな。絶対あいつ俺とアリス、2人だけしかいないと思ってるよ。
そう思いながら喧嘩買おうか穏便に済ませようか迷っていると、急

にアリスが割って入ってきた。
「どういうつもり、ってのはこっちの台詞ね」
「ああ？」
「私はアリスよ。自分で言うのもなんだけどこの町じゃ結構有名な名前だと思うのだけど？」
アリスの顔をみると忌々しそうに男は舌打ちをし、近くの椅子を思いっきり蹴り、出口に向かっていった。
「権力ってこういう時につかえるわね～」
とアリスはのんきに言う。自分の同い年の人がどんな権力持っているのか気になったが聞いてもどうせ分からないのでその疑問は飲み込んだ。
喧嘩が終わったからか食堂は何もなかったように再び喧騒を取り戻していった。
押しのけたときに転び、そのまま、恐怖か緊張かで動けなかった女の子に手を差し出す。
「あ、ありがとうございます」
「すいません、自分のせいで」
「いえいえ、あのままだったらもっと厄介なことになってましたから」
と店員の女の子はそういうと自分の手を握り起き上がった。
「えーと、ケガは？」
「大丈夫です」
「そう」
「あ、料理楽しみにして下しさいね密猟者さん♪」
とどうやらアリスとの会話を聞かれてたらしい。しかし、そこには非難の色はなくただ、普通に笑っているだけだった。
「密猟者じゃなくて朱山大和です」
「じゃあ、ヤマトさん、料理楽しみにしてくださいね。あ、私の名前はニーナと言います」
とまた笑顔を振りまきながら厨房の方へ途中こけそうになりながら

戻っていった。
それに自分は苦笑しながら料理を待つことにしたのだが、このとき、気づかなかったが後ろでこんな会話がなされていた。
「少々騒ぎ起こしてもいいですか？」
いきなり御影がそういった。
「罪をまた一つ犯す気？」
アリスの声は厳しかった。その中には非難の色も勿論混じっていた。
「大丈夫です。罪は犯しません」
・・・アリス曰くこのとき御影はニヤリと擬音語が付きそうな顔をしていたそうだ。
御影はそのまま立ち上がり、出口に近づいていく男の後ろをついていく。
全く何も知らない自分は出口の近づいていく御影にトイレなら逆にあるぞ、と後で考えたら的外れなことをいったが、食堂の喧騒にかき消され、御影には届かなかったようだ。

ここで、少々言っておくことがある
一つ、普通レストランは後払い、つまり、食べた後にお金を払う。
それはこの意味不明な夢だか異世界だかでも同じらしく客は食い終わったのち、お金を支払っている。つまりは、後払いであること
二つ、犯罪を犯したものは現行犯である限り、その人を拘束し、憲兵もしくはギルドに引き渡すことができるらしいと言うこと。
三つ、その男は鬱憤を晴らせずいらついており、その怒りの矛先はいつの間にかこの場から太刀を持った男がどこかえいったため何所へも向けられなく。理性が一部吹き飛んでいたこと。

御影は、その男が店の外の道路を踏んだ瞬間、上段蹴りを頭に食ら

わした。
そのあと、こちらからは一切見えなかったが男のうめき声や道行く人の悲鳴が聞こえた後

「すいませーん、憲兵さーん、食い逃げでーす」
御影が大声でそういうのが聞こえた。

六話　酒場でのちょっとした騒乱（後書き）

今回はいつもの二倍の量あります。
そろそろ亀ではなく、兎のように進めないとこれがモンハンの二次創作だと言うことを忘れてしまいそうですねw
次々回辺りにモンハンらしさがちょっと出てくると思います。
ただ、想像を裏切った形だと思いますが。
あ、あと御影の料理は次回に回しました。
追記：モンハンらしさが出るのは次々々回でした。

七話　丸焼きと言う名の地雷（前書き）

累計ＰＶ１，１８４アクセス、ユニーク２７８人を達成しました！
いまいち凄さがよく分からないですが、ありがとうございます。
といっても、まだプロローグに近いですけどね・・・。

七話　丸焼きと言う名の地雷

満月食堂は先ほど軽いとはいえ事件があったのに、早くもそのにぎやかさを取り戻していっている。
「まったく」
とアリスは席に着く。憲兵と話さなければいけなかったためご機嫌斜めだ。
「すいません。アリスにまで話を聞かされることになるとは思いませんでした」
と御影が全然反省の色を出さずにアリスに謝る。しかし、御影は実際そう思っていると思う、多分。
「しかし、よく考え付いたな」
と俺がさっきのことに感心する。
「まあ、予想できたけどね」
アリスがあきらめの軽いため息をついた。食事でも取らせようと軽い気持ちで入った食堂でこんなことが起こるとは思っていなかったのだろう。しかし、そこには御影を攻めるような物はそこまで言うほどなかった。
「そうか？」
「そうよ。というか、あんなあくどい笑みを見せながら喧嘩売られた相手を追っていった時点で分かるわよ」
「大和は女の子をナンパしようと必至だったもんな。仕方ないな」
御影はいつものことだけど困ったなと言う風に苦笑する。
と言うフリをしやがった。
その演技にまんまと騙されたアリスは蔑む様な目でこちらを見てくる。
「アリスお願いだからそんな目で見ないでくれ。あれはナンパじゃないぞ」
「たのしそーに話してたわね」

「いや、世間話だよ。世間話」
アリスは、別に大和がナンパをとか、そういう話はどうでもいいが只単純に大和をからかって遊んでいるようであった。
「まあ、丸く収まってよかったな、御影」
と無理に話題をそらす。
さっきの食い逃げ犯一（？）だが、御影が憲兵にいやな顔で見られただけですんだ。
つけで払う人も時折いるらしく、あれを見ただけで食い逃げとするかどうかは微妙なところであったが、思わぬ援護があった。
その人はコックであり。
そして店の女の子の両親でもあった。
実はその子の両親は満月食堂の店主兼コックだったそうで。娘が倒されたのをみてイラッときていたらしい。とはいっても、倒された程度、憲兵に言っても許容範囲だし、下手に騒ぎを起こしたくなかったと言うのもあり我慢していたらしい。
そこへ、御影のあの行動である。
勿論、憲兵がきて事情聴取のとき、こう一言言った。
『実は憲兵を呼ぼうとしていた』と。
食い逃げ程度の犯罪なら何所でもあるのであろう。ブラックリストでも他の飲食店と作ればいいだろう。しかし、その犯人を思いっきり拘束し、しかも店の店主にこういわれてはしょうがないと、憲兵はその人を渋々捕まえた。
「でも、これって賭けじゃない？」
うまく話題はそれたようだ。
「ああ、アリスの言うとおりだ。男とコックが知り合いだったらどうしたんだ？」
「知り合いの娘を押しのける奴に味方するか？それにツケ払いって言うのは相手にある程度の信頼を置かないとできないだろ？てことは、あの２人は赤の他人ってことじゃない？」
と御影は自分の疑問につまらなさそうに答えた。

疑問形なのはツケについてよく知らないからだろう。というか、現代にツケ払いしてる人は極々少数だろう。
「おお、案外考えてた」
とアリスが意外そうに言った。おそらく考えなしに食い逃げだから捕まえようとしただけだと思っていたのであろう。御影は考えてから動くことが大半だ。
「ついでに、食い逃げが認められなかった場合どうしたんだ？」
「武器を抜いた覚えはないぞ」
『もちろん、相手が暴れた場合、大けがを負わせない限り、許されるわよ。まっ、そんなめんどくさいこと誰もしたがらないけどね』
というさっきのアリスの言葉を思い出した。
それと同時にあの男を拘束している御影の姿。
つまりは倒した状態で男の背中に馬乗りし片手をねじっていたのだ。どうやってあの男を転ばしたか知らないが、大怪我どころか擦り傷程度しかおっていないと思う。
「でもだ、御影もしアリスに迷惑が掛かったら・・・」
「事の発端―（コップ投げ）であるあなたがそれを言う？」
アリスは軽くあきれながらため息をついた。
「う、ごめん」
小声で「まあいいけど」とアリスが呟いたのは喧騒にかき消された。
「ところで、あの女の子の名前なんていうんだろうな」
といって、御影は健気に働いているニーナのほうへ向く。
「うん？どうしてだ？」
御影が今日あったばかりの人に対して興味を抱くのは珍しい。
「いや、なんとなく」
「あの子の名前はニーナだったぞ」
「そうか。アリスさん、この人名前を抜かりなく聞いてます」
「へー」
「いや、だからそんな目で見ないでくれ」
と馬鹿な話をしていたところ件（くだん）のニーナが料理を運んできてくれた。

アリスはミートスパゲッティーのような料理、自分はメニューにもあった定食そして御影は・・・。
「大丈夫？」
アリスが本気で心配して言葉をかける。
「ええ、大丈夫です」
それに普通に答える。
出てきた料理は、巨大化したハチのようなものの肉を焼いたもの、しかもおそらく数匹分もある。
「ついでに料理名は？」
顔が引きつっていると分かりながら聞く。
「『ランゴスタの丸焼き』しらなかったし、安かったから」
個人的に、知らない何かの丸焼きって露骨な地雷だと思うのだが・・・。
「実際、人気ないですからね」
とニーナが苦笑する。どうやら、この料理は本当に地雷みたいだ。
「「「いただきます」」」
と声をそろえていった。しかし、自分たちは箸を取らずに御影のほうを凝視する。御影は、自分、アリスの視線が集中する中、箸で腹の部分の身をつまんだ。
「案外おいしいな」
「うそだろ、おい」
コックの娘の前で思わず言ってしまった。謝ろうとニーナのほうを向くと、
「確かに一度食べましたけど、味も悪くなかったですがもう二度と食べてくないですね。それにその料理、毒腺とか甲殻とか取り除かないといけないから結構手間が掛かるんですよ」
そうニーナがまさかのマイナス意見を、しかもはっきりという。何か嫌な思い出でもあったのだろうか、背中に悪寒が走ったようで体を震わしている。と言うか毒腺って・・・。やっぱりハチのような虫なのか？

「そ、そう」
とアリスは御影から明らかに視線をそらす。まあ、虫の解体ショーをみたら、食欲なくすわな。
「でも、少々食べにくいですね」
と内臓のような物を避けるように箸でくっている。
このときとある番組を思い出した。
確か番組のタイトルは、『ジャングル・サバイバル』だった気が。タイトルの名前で分かると思うが、簡単に言うと、ジャングルで生活する話だ。基本的に虫とかくいながら。もちろん一部を除き人気はなく、そもそも深夜にある番組でその番組の存在を知る物すら少なく、見ている人のほとんどは怖い物見たさに見ている人がほとんどだと思う。その番組の虫を食う光景と御影が箸をつついているモザイクをかけてもいいようなグロテスクな光景はジャングルと食堂という違いはあれ、酷似していた。
余談であるが、大和は父がみているのを数度見たことはあるが、食事中に見たいと思えるような内容ではなかった。
明らかに食欲をなくしたアリスだったが、スパゲッティーを残さず食べ、自分も食欲が少々なくなったが腹が減ってたため全部軽く食った。御影はそのゲテモノ料理を全部残さず綺麗に食べた。
とりあえずアリスが勘定をし、おごってくれたアリスと「また来て下さいね」とわらうニーナに礼をいい、食堂を出て本来の目的地へ向かうためアリスについていった。

七話　丸焼きと言う名の地雷（後書き）

『ランゴスタの丸焼き』です。
作者的には頑張れば食えると信じています。
甲虫らしいですが、腹の部分なら大丈夫だろう！と言う発想。
内臓がほとんどを占めてそうですけどねｗ

八話　『朱山大造』（前書き）

はーい、結構今回内容がぶっ飛んでます。
いまさらながら言いますけど、この小説内容がぶっ飛んでます。

八話　『朱山大造』

「牢獄の中にいる！」
牢屋に入れられて看守がいなくなったのを見計らい御影が呟いた。
「どうした？いきなり」
「状況の再確認だよ、たぶん」
多分ってなんだよ……。
しかし事実、今現在牢獄にいる。服は制服ではなく真っ白な囚人服。目の前には鉄格子。灰色の壁にうつる明るい光をかたどる窓にも鉄格子。
こうなったのは、アリスがいう『ギルド』の本部とやらにはいったからだ。『ギルド』の建物につくなり、扱いは一気に悪くなった。いや、正確に言うとアリスの対応が異常だったのだが、ついて引き渡され、持ち物を探られ没収、着替えさせられ鉄格子の中へ。看守のおっさんが「一ヶ月そこで反省してろ」という台詞をはいたので、おそらくこのまま一ヶ月この中で生活するのであろう。
取り調べも裁判もなく根掘り葉掘り聞かれ色々長引くよりはましであろうが、冤罪が簡単に作れそうだ。ここの司法制度はどうなってると突っ込みたくなったが残念ながら突っ込む相手もいないのでしょうがなくため息をつく。
まあ、自分は法律の専門家ってわけじゃないし、自分たちの場合、アリスに言われて自白もしたししょうがなかった。
「まあ、一ヶ月労働ですむんだしいいか」
と無理やりポジティブな方向に物を考え始める。
「いや、それは『懲役』」
「？」
「懲役と禁錮は違うくてな。懲役刑は刑務所に入れられている間働かないといけないけど、禁錮は刑務所に入れられて労働もしなくていいという奴だな。まあ、俺もこれぐらいしか知らないしな」

「へー。でもあんまり聞いたことないな」
「さあ、なんでだろうな」
実際は禁固刑を言い渡せられた者でも、働きたいと言う者がほとんどであり、懲役と禁錮を使い分ける意義はほとんどなくなっているのだが、調べるものがない二人がそれを知る由はない。
「一ヶ月暇だな」
「ああ、でも確かめたいことも色々あるしな」
確かに、話し合わないといけないことはいくつもあるだろう。
「色々だけど、とりあえず」
といって、御影は後ろを向く。
「寝るか」
「ああ」
まだこの世界は夢であると言うことを確認したかった。不思議な世界で猪に追いかけられ、アリスと出会い食事をとったというのは自分の脳内での出来事であるとまだ思っていた。もし夢であるなら、寝たら直るであろう。それと、只単に眠かったということもあった。そんな考えのもと、端っこにある、寝心地の悪い藁に寝転がる。意外と疲れていたのか寝転がって一分もしないうちに寝てしまっていた。
▽▽▽
目覚めると、見覚えのある天井が目の前に広がっていた。しかし、それは自分の家のアパートの一室ではなかった。
この古きよき日本家屋の天井は……。
「おばあちゃんの家か？」
「おじいちゃんの家でもあるぞ」
渋い声がよこからした。寝転がっていた畳から起きあがるとそこには『大和』つまり自分がいた。いや、自分と全く同じ見た目の和服を着た男性が座布団に正座していた。部屋には机もコタツもなく周りは障子に囲まれている。
「誰……だ？」

「ふむ、誰？といわれると答えに困るな」
自分の意味が分からないというその顔を見て『大和』は続けてはなす。
「ふむ、みためは君の父方の祖父、朱山大造の若かりし頃の姿を借りている」
「見た目は……？借りている？」
自分にそっくりな自称若いころの祖父、朱山大造を名乗る男の正面に正座で座る。確かに目の前の男は写真で見た祖父の若い頃に酷似、つまりは声を除き大和とも酷似しているが、祖父はもうとっくの昔に他界しているはずである。———大和は気づいていない。祖父の前になると改まった姿勢、つまり正座をするという自分の癖に。怪しいと思い顔を見ているとその疑問を悟ったのか「ふむ」といい、考え始めた。
「借りているというのも、ぴったりなわけではないがしかし、理解をするにはいちばんこの言葉がいいと思うのだ。君の疑問に答えれるだけ答えよう。『誰だ？』ときかれたのに答えるならば、私は君の守護霊だ」
「守護霊？」
「ああ、守護霊だ。幼いときより君を見守ってきている」
「えーと」
ぶっ飛んだ世界で寝たらもっとぶっ飛んだ世界にきていた。『守護霊』と聞いたとき抱いた感想はそういう感想だった。
「その守護霊と生身の生ある人間があって、はなすのはかなり珍しい。タブーと言ってもいいぐらいだ。が、今回の事態はそれを破らなければならない」
自称守護霊は大和が戸惑っているのも無視し納得どころか理解することですらあやふやであることを早口でしゃべる。かけてもいいが落ち着いた状態でゆっくり話されても自分は理解できないだろう。
「今回の事態？」
「うむ、薄々気づいてるかもしれない、いや、ただ現実をみてない

だけかもしれないが、ここは君、いや、君たちがいた世界とは全く違う」
「は？」
予想外と思って出た言葉ではなく、あまりにもぶっ飛んだ発言で思わず出た言葉である。
「まあ、改めて言葉にするとよくわからないか。まあ起きたときに蛭沼君にでもきくがいい。あの子の方がきっと詳しいだろうから」
「ちょっとまてよ、どうして別世界なんかに俺たちは」
「それは、私も聞きたい」
数秒沈黙が流れる。やはり、理解も納得もできぬまま話は進む。
「わからないのか？」
「うむ」
本当に申し訳なさそうに肯定する。
「しかし、大和、君を助けることは可能だ」
と、にこやかに笑っていった。
「何で助ける？」
「いっただろう、私は君の守護霊だ。君を助けるのが道理って物だ。君もわかると思うがここは元いた世界より何十倍も危険だ。それに、ここで君を助けずに、死んでしまったら私の存在が消えてしまう。もっとも、前の世界では今回のように出てくることは不可能に近いのだがね」
「よくわからないが、どうやって助けるんだ？」
「君に力を与えよう」
…俺って実は漫画の読みすぎなのでは？といまさらながら思う。数少ない友達は特殊すぎて読みすぎかそうでないかはよく分からない。
「力って筋力でもあげるのか？」
頭を抱えたい気持ちを無視してとりあえず返事をする。
「ふむ、筋力は後付けでもあげられる、しかも君の場合もう十分といえよう。それに、理由はわからないが、筋力も、この世界にきて徐々にではあるがあがってきている。おそらくであるが、元の世界

とはまた違うなにかがあるのであろう。その証拠に食事の後に力が増していた」
「じゃあ、どうするんだ？」
何故かこの自称守護霊の言う言葉は一々腑に落ちる。自分でも不自然を感じないことに不自然を感じるが、まるで当たり前のことを言われているようで納得してしまう。
「君の勘の精度を高くする」
「どういうことだ」
「君は元々勘がいい、分かっているだろ？今日だって勘でしたんだろ、あれは」
と何かを投げるフリをする。おそらく今日の満月食堂での一件であろう。確かにあれは反射的にやった。しかしそれは片手剣を引き抜く前にもう体が反応していた。片手剣を抜くことに反応したのではなく、嫌な予感がし、それに反応したのだ。これは昔からで嫌なことが起こるときは嫌な予感が必ずするわけではないが、嫌な予感がするときは嫌なことが必ず起きる。
「本当にできるのか？」
「できるさ。君はこの能力を得ると君に仇なす者いや、誰かに仇なそうとしているものが誰だか分かるだろう。勿論、隠される場合もあるだろうが、ないよりましだろう？」
「それって、どうやって……」
ゴーンと鐘の音が鳴る。音の方を向くと上の方向に異常に速く時間を刻んでいく西洋時計がなっている。顔をしかめながら自称守護霊は
「残念ながら話している暇はないようだ」
といった。
「どういうことだ！？」
「安心するがいい。君には勘だけではなく基本的な力も上げる。それに、君には元の世界の友達蛭沼君がいる」
ゴーン、ゴーン。
鐘の音が二回なる。

「ふむ、別れのの時間だ。もう会うことはおそらくないだろうが私は君の事を見ている」
鐘の音が鳴った。それと同時に自分の意識は朦朧としていき、視界がぼやける。もっと聞きたいことがあった。もっと言いたいことがあった。しかし、体は動かない。
薄れる意識の中、朱山大造が、笑いながら何かを言ってきた。
———頑張れよ。
次の瞬間には視界は真っ暗になった。

八話　『朱山大造』（後書き）

朱山大造初登場！！
まあ、もう現れないと思いますが…。
現れたとしてもかなり後になると思います。

九話　竜と竜（前書き）

一旦別の所の話となります。

九話　竜と竜

さてさて朱山大和、蛭沼御影がいきなり捕まるなんて運悪いなと牢獄で思っていた頃、その状況を聞いたらうらやむような者いや、者達がシュタールからずっと東の森をうろうろしていた。

▽▽▽

星が綺麗である。どれがどの星なんて一切分からないが、天の川なんて拝める機会なんて現代日本ではありえない。逆にそれは、ここが現代日本ではないことの証明となっていた。

この綺麗な夜空を見たのは三回目だ。まだ人には会っていない、横の藤井春樹（フジイハルキ）と言う名のイケメン以外…。

「でも何なんだろうねー。この世界は。竜介君分かる？」

「それはこっちが聞きたい」

俺、大槌竜介（オオツチリュウスケ）はそう答えながら目の前の火に薪を入れる。俺は中学二年だが、春樹さんはおそらく成人している。しかし、自分がタメ口になることを許して、名前で呼ばせてもらっている。本人いわく『タメ口のほうが気が楽』とのことだ。

「まいったなー」

と春樹さんは言うがその顔は本当に参ったとか思っているのか？と聞きたいくらいにこにこしている。

しかし、実際参っているのだろう。二日前起きればジャングル。知らないような生物がそこら中におり、隣にいたのは見知らぬ人。共同で助け合おうと言うことをあったその日のうちにきめた。ついでにそのことを決めた時にタメ口でＯＫだよということになった。

一日目は本当に地獄だった。

混乱のあまり春樹さんを罵倒してしまった。今になって思い返すとかなり恥ずかしいものであるが、春樹さんが「落ち着け！！」と大声で怒鳴り、謎の威圧感で逆ギレもできなかった。落ち着かされた後とりあえず謝り助け合うことを決め、とりあえずジャングルの川

を下っていこうということになった。
最初の方は、必死に話題を探り出していたが途中から、疲れから無言になって、夜には二人はくたくたになっていた。
水はあるが、どれも泥などで濁った水。
自前の食料などなく、食事もとれない。
開けた場所では巨大な蜂などの知らない虫が襲いかかってくることもあった。
鬱蒼と生えた草木をかき分け、道なき道をすすんだ。もちろん、草木で手足を切って傷だらけになった。
そしてこれが夢でありますようにと、青年と言い合って。危険だとわかりつつも草木を下にひきねむった。そのとき上を見て星が綺麗だなんて思う余裕もなく、この忌々しい現実が終わりますようにとしか思っていなかった。
そして変な夢を見た。真っ暗でその真っ暗の中で何も見えなかったが、五感は全てなかったのに関わらず意識ははっきりしており、形容の仕様のない心地を覚えた。なぜか現実と間違うような錯覚を覚えた。いきなり一言こういう声がした。
「竜には興味あるかい？」
あまりにもいきなりすぎる質問である。
「はぁ？」
いきなり、また変な空間につれてこられたと思った次の瞬間にそんな質問をされたため反射的にそう答えていた。しかし、冷静な状態で聞かれたらおそらくその答えはＹｅｓだったであろう。というか中学生でなくてもここでＮｏと答える男はかなり少ないと思う。…多分。
「そう、頑張れよ」
と言われ、意識は完全にたたれた。
全く知らない鳥の鳴き声に起こされ変な夢だったなと言いながら、まだジャングルにいるという現実が心におしかかったとき自分の体の変化に気がついた。まず気づいたのはけがが治っていた。昨日ま

で歩きどうしだったのに、筋肉痛にすらなっていない。体がしかも異常なほど強化されているのだ。本気で殴れば細めの木を倒し、草木を掻き分ける程度では傷が付かなくなっていた。昨日まで四苦八苦していた虫も簡単に蹴散らせるようになっていた。
変わっていたのは自分だけではなかった。
春樹さんは明らかに体力が上がっており、俺みたいに傷が付かなくなったとまではいかないもののその数はかなり減少していた。しかも、ついた傷もまだ日にちがあさいのでよくわからないが治りも早そうであった。
不思議な夢についてはなしたところ、春樹さんの方はもっと詳しいことを聞かされていた。ここが別世界であること、守護霊のこと、体の強化のこと、特殊能力のこと。
「おそらく竜介君の守護霊は竜介君を竜のように強くする能力を与えたのだろう」
とわざとらしくいった。よく実感できていないが、その言葉にうなずくしかなかった。
ついでに春樹さんの能力は植物の知識と話術の向上。選択の余地があったらしくこの二つをもらったらしい。なぜ話術？と聞くと、本人いわく元々交渉するような仕事についていたらしいから。とのことだった。
守護霊の存在と信じるか否かはおいとき、助かったのは事実である。特に植物の一般知識には助けられた。果物だけとはいえ食事にありつけるようになった。果物を食べれれば同時に水分補給も出来て、強化されたらしい体は酷使しても大丈夫で進むスピードはぐっとあがった。
元の世界に帰れるのか？という疑問もわいたが、圧倒的な自分の力を思うと何とかなるだろうと言う根拠のない実感がわいた。ついでに、春樹さんは本人曰く『孤独を愛する人物』らしいので、親とも疎遠らしく、ちゃんとした生活ができれば何所でもいいとのことだった。

『孤独を愛する人物』が交渉ごとに向いてるのか？と思ったら、顔に出ていたのか「まっ、仕事と私生活は別だから」と言われた。そういうものなのだろうか？

▽▽▽

そんなこんなで三日目である。うっそうと茂った木は視界を邪魔するので、村が何所にあるかよく分からない。

「そろそろ、村が見えてもおかしくないと思うんだけどな」

二日目の途中からこげた木片を時々見るようになった。誰かがここでキャンプしていたのだろう。その周りには、足跡があり深さ的に片方は子供の、もう片方はかなり重い、おそらく男のあしあとがあった。余談だが、俺が足跡を見つけたとき、そういうと君が言わなければわからなかった。といって春樹さんはほめられた。かなり恥ずかしかったがどうやら、強化のされぐあいはやはり、春樹さんと俺では違うようだ。

子供の足跡は追うのはところどころ見えなくなっていたが、もう一つの大人の足跡はかなり深かったので、川を下っていくことをやめ、たどっていくことにした。そして、その人達より確実にスピードはこちらの方が速く。目の前のあかあかと燃えている木片は昨日の辺りの物だと思う。

「でも、もうすぐこの足跡のご本人と対面だな」

そう呟いた時に、聞こえたのは期待していた人の声ではなく。異常なまでの音量で動物が叫ぶ声であった。密林に声が響く。

「かなり近いな」

空を見上げると時折鳥が飛んでいることがあった。

それは、自分達の遠近感を疑うぐらいのでかさであった。よって、植物の知識からなんとなくわかっていたことだが、ここには前の世界ではありえない生物がいるということはわかっていた。だから、

「いったん隠れるぞ」

そういって、隠れる場所ないかなと歩き出そうとしたら、春樹さんに手を捕まれた。顔はいつになく真剣だ。

「声が聞こえた方向…。足跡の向かっている方向と一緒だ」
たしかに、足跡が向かっている方向と声が聞こえてきたところは一緒だ。大音量だったので何とか分かったのだろう。
「ここで隠れてて」
そういって、俺は足跡の方向へ走り出した。
▽▽▽
走って進んでいくと開けた場所があった。
そこには赤い西洋竜がいたしかも翼を広げ飛んでいて、歩けば触れる距離に。
その大きさはかなりのもので、大人二倍の身長は優にあった。
一瞬目を奪われ突っ立ったままだったが、すぐに足跡のことを思い出す。
そばに人間がいるかもしれないのだ。
西洋竜の視線の先に独特の鈍い光を放つ物を捕らえた。
いた、一人、竜の視線の先、双剣を構え、竜の動きを読もうとしている。
次の瞬間、そいつめがけて竜が急降下をし爪で殺しにかかる、それを横に転がりながらよける。その転がったところの隙を狙い、着地した竜はそいつに向かいかみつこうとする。
竜と人が戦っている現実に、呆然としていた俺は我に返り、一瞬といっても過言ではないスピードで近づき、木をも倒す跳び蹴りを食らわした。そのまま、空中で回転しながら着地したが・・・。
「まじかよ」
竜はひるみもしていない。しかし、眼球がこちらを向く。竜はこちらに顔を向け、こちらにねらいを定める。竜ににらめれるという威圧感は異常であり、体がこわばり、心臓が血液を送り出す音が聞こえるほど心拍数は上がり、呼吸も速くなるのを感じた。竜が人と長くにらみ合いなどするはずもなく、首をのけぞらせて何かをためた、その口から漏れる火を見て、横に焦ってよけると、次の瞬間には竜が火の玉をはきだし、自分のいた場所を熱気を伴って通過した。後

ろから、爆発音がしたがそんなことをかまっている余裕はない。竜は当たらないとわかるとその巨体でこちらに突進してくる。横に走り、ヘッドスライディングをし、そのまま起きあがればよかったものを、そのまま、仰向けになり、竜の方向をみてしまった。その、目の前で、隙をさらした、俺を竜はほおってくれるはずもない。右足を踏まれた。こんなでかい竜に踏まれているはずなのに身体が強化されているおかげか足はつぶれることなく激痛ではなく鈍痛が走った。

「まずい！」

竜はこちらを食おうと口を開けた瞬間、目の前に銀灰色の光る何かが跳んできた。それが何かを普段ではありえない反射神経でつかみ。食いに掛かろうとする竜の口に対して思いっきりそれを突きつけた。竜の血が俺にふりかかり、竜はよろめいて振んでいた俺の足から離れる。素早く起きあがり、逆手に持っていた、双剣の片方を持ち直す。右足は痛むが、そんな場合ではない。

竜は痛みでわめき散らすと翼を広げ、上空へ飛んだ、

人外との戦いもおわったので、未だに倒れている人の元へいこうとすると。

「危ない！」

と男の声が聞こえた。急いで振り向くと、目の前に火球があった。

「やばっ」

バックステップをするが、時すでに遅し、爆発した火球の爆風で吹き飛び地面にたたきつけられた。

服に火が燃え移った焦ってそのまま体を転がしてもみ消しにかかる。上の制服が燃えてしまった。どうしよっかなと思ったそのとき異常に気づいた。

「どういうことだ」

立ち上がりながら自分の体をできうる限り観察する。火達磨になったにもかかわらず皮膚は焦げていない髪もだ。

肌にはこげた皮膚はないかわりに肌と色は変わらない鱗が現れてい

た。その鱗をじっと見ていると鱗は消えてしまい、またもとの肌に戻っていった。
「気のせいか…」
といった声は緊張が抜けたためか震えている。
西洋竜がどこかへ言ってしまったことを確認した後、双剣の片方を拾いながら倒れた男の下へ向かう。
その手もどこか何かしらの理由で震えていた。

九話　竜と竜（後書き）

大型モンスターを倒すわけでもなく大型モンスターを追っ払うだけなのに戦闘の描写に四苦八苦しております。

十話　番外　ノートの切れ端。※キャラ設定です。（前書き）

ＰＣが動かなくなったので、急遽キャラ設定に変更しました。
ついでにこれはＰＳ３から打っています。
ＰＳ３の設定的に９８０字ぐらいしか打てないです。そしていつも自分が投稿している量は１０００字を越えているのでキャラ設定となりました。キャラ設定といっても、ちょっとだけですが・・・。
題名はリアルにノートの切れ端に書いたからです。
おそらくＰＣは来週には直っています。

十話　番外　ノートの切れ端。※キャラ設定です。

ステータス説明
１が最小。１０が最大。
力：Ｓｔｒｅｎｇｔｈ：近接武器扱いの可否、遠距離武器の反動に影響。（例えば力にあってない大剣をつかうと自分が振り回されます）
防御：Ｅｎｄｕｒａｎｃｅ：頑丈さ。基本的にはこの数値が直接防御力になるわけではないが状態異常の耐性、発生確率、スタミナに影響。
知能：Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ：賢さ。調合成功確率またその速度に影響。
速さ：Ａｇｉｌｉｔｙ：移動調合砥石はぎ取り、採取の速度に影響。
感覚：Ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎ：索敵追跡などに影響。
カリスマ：Ｃｈａｒｉｓｍａ：人との信頼度に影響。（高ければ高いほど信頼されやすくなる）
幸運：Ｌｕｃｋ：会心率などの運の良さに影響。
低級の平均ハンターがオール１だとした場合の数値です。
武具によって攻撃力防御力は大きく変化します。（力が１でも使いこなせば力が５の人の攻撃力を上回る可能性があります）
横に＋とかついているのは守護霊関係で特別強化されたという意味です。

朱山大和　ａｇｅ１５　１８１ｃｍ
ＳＴＲ（Ｓｔｒｅｎｇｔｈ）　８
ＥＮＤ（Ｅｎｄｕｒａｎｃｅ）　５
ＩＮＴ（Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ）　２
ＡＧＩ（Ａｇｉｌｉｔｙ）　６
ＰＥＲ（Ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎ）　１０（＋）

ＣＨＲ（Ｃｈａｒｉｓｍａ）　６
ＬＵＣ（Ｌｕｃｋ）　５
固有能力（元々持ってたもの）
直感：いやな雰囲気を読みとれます。
特殊能力（守護霊から授かったもの）
守護霊の過保護：守護霊によってステータスがあがり、成長率も上昇します。
根拠のない必然：敵が攻撃する直前に分かるようになります。”根拠”はないのに偶然ではなく”必然”です。

蛭沼御影　ａｇｅ１５　１７０ｃｍ
ＳＴＲ（Ｓｔｒｅｎｇｔｈ）　５
ＥＮＤ（Ｅｎｄｕｒａｎｃｅ）　１０
ＩＮＴ（Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ）　７
ＡＧＩ（Ａｇｉｌｉｔｙ）　１０（＋）
ＰＥＲ（Ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎ）　１０
ＣＨＲ（Ｃｈａｒｉｓｍａ）　１
ＬＵＣ（Ｌｕｃｋ）　３
固有能力
”御影”：存在感がうすいです。気配を消すとまさしく”影”となります。
特殊能力
守護霊の過保護：上記参照
疾風：異常に速くなります。まさに風のごとく。

アリス　ａｇｅ１５　１６５ｃｍ
ＳＴＲ（Ｓｔｒｅｎｇｔｈ）　３
ＥＮＤ（Ｅｎｄｕｒａｎｃｅ）　３
ＩＮＴ（Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ）　６
ＡＧＩ（Ａｇｉｌｉｔｙ）　３

ＰＥＲ（Ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎ）　３
ＣＨＲ（Ｃｈａｒｉｓｍａ）　７
ＬＵＣ（Ｌｕｃｋ）　７
固有能力
お人好し：能力になるぐらいお人好しです。カリスマが上昇します。
特殊能力　なし
武器：ヘビーボウガン：毒妃の竜砲（オリジナル）：使い勝手をよくするために、軽量化をはかっている。そのため多少、威力が下がっているが素材が素材だけに低級ハンターの所持している武器よりは強め
防具：レイア装備（オリジナル）：一般のレイア装備より素材が多く使っており、選び抜かれた素材で作ってあるので重さなどはそのままに防御力があがっている。火耐性なども上昇しているが、弱点属性だったものがさらに低下してしまっているのがたまにきず。

十話　番外　ノートの切れ端。※キャラ設定です。（後書き）

春樹・竜介コンビも書きたかったのですが、これはおまけみたいな物なので主要キャラだけにしました。春樹・竜介コンビがモブキャラか？ときかれるとくびをひねりますが・・・・
かなりわかりにくかったと思いますが、ステータスはいわば目安なのでなんとなーくこの人は～～が強かったな。という程度に覚えていてもらえたら十分です。というか別に覚えなくて大丈夫です。
ただ一ついいたいのは、力＝攻撃力ではなく武器の性能と扱い、技術が攻撃力。防御＝防御力ではなく防御と防具の性能が防御力につながるということです。
だから、大和の力がいくら強くても、武器が扱えてなかったら、すばしっこい鹿すらも狩れないのです。
P．S．　6／11
一部を加筆修正しました。
表現を少々変えただけなので値に変化はありません。

十一話　植物学者と見習い（仮）（前書き）

週末に更新できる的なこと言っておきながら、できませんでしたすいません。
ＰＣがもうそろそろで直りそうなのですが案外時間がかかっております。
なので、本来書く気がなかったところです。
ＰＳ３からのとうこうとなるためかなり短いです。再びすいません。

十一話　植物学者と見習い（仮）

その鎧を着た男は名前をアルというらしく。子供を探しにきたらしい。子供が大人でも危険な密林に入り込んでしまったため、探しにきたそうだ。リオレウス、つまりはさっき逃げた西洋竜がいるという噂もあり半分あきらめもはいっていたが、運良く見つけれたらしい、その帰りに今度は運悪くリオレウスと鉢合わせしてしまったらしい。ある程度は応戦したものの、自分には荷が重すぎて、しかも十分な道具もなかったらしく、死ぬかしなないかの瀬戸際で俺が現れたらしい。

銀色の鎧をきているためよくわからないが、がっしりとした体つきで無精髭をはやしている。年齢は３０代ぐらいかな？

「なんで、ここにいるんだ？」

もっともな疑問である。

「えーとだな、そのー」

「竜介君！りゅーすけくーん」

そこで、春樹さんの声が聞こえてきた。

「こっちでーす」

声の聞こえてきた方向へ大声を上げる。

「ツレがいたのか？」

「ええ」

正直忘れかけてたけど。すると春樹さんはすぐにやってきた。

「ってどんなかっこうしてるんですか！？」

俺をみた第一声がそれであった。

先の戦いで片方が半ズボンとなって、上半身裸。うん、完全に変態だ。

「大丈夫ですから。いや普通に大丈夫です」

「いやでも・・・そちらの方は？」

「ノール村でハンターやってるアルだ」

「私は春樹ともうします。で、さっきの爆音とかについての説明は？」
とこちらをみていう。春樹さん目が怖いです・・・。
しょうがないので俺は話しにアルさんの話を混ぜながらすべて話した。
「まあ、とにかく説教は後です」
説教が決定しました。
「で、おまえらはいったいどこのどいつなんだ？」
そう聞かれた瞬間、春樹さんがはなし始めた。適当かつ周到なたちの悪いな嘘を。
こちらとしては初めてあった人物が鎧を着ていたことに今更ながら驚きを感じていた。
春樹さんのたちの悪い嘘によると、偽情報をつかまされ、遭難した不幸な植物学者とその見習いだそうだ。しかも、適当に相づちを打って話を合わせていた。
とりあえず、夜も遅いので、ここらでキャンプすることとなった。

十一話　植物学者と見習い（仮）（後書き）

すいませんね、ただでさえ低レベルなのにその下をいく文章になってしまいました。
何がひどいって、これ一発書きなんだぜ・・・。
最近、後から読み返して文章を変えたくなる時が多々あります。たぶんしないけど。

十二話　愛娘（前書き）

作者「村の名前何だっけ？」
助手「自分で名づけたのに忘れないでください」

十二話　愛娘

木を持ってきてそれにアルさんが慣れた手つきで火をつけている。
木が湿気ているので紙と油と炭のようなもので、油がついた紙に火をつけ炭にうつし、湿気た木に火をつけていた。
火をつけたらさっきの竜、リオレウスを誘うことになるのではないかと思ったが、まあ、大丈夫なんだと思う。多分。
アルさんが助けた子供は近くの大きな木のうろの中にいた。アルさんが一言言うと出てきたが、びくびくしている。
アルさん曰く、いつもは元気な子なのだが、怖かったのだろうとのこと。
今、焚き木を四人で囲んでいる。はっきりいってただでさえ熱帯雨林のようなところで蒸し暑いのに焚き木に当たるのは気が引けたが、ズボンが湿った土でぬれていたのでとりあえず乾かすことにした。
といっても焚き木に近くに行っただけだが。
改めて思うと、ぼろぼろの服を着た子供、上半身裸で片方が半袖化した制服をきた俺、ぼろぼろのスーツを着ている春樹さん、鎧を着たアルさん。なかなかにシュールな光景だ。
普通にスルーしていたが鎧というのは実物で見たことがなく泥や引っかき傷などがあり使い込まれていたので、この世界はまさしく『別世界』だと改めて実感した。
「しかし、お前よく生きてたな」
見たことのない鎧や剣をじっと見ていると、アルさんからいきなりそういわれた。
兜を脱いだアルさんはくせ毛である俺が言うのもなんだが、ぼさぼさの茶髪であった。ついでに助けた子供も茶髪だった。
首をかしげているとアルさんはひとつため息をついた。
「あのな、お前は防具も一切着てないしな、武器も持ってない。初めてリオレウス見つけたやつは大の大人でも逃げ出すってのに、と

び蹴りをする。はっきりいって異状だぜ」
そういわれると確かに冷静になれば異常だ。もしかしたら、守護霊の能力で万能感があったからかもしれない。
ただ、火球に当たったときにでた鱗。あれは何だったのだろうか。それを俺は正直見間違いだと信じたかった。さすがに鱗が生えてきたとなると化け物という言葉が頭をよぎる。人体改造なんて冗談にもならない。
そんなことを考えているといきなりアルさんに背をたたかれた。考え事の途中だったから一切身構えてなかったので、もろに頭に衝撃をうけた。
「な、何するんですか」
頭をおさえながらそういい、アルさんを見るとアルさんは真剣な目をしてまっすぐこちらを見ていた。
「助けてもらった俺が言うのもなんだがな、お前、死ぬぞ？こんなことずっとやってたら」
「うー…。次から気をつけます」
まっすぐこちらを見て正論をいわれたので言い返せない。といっても自分的には危険だと思わず突っ込んだ面もあった。自分の体長を超える竜を倒せるか？ときかれると確実にいいえと答えるが、あの時自分はそれができると思ってしまった。最低でも体はそう動いた。守護霊の力がなかったら、一撃で殺されたと思う。
「命に二回目はありませんよ」
春樹さんが、追撃してくる。
「いや、でもですね…」
さすがに言い訳しようとする。
「二回も死にそうになったからこれぐらいいわれても仕方ない」
が、アルさんも追撃で、不発に。
そしてほぼ同時にため息をつくアルさんと春樹さん。
「火球に吹き飛ばされたときマジであせったぞ。かすただけでよかったな。といっても吹き飛んだけど」

「え、ええ…」
実際は直撃…じゃないとしても、思いっきり食らったと思う。でも、間違ってももろにくらいましたなんていえないな…。
「ふー。これからどうしますかね」
春樹さんが話題を変える。結構無理な話題転換だったが、今の自分にはこれ以上あの火球の話を追求されないだけありがたかった。
「とりあえず俺の村によればいい」
「一文無しなんですが…」
といいながら春樹さんは頬を人差し指でかく。
「命の恩人から金を取ろうとは思わん」
「といっても…」
「最近炭鉱夫がたくさんきてて人手が足らんところだ。もし負い目があるなら働いてくれ。猫の手も借りたい状況らしいからな」
「…なにかあったんですか？」
おそるおそる質問してみる。さっき会ったばかりの大人に話しかけるのは少々抵抗がある。
「最近、良質なベアライト鉱石が発見されてな。うまくいけばカブレライトもあるかもしれないって話だ」
「へえ、知らなかったですね」
春樹さんが相槌を打つ。自分はさっき言ったおそらく鉱石についての話が全くわからなかったので、どう反応をそうすればいいのかわからないし、何かをいったらぼろが出そうなので黙っておく。というか春樹さんもわからないはずなのに、微妙な声色で、驚いているとも取れ、普通に当たり前のごとく相槌を打っているとも取れる反応をかえす。
「まあ、そんなわけで今村はてんてこ舞いなわけだ。宿はいっぱいで、粗末なテントやぼろぼろの小屋が乱立してるぐらいだ。もしかしたら村から町になるかもしれん」
とアルさんは嬉しそうに語る。
「採掘し始めてるのですか？」

「いや、ランポス共がいてな、そいつらを狩ったら、採掘できる。まあ、領主の許可とかいるけど、利益が入ってくるんだすぐ許可が下りるだろ。税を差し引いてもかなりの利益になるぜ。これで村も活気付く。まあ、さすがに俺たちだけじゃあハンターの数が少ないからギルドからも派遣してくると思うぜ」
そう語るアルさんはやっぱりうれしそうで興奮している。が、いきなり口調が静かなものに変わり、
「娘にも苦労かけてるしな。早く許可が下りたらいいのだが…」
としみじみという。
「娘さんがいるのですか？」
「ああ、今年で十四になる」
「竜介君と同い年じゃありません？」
「ええ」
「うちの娘はな、俺が言うのもなんだが、美人で、強くてな、それでいて…」
静かな口調のまま娘の自慢がずーと続く。
あっ、この人親馬鹿だ。
俺と春樹さんは同じことを思いながら、まだあってもいない、名も知れぬ娘の自慢を続けるアルさんの対応に困る。
助け舟を出してもらおうと春樹さんに目をやると、にっこり笑いながら首を横に振られた。
会話に一切参加していなかった子供をみると当然ながら目を下にうつむきそらされた。

永延と続くその話でわかったことは、アルさんの娘がハンターであるということだけであった。

十二話　愛娘（後書き）

ＰＣが復活しました。
ただ、もともと書いてなかった場所だったので時間がかかっちゃいました。
前書きは気にしないでください、思い付きです。
追記５／１５
なぜか題名を書き忘れてたので書き足しました。

十三話　照れ隠し（前書き）

視点が竜介から大和に変わってます。
これからも視点がころころ変わる可能性が高いですが、落ち着いていく予定なのでご容赦ください。

十三話　照れ隠し

以前話したと思うが、自分は勉強が苦手だ。というよりも、落ち着きがないのかもしれない。ただただ、何かをじっとするというのが苦手なだけだとも思う。

今はアリスの家だ。記憶喪失だからということで恩赦をもらって二週間で牢獄から出た後ここにいったんすむことになった。同年代の女の子と同じ屋根の家でくらす。といえば響きはいい（？）がここは、こじんまり、といっても三階建ての結構な広さの古い教会を彷彿とさせる洋館なのだ。しかも一人、若い雇われメイドがいて、こちらを見張っている。といっても過言ではないぐらいプレッシャーを放ってきた。「アリスに手を出したらわかってるよね？」と口では言わないものの雰囲気でいってくる。まあ、手を出す気はさらさらないので、

自分が今着ている赤いインナーもアリスに負担させるという不甲斐なさも感じるものの、頼るしかないので、これからの大変さを考えると勉強しなければならないのだが、ハンターになるための基礎知識などが書かれたある教科書の内容は一切頭にはいてっこない見るというより眺めるといった感じだった。

何か自分の心の奥底に霧がかっている様で、体に重りをつけているようにだるく、やる気が出るような気分ではなかった。

ため息をついて窓の方をみる。

「帰れない可能性が高い」

という御影の言葉がよみがえる。おそらく、勉強のやる気がでないのは、自分の性分だけではないようだ。あまりにも霞んで見えない未来を想像できず、ただただ牢獄での思い出すこと。

▽▽▽

自分は看守がに聞くと丸一日ねていたらしい。御影にいたっては丸三日寝ていた。

そのおきてから御影がおきるまでの二日間ほど、御影とアリスと話せたのと打って変わって、この世界に来た動揺と困惑で頭が真っ白になり、ただただ、牢獄の灰色の天井を見上げたり、まるで死んだかのように眠る御影の脈があるかどうか確かめて少々安心してを繰り返していた。
最低でもその二日間は正確な思考が働かず、ただただ、周りの環境が変わったことに対して混乱して、ネガティブに物事を考えていた。
そんな状況が変わったのは御影が起き上がったとき。
そのとき自分は安心したせいか半泣きだった。
意地で御影には見せないようにしていたが、おそらくこういうときは鋭い御影のことだろうからおそらくばれている。とりあえず元の世界から来た唯一話せ、親友の御影がいることはとてもありがたがった。
そして、驚いたことに御影も守護霊とあっていた。話を聞くに御影の守護霊からは、俺の守護霊より詳しい話をしたらしく。そのとき特に素早さを選んで、自分と同じく身体能力をもらったらしい。自分が丸一日寝ていて、御影が丸三日寝ていたこと、守護霊のことをはなし、御影と話し合った。
「ここは異世界だ」
御影が腕を組みながら言った。
「異世界？そんなファンタジーな」
「最低でも自分達の常識が通じる環境ではないね。文字は違う、守護霊がいっていたが話し言葉もちがうらしい。そこらへんは守護霊から補正がかかってるらしい、守護霊さんとはなしたんだろ？」
守護霊さんというのになんとなくした違和感を感じつつ頷く。
「うーん、確かにあの人（？）は自分達の元いた世界とは違うっていわれたな」
「調べる前から決めつけてしまうのは早計だが・・・」
「だが…？」

「帰れない可能性が高い」

思わず自分は黙ってしまった。御影は黙った俺の目を見ながら諭すように行った。

「もしかしたら、帰る方法があるかもしれない。ただもし簡単に帰れる方法があるとすれば、ここの世界の人間が俺たちの世界に簡単にこれるということだ。これはあり得ないだろ？」

帰れないのか？

「いや、帰れないとは言っていない。この世界は俺たちの世界とかけ離れている。文化レベルも技術レベルもそして、俺たちの知らないものがたくさんある。俺が食った料理とかな。もしかしたら、それを使えば帰れるかもしれない。ただ年単位の時間がかかるのは覚悟した方がいいぞ」

この時の口調もまた、諭すようであった。

▽▽▽

と、御影いってくれた。そう「いってくれた」

でも、材料があってもつくることは可能なのか？もし未来人がタイムマシンの材料をおいてくれたとしてどうやって組み立てる？

本当に、本当に帰れるのか・・・？

再び思考がネガティブな方向に向かっていっていった。

ふいにドアが開く音がした。

「勉強進んでる？」

「ああ、えーと」

いきなりのアリスの登場にどもってしまう。

「あんまり進んでないわね」
自分が開けてたページをみながらいう。
「あー、すまん集中できなくてな」
そういうとアリスはクスクスと笑い始めた。
「ごめんごめん。なんか意外に対照的だなっておもって」
「なにがだ？」
「ミカゲとあなたのことよ」
ああ、といってうなずく。御影と自分はよく対照的と自分でも思う。
自分は良くも悪くも目立ってしまう。御影は全く持って目立たない。
あいつは賢い、自分は馬鹿。
「ミカゲは多分図書館だと思うわ。数日前につれてってあげて以来、
気づいたらいなくなってるわね」
「そうか」
といってため息をついた。疲れているのだと思う。体が疲れている
のではなく心が、精神が疲れてしまっていた。だからぽつりと、こ
んなことを呟いてしまった。
「アリス」
「どうしたの分からないところでもある？」
「おれが、この世界の人間じゃないっていったらどうする？」
「それはどういう意味かしら？」
アリスは顔ではてなを作っている。
「記憶喪失は嘘っていったら？」
「落ち着いて、ヤマト」
アリスは自分の肩に手をおいて向かい合わせになる。アリスの瞳は
難しい顔をした自分を映しだしていた。
「あのね、あなた達が記憶喪失なんかじゃないなんて、何となく分
かってるわ」
「やっぱり」
自分は自嘲ともいえる笑みを顔に浮かべる。
すると、アリスが肩を持って自分を揺らす。

「ね、とりあえず元気出してえーと、私ができることならするから」
「いや、これ以上頼るのは・・・」
「今になって変な遠慮はしない！別にハンターになりたくないならならなくていいのよ？」
そういってアリスは自分の目を覗き込む。
「いや、そういうわけでは」
思わず、目を背けるが、肩をつかまれているため、視界からアリスは消えない。
「とりあえず、困ったことがあったら私を頼って、ね？」
といって数秒間気まずいとは言いがたく、暖かいともいいがたい微妙な空気が流れる。アリスが焦ったように肩から手を離した。
「じゃあ、えーと」
意味をなさない後が続かない単語をぼそぼそというアリスの顔は軽く赤かった。よく考えれば一分程度見つめあっていたのだ。それが会話が終わったことで一気に恥ずかしくなった。
自分は自分でさっきまでの自分の悩みを八つ当たり気味にアリスにぶつけたことを恥ずかしく思った。だから…。
「じゃあ、俺の話聞いてくれる？」
照れ隠しもふくめて、これもまた、八つ当たり気味に思いつつはなそうと思った。
「うん」
聞こうと思ったアリスもおそらく照れ隠しも多かれ少なかれ含んでいたと思う。
▽▽▽
「ということなのだが」
「うーん」
自分の突拍子もない話にアリスは頭をかきながら、自分の説明に首をひねっている。
やっぱり信じられないかな？
「ねえ、ヤマト」

「うん？」
「御影も状況は同じなのよね？」
「まあ、うん」
「御影はね『できることからやるか』っていってたわ」
できることからか…。
「別にね、帰るのをあきらめてって言ってるんじゃないんだけど。
それでもヤマトはちょっと考えすぎ…だと思うよ？」
アリスは最後だけおどけてしまった。
「なぜにそこで疑問系？」
「だって、そんなことになった人もしらないし…」
「まあ、そうだろうな」
そうか、自分のできることからやる。確かにこのままアリスにおんぶに抱っこというわけにはいかないだろう。
「じゃあ、まず勉強するか」
といって勉強を再開しようと、本に目を向けて、本格的に読み出す。
「…アリス先生」
「…なんとなくわかるけどどうしたの？」
「教えてください」
といい、頭を下げる。
この世界の常識がない自分にはこの教科書は全くわからなかった。

十三話　照れ隠し（後書き）

大和がアリスに元の世界のことといいました。大和が少々パニクってますが、混乱しているだけです。別にキャラが一気に変わったとかではありません。
実は若いメイドは後付だったりします。こうなったのは、広いからって、一つ屋根の下に若い男二人と若い女一人ってのはどうかと思う
←
じゃあ、監視役つけるか。
←
執事、いや、メイドだな。
←
どうせメイド出すんなら若い方がいいに決まっている。
と言う思考の元、メイドは生まれました。しかしこう考えてみると若い男女が二人ずついるって、本来の目的を果たしていないような気が…？

十四話　狭いこの世界（前書き）

設定のところは流し読み程度で大丈夫です。
ただわかってると思いますけれども、世界観は原作設定とはかなり違っています。
ご了承ください。

十四話　狭いこの世界

俺、蛭沼御影は図書館で一人ため息をつく。
いすから立ち上がり目の前の机に目いっぱい広げたこの世界に関する色々な資料、大まかな地図などを見た。そこで一人うなっている。
難しい顔をしているのが自分でも分かる。もっとも、そこまで感情が顔にでるタイプでもないらしいので本当に難しい顔をしているかどうかはしらないが。
そして再び図書館に置かれていた紙に図書館に置かれたいた万年筆でかいたメモを見る。
「これはどうも本当に帰れそうにないな」
思わず口に出す。
本を色々みて分かったことだが、この世界における人間の自然の支配度はおそらく小さい。それは、自然が異常に強力だからである。
あの大猪レベルの比などではない。翼を持ち火を吐く竜もいるし、さらにその上のレベルもあるらしい。はっきり言ってよくこの状態まで発展できたな。と思ったほどだ。できるだけ怪物共が少ないところに住むようになったのは当たり前といえる。ただ、この世界と元いた世界の違いは強力な怪物だけじゃない。
この怪物からとれた素材から作った武器は怪物達に似た能力をえる。火を吐く竜から得た素材は斬れば火を出す剣になる。こちらの世界から言えば魔法である。
じゃあ、実際手から何か出せるかというとそんなことはない。
実は別世界から来ました！！という話は一切載っていない。まあ、当たり前だが。
大和には材料があれば帰られるかもしれないとかいうことを言ったが、はっきり言って無理である。
でも…。
「帰りたがってるだろうな」

俺と違って大和は人との交友関係も深いだろう。いきなりお別れって言われても現実をみろというのはおかしい。
逆に言えば俺の交友関係少なさが異常なんだろう。親とはうまくいってないから縁を切った。現代社会で未成年が親と縁を切るのはかなり難しかったが何とか一部の理解ある先生に助けられ何とか縁を切った。それはともかく特殊すぎる環境に生まれたから戻っても戻らずとも、精神的にはそこまで不安定にはなっていない。最低でも人間関係については。
話がそれたがまず、とりあえずは帰れそうにない。
まずこの世界について考えよう。
この世界の世界観はひとつの丸いと形容できる大陸。北、南、東に海があり、西に唯一丸い大陸と地続きになっているところがあるがその先はあまりにも怪物（モンスター）が強く一度入って帰ってきたものはいないといわれ、立ち入りが禁止されいている。というより、その陸続きになっているところは大陸のところとそこまで言うほどつながっておらずかなり高い山で囲まれており、唯一の道も巨大な砦が数層にも立てられているらしい。
とりあえずそこは無視して、大陸の中央に自分たちがいる『シュタール』を含めギルド本部である『モネック』を中央とし、ギルドの管轄地区というものがある。ギルド管轄地区では、ギルドが法も何もかも支配している。はっきり言って国である。しかも技術レベルはかなり高いらしく。武器の製造の設計図などもほとんどギルドがもっている。ギルド管轄内にあるエリアは南側に俺たちが迷い込んだ『森丘』そのさらに南の山岳地帯にある『渓谷』などがある。調べてみたところ、俺たちがいた場所は密漁区といわれてギルドの許可なくはいるのを禁止されていたらしく、そのほかのほとんどのところではほとんどの場合出入りは自由だそうだ。ついでに密猟になってる理由は、それを許可するとギルドの総本山『モネック』が近いこの地区ではハンターがなだれ込み問題が起こる確率を上げるからというものであった。それが運が悪かったかよかったかといわれ

るとあそこにいなければアリスともであわなかったわけでどちらかというと運が良かったのではないかとも思う。
次は東にある。首都『ロムス』をおく『王国』があり通称『ロムス王国』がある。中世ヨーロッパの似たようなシステムを持っている。気候は温暖、熱帯。ここにあるエリアは主に南東側に『樹海』『密林』があり。意外にもところどころよい鉱石、元の世界にないような金属も含め、の鉱脈があるらしく炭鉱夫たちがよく来るらしい。もちろん、町から離れたところに鉱脈がある場合、一部の怪物（モンスター）を殲滅した上でピッケルで掘り続けるらしい。爆薬を使うとモンスターを呼び寄せてしまうらしく、思い切って掘ることはできないらしい。
北にあるのは首都『ユグ』をおく『帝国』があり、通称『ユグ帝国』がある。気候は寒冷。帝国といえば何かと悪いイメージがあるが、統治は結構しっかりしているらしい。この国にあるエリアは『凍土』『雪山』などである。国土の東の海を渡った先に延々と噴火し続けている『火山』もある。
南西には『カウ連邦』があり、首都があるわけではなく、たくさんある国をひとつにまとめて首長たちが話し合いで方針を決めるらしい。気候は乾燥地帯。この国にあるエリアは『砂漠』などである。主にオアシスに人がすんでいる。『大砂漠』では常に砂が海の波のように動き、海のごとく船で移動できて大事な交通の要所らしい。巨大な怪物（モンスター）であるジエン・モーランがでて来る時期になると大砂漠に隣接している街は祭りがとりおこなわれ通り道に出てくる鉱石とばら撒かれた有機物によって毎年のごとく豊作で砂漠のオアシスとはいえ有数の農作地帯となっている。よってジエン・モーランは豊穣の象徴ともなっている。
とりあえずいまからこの世界でどうやって生活しようと考えたとき、アリスの言った「ハンター」がなんだかんだいっても一番よいとおもう。この世界の技術レベルはぱっとみては中世だ。ハンターはまあ、狩りをするという意味だろうが、狩るのは動物ではなく人外の化け物である。本当に狩れるのか？と聞かれると微妙なところでは

ある。
まず、ハンターは全員ギルドに加盟している。加盟していないハンターもいるにはいるらしいが、加盟すれば多くの恩恵を受けられるのでほとんどが加盟している。その加盟しているハンターはかなりの数に及ぶ。元はハンターのうちで始まった、ハンターによるハンターのための相互援助組織、『ハンターズギルド』としてなりたって、一番需要が高いのでそのまま略されて『ギルド』となったらしい。他に、一部の同じ志や、同じ目的を持ったものたちが『猟団』を作るときもある。そもそも、怪物たちに立ち向かおうとするのに集団で行くのは当たり前である。ただ、ほとんどのハンターは最弱の竜種イヤンクックを狩れればいい方である。といってもハンターというのはいくら弱くても、命を危険にさらしていることには変わりなく、収入も、最下級クラスのハンターでもまあまあいいので、いわば人気職である。ハンターの社会的地位もたかい。
ハンターになるだけなら、そこまで費用はかからないらしく、いまだ物価の把握ができてないので、よくわからないが、おそらく3万円程度の費用だと思われる。
ただ、訓練所といういわば予備校、塾みたいなところがあるらしく、普通はそこに入って勉強、実技をして、試験を受けるらしい。だが、応募倍率が高いうえに、塾はやっぱり異世界でも高い。そこへアリスは自分たちを編入させようとしたらしいが、さすがに応募倍率も高く無理だったらしく、アリスが教えるということになった。これにはホッとした。その訓練所に一ヶ月通うお金は物価がよくわからない俺たちでも高いということがわかったからだ。でも試験を受けさしてくれるのは本当にありがたかった。
試験は実地試験と筆記試験がある。
たしかに、一般人なら強力な防具があったとしても実技試験はつらいものとなるらしい。しかし、俺たちは異常なほど強化されている。最低でもそこらのごろつきなら自分一人で文字通り瞬殺できるだろう。

そしておそらくだが、実技試験は普通に通ることができる。
アリスに実技試験内容を聞くと、「薬草を十個持ってくること」だったらしい。
アリス曰く「簡単だった」とのこと。まあ、なめてかかりすぎるのもどうかと思うが何とかなると思う。でだ、問題は筆記試験だろう。別に俺は全く問題がないが大和がな…。
「あいつ、大丈夫かな」
目の前に紅茶が入ったカップがおかれる。
「誰の心配？」
女司書がお盆を机に置き机の前に座る。
この図書館はまあまあの数の本を取りそろえている。という話だが閑散としており、いるのはほか数名と図書館の職員と言ったところだ。ついでに図書館といっても貸し出しはしていない。
そんな図書館に毎日きて資料広げて、無表情で考え事しているのは陰のかなり薄い俺でも目立った。この図書館の使い勝手が悪すぎると自分的には思ったりする。それで、司書にきいてたら目立ったという要素もあったと思う。そのきいていた本の種類がバラバラだったのも目立つ原因だったかもしれない。そのときこの人はとても暇だったそうで話しかけてきた。なぜか紅茶を持って。
図書館で飲食はいかがなものかと思ったがなんだかんだで、はなすことは多くなった。記憶喪失の設定を未だに貫き通しているので、それをいうと食いついてきた。ちょっとは怪しめよと心の中でおもったがもちろん口には出していない。
「いや、試験を受ける友達の筆記試験大丈夫かなとね」
「ハンター試験受けるんだったね」
「ええ」
といってだされた紅茶を一口飲む。味の善し悪しはよく分からないが、最低でも市販の紅茶で俺が入れたものよりはうまい。
「じゃあ、今回から試験方式が変わるって知ってた？」
「いえ」

「うーん、ちょっとは驚いてくれてもいいんじゃない？」
「いい歳して何いってるんですか」
「あー年齢のこといっちゃうんだ。もう教えてあげなーい」
「そこまでいくと引きますよ。さすがに」
笑ったり、すねたり忙しい司書に対しこちらは紅茶を飲みながら、やっぱり自分は無表情なのだろう。無反応なことがむっとさせたのか、唇を尖らせる。
歳のこと言われたらどこかへ怒っていくと最初の方は思ったのだが、この人はまるで昔からの知り合いと話しているがごとく皮肉をのらりくらりとかえしてくる。初対面の人に皮肉を言われれば普通怒るのではないか？という疑問はあって数分後に消えうせていた。要はフレンドリーすぎるのである。
「テスト形式が筆記試験と実地試験に分かれてるってしってるわよね」
「ええ、たしか、実地試験に受かったらハンターになれて、筆記に受かるとランクが…」
「3にまでしか上がれない。で変わったのは実地試験の方なんだけど、いままでは、キノコ、薬草とか、素人でもとれるのをやってたらしいのだけど、今回から数日間サバイバルさせるらしいわよ。もちろんキャンプなしで。ハンターの質が落ちていってることは前々からいわれてたしね」
キャンプとは俺が応急薬を塗られたところだ。安全が確保されており、寝床もあり、支給品で地図も常備されている。ハンターランクは1～9まであり、1が一番低く9が一番高い、ハンターランク9にもなると一握りの人物しかいないらしい。
「大丈夫でしょうけどね」
本に視線を戻しながらそういった。
「おお、自信あるね。でもキャンプなしで数日の野営って結構きついらしいわよ」
「それは大変」

「全然大変とおもってないでしょ？」
「もちろん」
「大人は敬いなさいよ」
「あなたが大人になれたことが不思議です」
「あー。そんなこというんだ！私これでも結婚してて、ちゃんとした大人なのにー」
既婚者という割には見た目がかなり若い。見た目から二十代だが、いっている内容の時々に十年前は私も…みたいなこといってるからおそらく３０代後半だと思う。美人といえば美人であるが発言でそれがただの子供っぽさに変換されている気がする。
「子供でも結婚ならできますけどね」
「あー。今私をバカにしたわね！」
まあ、精神があれでも年をとれば３０になるか。と思いつつ紅茶を一口飲む。
「今失礼なこと考えたでしょ！！」
俺は一つため息をつくと図書館の備品である万年筆で近くの柱をつついた。
その柱には
「図書館ではお静かに」
とかかれている。
すると司書は自分がまあまあの大声を出している事に気づき恨みがましい目でこちらを見てきた。
それを無視しながら紙にさっき聞いた試験の変更点を書いていった。
少々軽い気分になりながらもまた俺は本を再び読み始めた。

十四話　狭いこの世界（後書き）

要約：
大陸で確認されてるのは丸いのがひとつ！
西のほうに行き過ぎると危険！
中央にギルド管轄の地域！のどかな森丘と南に山があるよ！
東に王国、アマゾンみたいな森がたくさんある！（竜介、春樹ペア、ココにいる）
北に帝国、寒いよ！火山も一応あるよ！
南西に連邦、暑いよ！砂漠ばっかあるよ！

まあ、この駄文、モンハンを元とする必要ある？ときかれると答えに困りますね…。

十五話　悩み（前書き）

サブタイトルを考えるのが難しい。
もしかしなくてもいつも以上に違和感がありまくると思います。

十五話　悩み

私、アリスは片付いた自分の部屋で考え事をしていた。
アリスの部屋はメイドのフィーのおかげで整理整頓がきっちりとしており、床にはほとんど物がなく、殺風景とはいえないものの、年頃の女の子らしくないとだけはいえる。唯一部屋の端の机の上に飾ってあるぬいぐるみは父からもらったもので、自身で買ったものでもなく、欲しいとねだったものではない。趣味である本もその女の子らしくない見た目の要因のひとつとなっていた。
アリスの父親は過保護であり、たいして母親は自称過保護であったがあっさりとした性格であったため過保護と思ったことはあまりなかった。
シュタールで一人暮らしがしてみたいといったときも、父は断固反対だと私に言った後、無言で部屋に下がって、体操座りしていたそうだが、母親は条件をいくつか言って「ならべつにいいわよ」と結構あっさりと許可してくれた。
一人暮らしにはあまりにも大き過ぎる家をもらい、数年たっているが、最初のころはよく母がきて、フィーがいて寂しさとは無縁になってからは、ほとんど悩み事がなくなった。
しかし、アリスは悩み事をしていた。
ヤマトとミカゲのことだ。
出会いはドスファンゴに襲われている二人を救ったときだ。そのとき私は採取するものを取ってきてその帰りだった。敵に当たれば爆発する弾、徹甲榴弾を持っていたのはたまたまであり、弾としては高価であるが、結果として二人の命を救うことができたのはよかったと思うので弾を使ったことは後悔はしていない。
そうやって、なんとか助けたもののモンスターがいる場所に助けた二人をほっとく訳にはいかない。
そう思い、町まで送っていくと身寄りがないという。記憶喪失だと

説明されたが、常識というものがないものの記憶喪失でないというのはなんとなくわかった。というより、ミカゲはおそらくあまりかくす気もなかったと思う。第一、さっきであったばっかりというわりに二人が話していると、話題がギクシャクしてできるいやな間ができない。つまり、二人が友人であるというのは明白だった。

二人の名前は詳しく聞いてみると『朱山大和』と『蛭沼御影』。姓があるのは東の王国の貴族のほかに、南西の連邦の一部の地域で一般的である。おそらく名前の感じで南の山岳地帯のイズモ地方の村の出身だと思われるが、あちらの地方では姓がなかったはずである。

それでももしかしたら、と思いイズモ辺りについて詳しく調べたところその風習は何百年も前に廃れたものだった。

本格的に正体がわからない。

わかったのは、ヤマトは結構直情的に動いているという感じがし、よくしゃべりかけてくる。かといって、変な話題は振らないし、無理に話題に入ろうとはしない。逆にミカゲはしゃべりかけたら返すが、自分からあまり話さないつまりは無口であった。案外よく物事を噛み砕いた後に何か行動を起こす。本当に真逆である。

私はお節介だとよく言われる。放っておけばいいものを助けようと思ってしまう。一応父が有名で、私の好意に漬け込んで騙そうとしたり、とりいろうとくる人はもちろんいた。父親の関係で来る人は騙そうとしようとした人が多かった。何回も何回も騙されそうになっているうちに、うそをついているかどうかわかるようになり、人を見る目はこれでも自身があった。

メイドのフィーも数年前に路頭に迷っていたのを助けた。助けたことの恩返しといってずっとこの家を守ってもらっている。留守を何回も任したことがあるが、お金も何もかも奪ったことなんてなかった。フィーを故郷に返そうとしたこともあったが断られた。『家はココです』とはっきりといった。それで家の管理はフィーにまかせっきりである。ヤマトとミカゲには明らかな警戒心を抱いていて、

ヤマトやミカゲに対しては何か言われても、そっけなく返事をするだけであった。
それはさておき、ヤマトとミカゲは困っている。ミカゲは一日目ほど笑わなくなったがヤマトいわく一日目が異常だったらしく、無表情が普通らしい。が、ミカゲは経済的とかに困ったと悩んでいる。しかし、ヤマトは経済的というより、もっと別の深刻で、なおかつ、金銭が絡むでもないような何かで困っているとは思っていた。時折ヤマトがボーとしていることを見る。しかし、当の本人であるヤマトは無自覚であるようだった。
それに、ミカゲはよく私にいろいろなことを聞いてきたし、なんとかはできないのか？とか、迷惑ではないならば、なになにしたいのだが…と聞いてきた。そして聞くたびにフィーに軽くにらまれていた。そういえば時折知らない言葉が出てきたりもあった。それはさておき、そんなミカゲとは違い、ヤマトはあまり何も聞いてこなかった。遠慮から行動をとめた、とも考えられるが、さっきも思ったとおり、ヤマトは直情的に物事を判断している節があるから、ちょっとぐらいは何かを言ってもおかしくないはずである。ヤマトを見ていると、なにかに悩んで、他に考え事をして行動までに気が回らないといった風であった。
とりあえず、ヤマトは何かを常に悩んでいるというのはわかっていたが、どうしようもなかった。
…そんなことを思いながら特に問題のない、いや、変わらない日々が少々続いた後のあの異世界からきたという話である。
自分の『勘』は本当だといっている。しかも、言ったのはミカゲではなくヤマト。しかし、異世界からきたという荒唐無稽な話を、信じようとは思えない。
しかし、ヤマトは確かに何かを悩んでいた。
悩んだが、ピースが足りないパズルが完成するはずがないように答えが出るはずもなく、結局フィーにも相談してみるなど考えたが、ミカゲに聞くことにした。

当の本人からその人の評価について聞くことはどう考えても悪手であるが背は腹に変えられない。
素直に言ってくれるといいんだけど
と窓に向かってつぶやいた。
▽▽▽
そして、私は、いつの間にか帰ってきた御影を私の部屋に誘った。部屋まで律儀にミカゲをつれてきたフィーは、やはり警戒の色が出ている。それを一切気にしない無表情なミカゲは将来案外大物になるかもしれない。
「どうしたんですか？」
ミカゲは聞いてきた。ミカゲが私の部屋に入ったのははじめてである。フィーが番犬のごとく私の部屋の前に行こうものならすぐに駆けつけてきて、ガードしていたからである。
「大和のことでちょっとね」
ミカゲは人差し指であごをなでながら考えはじめた。その次の瞬間には何か思い当たったのか口を開いた。
「…何か問題を起こしました？」
…友達にその扱いはどうかと私は思う。
「記憶喪失は嘘だったそうじゃない？」
「はい」
ミカゲは臆面もなく答える。やっぱり将来大物になれると思う。
「それに大和が…」
「ああ、案外速かったですね」
私は途中、言葉を切られたことで少々むっとした。が、できるだけ声音が変わらないように聞く。
「どう言うこと？」
「俺たちの故郷のことについて話したんでしょ？」
「え、ええ」
本題をあちらから切り出されて戸惑いながらも答える。
「大和は故郷についてどう言いました？」

私は大和の言ったこと、おそらく一字一句違わずに答えた。
「…大和も大胆に言ったな」
私は内容のうちの半分も理解できてない。わかったのは『二人が別世界から来た』ということだけだ。
「で、これはどう言うことなの？」
「うーん、大和は精神的に少々追いつめられていますが、正常な思考はできています」
ミカゲはどういうこと？という質問の回答を少々ずらして返す。
「じゃあ、ほんとって事？」
「ええ、俺がいっても一切の説得力を持ちませんが」
私は顔をしかめた。二人して私を馬鹿にしているのか？でも、ハンターになるために私を踏み台にする必要性はない。最悪、盗みなどが目的でももうちょっとましなうそをつく。
「まあ、信頼しろとは言いませんが、一応言っときます、大和の話は本当です」
珍しくはっきりとした声でミカゲは言った。
「といっても…」
「別にどうという事はありませんよ。大和は大和。俺は俺。普通にすればいいんですよ。まあ、そんなに不安ならでていけと一言言えばでていきますよ」
困りますけどねと無表情で一言付け加えミカゲは答えた。その無表情からは一切困ったという感情は受け取られなかった。
ため息を一つつく。
おそらく、私は出て行けといって困るのは私自身だとわかっていっているのであろう。
良心の呵責というものがある。私はもう、二人にハンターの試験を受けさせてあげるということを言ってしまっている。そこで出て行けというのは、まずしい子供に飴玉を上げるふりをして、その目の前で自分が食べることとおなじである。目に見えて悪人だったら、簡単に言うことができた。が、満月食堂での一軒で二人がそこまで

悪い人でないことはわかっていた（ミカゲは酔っ払いの頭を蹴り飛ばしただけだが…）。それに、一週間同じ場所で食べ物を食べ、同じ空間にいると自ずと目に見えてわかってくるものもある。ヤマトは皿洗いなどをフィーがいつもの仕事をとられて唸っている横で時には何か考えながら、時には無愛想なフィーに打ち解けようと何か話しかけながらしてくれたし、ミカゲは買い物でフィーが一人で行こうとするのについていき、『物価が知りたい』とかいいつつ、ミカゲが全部荷物を抱え、帰ってきたりすることが日常茶飯事であった。アリスが少々頼みごとをしたときも、二つ返事で笑いながら（ミカゲは相変わらず無表情だったが）手伝ってくれる。居候させてもらっている恩だから…といわれればそうだが、その手伝っている途中にでる、ヤマトのお節介ともいえる行動で表される配慮や、ミカゲの不必要なものが一切ない一言だけの言葉であらわされる配慮はヤマトとミカゲが悪人でないという証明には十分すぎるものであった。

そしてそれを確認して、私は大事なことを見落としてたなと頬がついつい緩んでしまう。

「あー、なんだか悩んでたのがバカバカしくなってきっちゃったわ」

ミカゲは微笑みながら、

「用事は済みましたか？」

といった。その微笑みは自然なもので、いつもの無表情であることを忘れてしまうほどであった。

「ああ、後一つ聞かして？」

「何でしょう」

そのミカゲの顔は早くも無表情であった。

「もし、私がでていけってほんとに言ったら、本当にでていったの？」

軽い意地悪のつもりで聞いた。声音はそのままにしようと思ったが、どうしても意地悪いものになった。

「ええ、もちろん。ただ…」

「ただ…？」
「あんな話をされた後さっと励ませるお人好しはそんなこと言いません」
といって、ミカゲは私の部屋から出ていった。
…もしかしてみられてた？
いや、別に恥ずかしいことはしていない、うん、していない。べつに一分間程度見つめ…。いや、けど……。
ヤマトの謎の暴露に悩む次にはあまり触れ合ったことのない異性の扱いについていまさらながら悩むアリスであった。

十五話　悩み（後書き）

作者は男、しかも、異性とのつながりがないも同然なので、女性で主観はどう書けばいいのか全くわかりません。
なので、結局できるだけいつも通りに書いてみました。
キャラが常にぶれてるとどうしても思ってしまうのが悩み。

十六話　実地試験　開始前（前書き）

時間が飛びます。
だれかタイトルのネーミングセンスをください。

十六話　実地試験　開始前

俺たちが異世界（？）にきて…来させられてから1ヶ月がたった。アリスに励まされたり、その日からアリスの態度が挙動不審になったり、やっぱり元に戻ったり、御影と元の世界と異世界との共通点や、違う点などを話し合ったりした。異世界について話すときアリスに励まされる前はいちいち動揺していたが、その後は結構落ち着いて聞くことができた。女の子に励まされるというのはなんとも残念な男のような気がするが…。

なにはともあれ、俺たちは、はぎ取りの仕方、昆虫の取り方、鉱物の取り方、調合の仕方をまなんだ。といっても、本で学んだのであって、実践はまだだ。

なのでやれるかどうかは分からない。アリス曰く、「経験が一番手っ取り早いわよ」とのことらしい。ついでに、アリスに「注意点は？」と聞くと「指を切り落とさないこと」と真顔で言われた。当たり前すぎることだが、至極もっともである。

筆記試験用の座学は一通り学んだ。学校と比べると比較的量はそこまで多くない代わりに、この世界の一切の常識を知らない俺にはきつい量だった。

そう、俺には。御影は例によって例のごとく俺より数倍飲み込みが速かった。御影の学校の成績は平均的である。しかし、これは一切の参考にならない、一回本気出してやってみろよと冗談で言うと、全教科百点とりやがった。本人は、ある程度飛び飛びに埋めると空白でだして、あとのテスト時間はすべて寝ている。余ったテスト時間が暇だろ？と負け惜しみを言うと笑われた。

それはさておき、今試験会場である。正確に言うとエリア『森丘』のキャンプである。しかしながら、俺たちが始めいた……俺たちが謎のワープを遂げた場所とはまた違う場所である。時間的にはおそらく9時辺りではあるが、周りは自然の木々に囲まれており、少々

薄暗い。
人の喋る声や、草木を踏む音、物を置く音が聞こえる。
しかし、自分はそちらを見ていない。
俺はしゃがみ込み頭を抱え、じっと土をみている。
自分の不甲斐なさにため息がでる。
「そんな落ち込むなよ…」
御影からそんなことを言われても全く慰めにならない。
今の気分をたとえるなら家庭教師を無理して雇ってもらったけど、定期テストでいい点を取れなかった学校帰りだ。そう、アリスという家庭教師についてもらいながら、ハンターの筆記テストにどう考えても落ちたとしか思えない結果を残したと思われる。さっきのたとえと変わっているのは学校帰りではなく、実地試験の会場なだけで、たとえとして機能していないなんて正直どうでもいい。
実地試験の前にある筆記試験で俺は、おそらく…落ちた。
そして、経験上、悪かったなと思ったテストは凄惨な結果で帰ってくるのが常だったので、ほぼ確実に…おちた。
「受かる試験もうからなくなるぞ」
御影が軽く肩をたたいてくる。見上げると御影の無表情な顔があった。御影なりに笑ってるつもりなのだろうが、口の端が数ミリあがっているか下がっているかの違いだけなので、ほとんどの人は気づかないだろう。勝者の余裕をかもし出している気がするのは自分がひがんでいるだけだろうか？
「装備だってただじゃないんだぜ」
そういって、俺がきている金属製の鎧をみる。鏡のごとく反射するそれは最近買ったことを物語っている。正直ぴっちりと紐を結んでいるため着ていると窮屈で肩がこりそうだが、生命線なのでしょうがない。後ろに持っている大剣だってそうだ。抜き身の状態で背中に固定している。今の自分には結構な重さというわけではないが、地面にしりをつけ座ろうとしたときにいちいち背中からおろさないといけないのがめんどくさい。これは金属製と骨製があったが、金

属製の方が高いと聞いて骨の方に即決した。御影は革鎧に木製の弓と矢筒を背負っている。数日前にアリスから買い与えられた。アリスへの依存度がだんだんやばくなってきている。男としてどうかと思うがアリスを頼るしかない。ついでに、御影は自分より装備の値段が安いとはいえ「出世払いで数倍にして返す」と思い切り断言している。自分もそのつもりだが、残念ながら公言できるほどの勇気を持ち合わせていない。へたれと思うかもしれないが、働いたことのない１ヶ月前高校生になったような男が、そんなことをいえる勇気を持っているほうが珍しいと思う。

「大丈夫だってアリスはそんなことにするような人に見えるか？」

「それとこれとはちがうような…」

アリスが気にしないからといっていいはずもない。それは、男の意地とかを差し引いても人間としてどうかと思う。

「なおさらこのテストを確実に合格しないとな。これが不合格とか目も当てられない事態だ」

「そう、そうだよな」

何か御影にうまく誘導させられた気がしたが、気にしたら負けのような気がしてふりはらった。

ちょうど５０辺りの歳の男がキャンプに来た。その男は全身に赤色がはげた鎧を着ていたが、みっともないという印象は一切与えず、逆に歴戦の兵士の風格をかもし出している。もちろん歴戦の兵士なんて見たことはないが、一目見るとなんとなくそのような感じがした。

「説明かな？」

そういって、立ち上がり、ほかのさまざまな年齢が混じっている受験者たちと前に進んだ。

▽▽▽

はげた鎧を着ている男は即席の台…というかそこらへんの倒木にたって腕を組み、足を肩幅より大きく開いた。別の人がやるとえらそうに見えるが、この人がやると異常に似合っている。

「さあさあ、諸君！ハンターの試験の始まりである。お主らは…＜割愛＞…であるので・・・、ふむ、時間が押しているのでルール説明を行う。いまから、諸君たちにはこのエリアでサバイバルをしてもらう。期間は三日から七日。不正防止のためくじで引いた素材をその個数分だけ期限内に持ってこれた物を合格とする。キャンプには常に教官がいる。命の危険や試験をあきらめる場合、キャンプにいくか、無線機で伝えてくれ。基本的に期限外かつ、条件を満たしていない時点でキャンプにはいった時点で棄権と見なす。無線機は後で支給品とともに渡す。チームは４人まで登録可能だが、助け合いの精神で「助ける」のであれば問題は全くない。一時間後、支給品を配り、そのまた一時間後内に試験を開始する。それ以上キャンプにいるというなら、即刻棄権とする。不正をしたものはもちろん失格だ。繰り返す…」

とルール説明を再び繰り返す男、というか教官。

ついでに、無線機というのは、前の世界のの無線機と大きく変わっている。この世界の無線機はイヤリング程度の大きさしかないことと、特殊な機器につなげないと距離、送信人数に難がある。今の技術では、一般用で４人が安定して一つのエリアで、通信できるレベルらしい。

これが、頭の中でさっとでてきたのは猛勉強の成果でもあるが、これはこの世界の常識でもある。そして、同時に筆記試験の内容を思い出しやっぱりため息をつく。ああ、もっと勉強すればよかったな。それはさておき、おそらく一時間の間があるのはこの間に仲間を見つけないといけないのだろう。ここにいる総勢は２０人程度。しかし、あらかじめ決まってたように一部の人たちは集まり始めた。おそらく、訓練所で前々から見知っていた仲間なのだろう。

後ろを振り向いてとりあえず御影をチームにいれようとすると…。

「俺は一人でいくからガンバレ」

といいながら御影に肩をたたかれた。

「まじ…？」

「俺は奇襲とかが得意だからな。二人でいくと目立つ。俺、弓を撃ったことがないし」
「え、うそだろ？」
「マジだ」
「じゃあ、どうすんの？」
「課題は採取系、草食モンスターの素材。最終手段としてこれもある」
そういって、御影は腕を軽く上げ腰に横にさしている剣を見せた。弓は対超近距離にたいし対処できない。大型モンスターは位置どりや、仲間との連携で近づかせないのが普通であるが、そのとき、一人ではどうしても小型モンスターがまとわりつく事がおおい。よって、弓を扱う者なら誰もが、薙払うために、長く細い剣を持っている。切れ味的には細身の剣というよりは丈夫さがとりえのなまくらともいえるが。ついでに、前の世界とは仕組みも勝手もかなり違う火薬と弦の力を利用したボウガンの場合、散弾が存在するため至近距離敵は吹き飛ばすことができる。
「大丈夫…なのか？」
一人というのは少々心配である。それと同時に自分も独りで行くという可能性があることに不安になる。
「というか逆に何で俺が弓打てると思っていたのかが不思議なのだが？…まあいいや。とりあえず弓になれるまで足手まといにしかならないし、一日目なんて弓の練習で過ごす気だからな」
「うーん、わかった」
「ヤマトの場合、チームを作らずともなんとかなりそうだけども」
「でも、この体にまだ把握しきれていないのも事実だしな」
「けがはすんなよ。医療費がかさむぞ」
「わかってるよ。お前もな」
そういうと、御影はすっと姿を消した。正確には人に紛れただけなのだろうが、やはり姿を消したという表現が的を得ている気がする。そんなことを考えてもしょうがないので、チームを探すことにする。

確かに、チームを組まずとも、一応サバイバルの知識をつめこんだので、合格できるかもしれないが、やはりどこか不安である。しかし、全く知らない人のところに入らしてもらえるかは微妙である。そもそも、大和にはこの世界の常識がない。三日以上寝食をともにするのである常識はずれことを言ってしまう可能性がある。しかも、前々から知り合っている人がほとんどのようで次々とチームを固めていっており、作戦会議を始めているところもある。早く見つけねばとあせるも、４人で固まっているところがほとんどであり、一応いろいろ当たってみたが断られた。どうしようかと悩んでいると、案外時間がたっていたようで、制限時間も迫り始めていた。そろそろ仲間になる人を探さないとまずいなと思っていると教官と誰かの会話が聞こえてきた。

「すいません、車が途中で壊れまして」

そちらの方を向くと、落ち着いた感じに微笑みつつも、申し訳なさそうにしている若い美形の男となにか空を見上げているおそらく同い年、いや、おそらく下辺りの歳をした少年がさきほどの教官と話している。ついでに、車とはもちろん動物などでひいた車だ。男のほうは青い鱗のようなもので作られた御影の皮鎧と同じようなものを着ているが、少年のほうは紺色というかどちらかというと黒い長袖長ズボンをきていた。その服は一般の服に比べれば固目かもしれないが、今から狩りするぞというにはあまりにも軽装すぎであり、場違いな印象を与えていた。事実、それを見た人は、嘲笑うもの、首を傾げるもの、一目見て興味なくすものなど、反応はさまざまであったが、少年はただ空を見ている。自分も空をなんとなく見上げるたが、あるのは屋根のように空を覆い隠す生い茂った木々だけである。

その少年にはなにか見覚えではないが、何かその雰囲気に覚えがあった。

だからだろうか、他の人たちが興味を失い、他の仲間の会話に再び

興じ初めっている中、チームがまだ決まっていないという焦りも忘れて、おそらくいつもなら聞き流して無視するような会話をじっと聞いていた。
「名前は？」
先ほどの謎の雰囲気をまとった教官ではないまた別の教官がペンと木の板に名簿を挟んだ物を持ち、めんどくさそうに聞いた。

「『春樹』と『竜介』で登録したはずなのですが？」
そう男が名乗ったのを、確かに聞こえた。

十六話　実地試験　開始前（後書き）

ココで竜介君たちと一度会わせます。
別にあわせなくても支障がないことはないですが、まあ、一応。
そして、実はまだ自分的には本編に入っていない…。

十七話　実地試験　開始

残念ながら御影がいないから相談相手がいないので心許ないが、あの二人は同じ世界の人間ではないかと思う。おそらくであるが、そうおもう。第一の理由は春樹と竜介はどう見ても日本人だということだった。黒髪に瞳も黒、肌の色も日本人のものだ。
そもそも、自分たちだけがこちらの世界に来ていると思っていた節があったが、自分たちだけではないという保証はないのだ。もしかしたら、俺の知り合いもきているかもしれない。
ただ、あの二人のチームにいれてもらうのが、よいのではないかと思う。
情報交換もできるし、縁は多いほうがいいと思う。
しかし、違う確率もある。
ただ、ひとつだけまだ、怪しまれずに何とかする案が浮かんだ。
▽▽▽
二人に近づいていく。
「あのー？」
「はい？どうしたんですか？」
名乗っていたニコニコした顔で青年がすっと返す。
「これ読めますか？」
そういて紙を見せた。
そこには、「あなたは日本人ですか？」と日本語で書かれてある。
御影と相談してわかったことだが、俺たちはこの世界の言葉であるヘイム語と日本語をどちらも言ったり聞いたり書いたり読んだりできる。デフォルトはヘイム語であるが意識的に日本語を選択することも可能であるということもだ。
これなら、まだ怪しまれないかなと思う。もしわからなかったら適当にいえばいいことだし。
すると二人は驚いたように目を見開いた。どうやら正解のようだ。

「もしかして…」
「ええ、そうです」
竜介と呼ばれいた男はぼそりとこういった。
「何か『力』をもらったのですか？」
そのことを聞かれるとは思っていたが、まず最初に聞かれるとは思っていなかった。そしてその言葉にたどたどしさが少々出ているのをなんとなく感じとった。
「ええ、勘をあげるとか何とか。あなたたちも？」
「はい、それより自己紹介しましょう。名前も知らないままでは、何かと不便ですし…。私の名前は藤井春樹です」
「あ、はい、すいません。自分の名前は朱山大和です」
「俺は、大槌竜介です」
「さて、話したいのも山々ですけど、そろそろ出て行かなきゃならないようです」
と春樹さんは言った。後ろを振り向くと他の受験者がぞろぞろと教官のほうへ向かっていき、地図、応急薬、携帯食料などなどの支給品を受け取りに行っている。
「いきましょう」
そういった春樹さんを先頭に他の受験者が向かっている方向に歩いていった。
▽▽▽
『森丘』と呼ばれている地域はその名の通りこの辺りを覆っている森とところどころに点在している丘があるというエリア。日本のように急な流れではないゆったりとそして広い川には魚がいて、その周辺には草食恐竜（？）の棲家となっており、森の木陰には多種多様なキノコなどがある。丘にある洞窟や丘の頂上に竜の巣ができることがよくあり、竜種のリオレウス、リオレイアの夫婦が住んだときの周りの村の被害は尋常ではないといわれている。しかし、初心者の試験であるため、もちろん丘には竜がいないことは確認済みらしく、竜に会うことはないらしい。少々残念ではあるが…。

余談であるが当たり前ながら自分は本でしかリオレウスを見たことはなく、その挿絵も赤い、尻尾がある、西洋竜に似ている程度にしかわからなかったので、竜介はリオレウスにあっていたということなので「どんな感じだった？」と聞くと、いろいろと悩んだ後、一言「すごかったです」と言った。さすがに苦笑いした。

森丘は森が多くを占めているがそれ以外は基本的に青々と茂った草原であり、その上を三人は話しながら歩いていく。春樹さんが地図を持っていく場所を決めていく。周りにも他の受験生がうろちょろしている。

ちゃんとつけられた鎧はきつかったが、やっと慣れ始めてきた。そもそも、この世界の対モンスター用の鎧にはいたるところに収納スペースがあり、物によっては鎧の中にあったりするので、換気性は最悪なので慣れたといっても、やはり蒸し暑い。アリス曰く「モンスター素材の鎧だと解消するからちょっとの間だから我慢しなさい」とのこと。

それはさておき、支給品と一緒にもらった課題の紙には、『アオキノコ5個、竜骨【小】5個』とかかれていた。春樹さんには『薬草5束、モスの苔皮1枚』、竜介には『苦虫3匹、ランポスの鱗2枚』とかかれていた。アオキノコは回復薬の材料、竜骨は【小】【中】【大】があり、【小】であれば普通に草食獣からも取れる。あの魔法のような治癒力を秘めた草、通称、薬草。モスという豚のようなキノコを主食とするモンスターから取れる皮、モスの苔皮。食べると異常に苦く、解毒作用が少々ある虫、苦虫。肉食で鳥竜種のランポスから取れる鱗、ランポスの鱗、それらをとってこいという話であった。ランポスの鱗は当たり前ながら、アオキノコ、薬草もこの量となる肉食竜が出るところまでいかなければならないということであった。

「まさか、同郷の人がいたとはね」

「俺も同感です」

高校生になっても恥ずかしながら敬語が使えないばかなので（最低

でも賢くわない）、タメ口でいいよという春樹さんの言葉はうれしかった、年齢差があるとは言えまだ気楽に話しかけれる。ついでに、この中で一番上が春樹さん、真ん中が自分、一番下が竜介の順に年齢は上がっていく。

「どちらかというと、朱…大和先輩がこちらに来てたことが驚きです…」

と竜介がぼそりとつぶやく。

「呼び捨てで、大和でいいよ」

ついでに、姓で呼びかけて、名前で呼びなおしたのはそういう決まりにしたからである。こちらの世界では姓を持っている人は少ない。そしてもし持っていたとしても、名乗る人は極少数らしい。よって、名前で呼びあうということになったのであるが、竜介はどうやら俺の校区にいるらしく前々から良くも悪くも有名であった俺のことを知っていたらしく、つい、『朱山先輩』と呼んでしまうらしい。

「そういえば、自己紹介するときに名前しか言ってないな…」

「そういえばそうですね」

「確かに」

「もしかしたら、何か変な力が働いてるのか？」

「かも、しれませんね」

「といっても、この状況では推測するしかないんですけどね…」

自分はそういって、ため息を吐き、

「たしかに」

「そういえば、大和君は一人で？」

「いいえ、もう一人と一緒に」

「えーと、どこにいるの？」

「あー、訳あって別々に行動しようと言う話になりまして…。竜助は知ってるかな？蛭沼御影って奴なんだけど？」

「…竜介君？」

「竜介？どうした？」

「…あ、えっと？すいません、きいてませんでした」

「また考え事？」
「えーっとはい、そうです」
「竜介、蛭沼御影ってしってるか？」
「覚えはありませんね…。学校の人ですか？」
「まあそうなんだが。俺の親友だが」
「しりませんね…」
「ああ、まあ、しょうがないか」
さすがは御影と言えばいいのか、まあ、御影だしといえばいいのか…。
わからない顔をしている竜介に愛想笑いをしつつ道なき道を歩いていった。
▽▽▽
地図のある地点まで来ると春樹さんは落ち着いた笑みを消して、春樹さんが持っているライトボウガンに今までこめていた弾とは違う、別の弾を装填し始めた。
「おしゃべりはここまでです」
その顔には今までにない緊張、こわばりが見て取れた。
その緊張が移り、自分にもこわばりを感じる。
ここから、小型とはいえ、肉食の凶暴なモンスターが出る危険性が高い地域となっている。初心者ハンターの一番の怪我の原因だ。一匹では問題がないのであるが、群れでこられると厄介さは増す。初心者ハンターならこれが原因で死ぬことだってありうる。
「俺が、先頭を歩きます」
唯一緊張がみられない、竜介が、先頭を先ほどと何ら変わらない自然体で歩く。竜介の武器はハンマーであるが、そのハンマーも石で作られた工具用のようなもので、防具を着ていない。そんな竜介を先頭にするわけにはいかないと思い、
「いや、俺が先頭を…」
というと、
「大丈夫です。小型のやつらなら倒しまくってますし、一応力が戦

闘方面なんで」
そういいながら竜介は顔をしかめた。
少々沈黙が流れる。が竜介は譲るつもりはないらしい。
「わかった。俺は春樹さんの後ろを見張ってます」
「頼みます」
「あと、朱山先…、や、大和、俺は基本的には、後ろからの襲撃に手を出しません。一応前からの襲撃に備える必要があるので。といっても、小型肉食竜がそう多くくるのはそうないと思いますから、大丈夫だとは思いますが一応…」
「わかった」
「本当にまずかったら言ってください。ちょっとぐらい手出しならできますから」
「わかった」
重ねて俺は言った。
「じゃあ、いきますよ」
▽▽▽
あれから、危険区域にはいっていったが、小型肉食獣と出会わずに、採取ができた。ありがたいことに春樹さんの植物の知識はありがたかった。解毒作用のある草、その名の通り解毒草と薬草を間違えてとってしまいかけたりしたからである。写真で見ると違いがわかるのだが、現物を見ると案外よくわからないものである。
そして、そろそろ、夕焼けになり、帰ろうとした頃。ついに現れた。鳴き声がする。大剣の柄を意識的に掴み、武器は抜かずに後ろを向く。
「ランポス三体！」
そこにいたのは小型で肉食の烏竜種、ランポスであった。

十七話　実地試験　開始（後書き）

竜介くんたちの空白の数ヶ月は後々書きます。
簡単な展開にしようと思ったら長くなっちゃったのでw

十八話　ハンターになるということ

「ランポス、三体！！」
三匹の突然現れたランポスたちは威嚇しつつ、今にも飛びかかろうとしている。
ランポスは肉食の小型の鳥竜種。小型といっても、尻尾から頭の長さまでになると大人の体長ぐらいの大きさで、高さもそれと数十センチ引いた程度で、元の世界の動物を考えるとむしろ大型といってもいい。見た目は、青と黒の縞模様で目は黄色でとさかは赤。基本的に群で行動しているので、三匹で出てくると言うのはざらである。脚力は強く、引き締まった体から出ている短い腕にはえた爪は鋭く、人間の指ほどの長さがあり、戦闘に特化しているその姿は異様な雰囲気をかもし出している。
「一人で大丈夫です」
と後ろを振り向かず言う。
竜介は手を出せないといっていた。それに、この程度は一人で倒さないといけない。こいつらはこの世界では雑魚である。
こいつらは自分だけで対処しないといけない。
そんな一種の使命感ともいえるものを感じ、背負っていた大剣の柄を掴みなおす。
ランポスは威嚇したままこちらをにらみ、自分は威嚇したまま止まっているランポス三匹に全集中力をむける。
まず動いたのは一匹のランポスだった。
自身の身長より高く飛び上がっての突進。
その跳躍力に驚くも、速いとは言え直線的な動き。大股に一歩ほど左にすばやくよけ、そのまま飛びかかってくるランポスの喉に思いっきり大剣の刃をあわせ、思いっきりふった。
その瞬間顔になにか生温かいものがつき、ランポスが絶命したのがわかった。

しかし、相手は三匹そんなことは気にしてられない。自分の近くにランポスは近づいてきている。
手に重い振動を感じつつ、感覚的に振りあげた大剣をそのまま逆側に落としつつ、そのまま体をひねり、横に薙払う。薙払いに確かな手応えがし、自分の感覚が正解であったことを告げ、ランポスの悲鳴があがった。
「これで、最後！」
そういいながら、薙払いの勢いのまま、回転し、腰の位置で大剣を地面と平行に最後に爪で襲いかかろうとするランポスの頭に、思いっきり突きを食らわせた。
生暖かい血が顔にかかり思わず目をつぶる。
大剣の先が地面にドサリという音を立てながらおち、ランポスは吹き飛び声も無く絶命した。
大剣をしまおうと腕に力をいれようとしたそのとき、横から思いっきり強い衝撃をうけた。
思わず大剣をはなしてしまい、地面に転がり、視界が回転し仰向けになる。次に視界に現れたのは腹の辺りから血を出しているランポスであった。そのままランポスは爪をこちらにたて追撃しようとする。
「やらせるかよ！」
思いっきり足で蹴りあげようとした構えた次の瞬間、発砲音とともにランポスは吹き飛んだ。
「ごめんなさい、援護に時間がかかっちゃいまして」
そういいつつ春樹さんは腰にライトボウガンを固定させていたのを手を離し手押さしのべてきた。
「いえ、ありがとうございます」
「まあ、いらない心配でしたけどね」
「いえいえ、一人でやるとまで言ったのに…このざまではね」
荒い息の中、ため息をしつつ、そう社交辞令じみたことをいう。
三体のランポスの死体に近づいていく。後ろから無言で、春樹さん

がついてくる。
「あんまりみてうれしいものじゃないな」
「たしかに、そうですね」
俺の愚痴に春樹さんは同意してきた。
一匹は首から大量の血を流していて、また一匹は頭がつぶれかけている、極めつけの最後の一匹は内蔵が少々見えている。思わず目を逸らしてしまう。今になって血のついた大剣を重く感じ始めた。
「俺がやりましょうか？少々ならやりなれてますけど？」
と竜介が提案してくるがそれに小さくだが、確かに首を振る。
「物は経験だしな。それに、ハンターになるにはいつかこれにもなれないといけないしな…」
アリスはその優しさからであろうか何もいわないで、逆にハンターに無理してならなくていいとまでいってくれているが、ハンターになってほしいという期待が多少なりともあるように感じる。なぜかはよくわからないが、ずっと一人狩りをしているらしいのでもしかしたら心細いのかもしれない。
それにどちらにしろ、この歳でかつ、身元がはっきりしない自分が手っとり早くお金を稼ごうと思えば、今一番会っているのはハンターになることであろう。
このような、段階で止まるわけにはいかない。
「さて、初めてのはぎ取りといきますか」
明るく言ったつもりであったが声は存外暗くなってしまった。
そういって腰から刃渡り３０ｃｍはあるはぎ取りナイフを出す。このはぎ取りナイフは、切れ味がよいが、太さがそこまでないので戦闘に使うと数回で使い者にならなくなる。それに、切れ味がよいといっても飛竜の鱗を軽々と通すほどの切れ味はない。なので、鱗や甲殻などを取るときは、その取りたい部分の周りとつながっている筋肉を切り、ある程度筋肉ととりたい部位が離れたところで、引っ張り出すという作業をする。モンスターの部位の特に異常な力を秘めている部位は総じてやわらかいという傾向があるので、熟練ハン

ターになるには手の器用さも必要である。そもそも、はぎ取りナイフで鱗を傷つけた時点で価値は一気に下がり、何かの材料とする事は不可能となる。
はぎ取りナイフとその他諸々の説明はおいとき、鱗をとるときは、まずきれいで、大きな傷がない鱗を探す。次に、鱗の合間に、はぎ取りナイフをいれて筋肉とのつながりを断つ。最後に引きちぎり、鱗を取りだす。という行程である。
しかし、意外にも一番難しいのは鱗を選び出す作業である。鱗を持つ生物というのは外敵の脅威にさらされているか、狩りが熾烈を極めるようなものばかりである。そのようなものの中から傷ついていない鱗を探すのだ。もしかしたらないかもしれないし、あったとしても、傷ついた鱗の中でそれを見分けるのは至難の業である。
なれてくると、数秒みただけで分かるようになるらしいが、もはや職人芸のレベルである。
時間をかけて見つけ、やっとの思いではぎ取り開始。鱗をはぐこと自体はそう難しくない。といっても効率がよいとはいえなかった。
それに、傷の付いていない鱗を探そうと思うと、体を間近であらためないといけない。無惨とも形容できるその死はみて気持ちのよいものであるはずがなく、どのようないいわけを持っても、その気持ちは晴れそうになかった。
鱗を切る度にに出る血はその者がつい先ほどまで生きていた事をはっきりと証明し、嗅覚と触覚が麻痺するほどであった。
それでも、何とか鱗をはぎ取り、周りを警戒していた、二人に一言謝る。春樹さんが視線で心配してくれているのが分かるが、大丈夫という意味も込めて、一歩進むと、
「あっちに水があります。血を流していきましょう」
そう、竜介は言うと歩きだそうとする自分の手首をつかみ、歩きだそうとした逆方向に引っ張っていく。
何かいおうと思ったがなにもいえずに、ただ、引っ張られていく。
そのときに、鎧を着た血が付いている自分の腕がふるえ、体を動か

した以外の理由でかなり呼吸が乱れているのに自分は気がついた。
水があると言ったところには池があり、それも、都会のような濁った池ではなく、かなりすんでいて、魚もいるのが一目見るだけで分かる。
血を流し、顔に水をつける。それだけであったけれど、呼吸の乱れと腕の震えは確実に収まっていた。そして、今まで注意力が散漫していたことがわかった。
「顔が青いですよ。なれるといっても無理はしないでさい」
と竜介はどこか素っ気なくいった。
思わず池に移った自分の顔を見るが色まではっきり見えなかった。しかし、自分がどこか疲れているような顔をしているのは明らかである。自分の顔を触り、ネガティブに向かっている自分の思考を引き戻す意味も含め自分の頬を軽くたたいておく、手のひらに巻かれてあるのは硬い布であったので、頬がひりひりしたが、今の自分にはちょうどよかった。
「竜介は、優しいな」
そうただ、本心をつぶやくと、竜介は照れるのでもなく、否定することもなく首を傾げた。ただ純粋に、分からないという感じであった。
「そう…ですか？そうですか…」
そうつぶやくと、何か考え始めた。
そして、照れるのではなく、また否定するのでもない竜介の態度がまたどこか滑稽でつい笑ってしまった。
「ん？どこかおかしいですか？」
その笑っている自分をみて竜介がきいてくるが、自分でもよく分からなかった。
「いや、まあ、ありがと」
そういいつつ春樹さんの方へ歩き始めた。
まだ、竜介は首を傾げていたが、すぐに、自分に追いついて、隣を歩き始めた。

笑ったからか、元気がでた気がした。

十八話　ハンターになるということ（後書き）

竜介君がヒロインの役割を取ってしまった感がいなめない…。ついでに竜介君のイメージが最初とまるっきり変わっているのも後々明らかになります。

戦闘シーンはうまく書けた気は一切しません。読み返して失笑しましたが私の能力ではこれが限界。たぶん。

あと、鎧は私の結構適当なイメージでなりたっています。手のひらに硬い布を巻いているとありますが、現実で本当にまいていたのかは知りません。

十九話　三つの国と一つの組織（前書き）

少々駄文に磨きがかかってる感（もちろん悪い意味で）があります。

十九話　三つの国と一つの組織

その後、短い時間でランポスと数回であった。一度あったら、会いやすくなるのだろうか？
はじめの戦いでは自分は、大剣で突きをしていたが、強化された体でも、大剣でつきを繰り出すと隙が大きいこと。その隙に対して威力はそこまでないので使わないようにすることにした。
二回目の戦いはランポスの数は2体であったのだが、2体倒したときに竜介のほうにもう数体がきた。
そのとき初めて竜介の戦いというのをみた。竜介の戦い方はすさまじかった。竜介が持っているハンマーは対モンスター用のハンマーではなく、土木工事で使いそうなハンマーで木に大きめの石を結び付けたようなひどく簡単なもので、あり、重さは対モンスター用より少々軽いぐらいであった。竜介はそのハンマーを軽々と持ち上げたというレベルではなく、まるで片手持ちの剣のように振るう。竜介はランポスを見つけると飛び上がりながらハンマーを抜き、一匹の頭に振り下ろし、一匹目を排除したかと思うと、もう一匹の向かってくるランポスをなんと左手でランポスの首を掴み、横殴りにハンマーを胴に一発あて、ハンマーを頭にアッパーを食らわせるがごとくふった。
本当に一瞬の出来事であった。
衝撃的であったが、竜介が狩りなれているのは明らかであった。そして、自身が早くもランポスの死体や血のにおいなどに、慣れていってしまっているのが少々気分が悪かったがどうにもこうにもその事実をうけいれるしかなかった。なれないといけないのだ。
その後、薬草、アオキノコ、解毒草もろもろをとり、夕焼けで淡く赤く染まった草原を走り一旦安全な場所まで戻ろうということになった。そのころにはある程度はいろんなものが溜まっていき。薬草などはもう指定された数まで届いていた。

エリアの中には絶対安全という場所はないが、一部モンスターが通れない場所が点在しており、そういうところは珍しいものの、最低でも、モンスターがあまりいないところというのがある。火をたくのもモンスターを寄せ付けなくするひとつの手らしい。ただし、そこがモンスターの縄張りだったり竜種になると話は別になる。一部の縄張り意識の強い竜種なら、縄張りの近くなら火をたくと逆に追ってくるらしい。

それはさておき、なぜ走っているかというと、ただ単純に夜になると問題があるからだ。夜になると当然太陽がなくなる、当然暗くなる。満月が綺麗に出たとしても昼間に比べればぐんと視界はさえぎられ、夜行性の虫が騒ぎ出し、辺りは暗闇となる。例外的に光蟲という、蛍に似ているが、発光の強さが段違いな虫がいたりするとかなり明るくなったりとするのだが、あくまで例外、しかも、蛍の段違いといえどもあたりいったいが少々見えるようになる程度である。だから夜でうろうろするのは危険であり、松明や特殊なモンスターの素材や鉱石などの装備をしていない限り、一般的にも危険だとされる。

とりあえずランポスと出会っても無視し自分たちは走り続けた。

▽▽▽

「ここにしますか」

春樹さんはそういうと見晴らしのよい草原、といっても暗くて周りはよく見えないが、そこに腰を下ろし、腰のポーチから火をつける道具を取り出した。ライターの形状と似ており実際ライター構造は変わらないらしく、デザインが変わったライターというような感じであった。ついでに自分も持っている。春樹さんは拾ってきた小枝に火をつけようとするが、なかなかつかない。

「貸してください」

そういって、ライターと枝を渡してもらい、「あなたは日本人ですか？」と書かれた紙とともに、他の白紙もくしゃくしゃにし、地面に置き、その紙を中央にするように枝で組んで、ライターで紙に火

をつけた。少々湿ってたからつきにくなったが、火をしばらく近づけると燃え始めた。
枝にうまく火がつき始めて来たころ感嘆の声をあげる春樹さん。
春樹さんは案外、インドア派なのかも知れないと思いつつ笑う。
体を動かしたのと、あの戦いの緊張のせいか、腹だけはいつもよりすいていた。この三人全員そうだったみたいで、決しておいしいとはいえない。携帯食料を顔をしかめつつも昼よりペース早く食べきった。
竜介と『明日は生肉とろう』と硬く誓い合ってたころ。
「そういえば、大和君。何で紙持ってるの？」
「お世話になってる人にもっていくよう言われたんです。メモとかできるから役に立つって。といってもメモとして一切使ってませんが」
「でも、何かと入用ですね」
「ええ」
そこからふと夜空を眺めると都会の夜空と段違いに綺麗であった。
天の川という時期ではないのに、天の川のように星がきらめいている。
「それはそうと、変ですよね、この世界」
星をボーと眺めていると春樹さんに話しかけられた。
「どこかがですか？」
夜空を見るのもやめて、春樹さんのほうを向く。
「言葉がどこも一緒ってことです。話している言葉は地方で方言とかあるそうですが、一部例外がありますけどどこでも通じるらしいです」
うなずく。この話はアリスからきいた。ついでに一部例外というのは時折、町から離れて部族を形成しているものたちがいるらしく。部族によっては全くの別言語を話すそうだ。ひとつの世界で言語が統制されているというのは、実感は伴わないが不思議なものだ。
「そもそも、国が三つのひとつの組織というのも不思議なものです。

聞いたところによると国は七十年以上この状態だそうです」
「別におかしくないような…」
俺が率直にそういうと大和さんは首を振った。
「ひとつの組織が、大きな領土を持っているというのが不思議です。しかもその組織って言うのはただ、『ハンター』を束ねる一組織が他の国は少々小さいとはいえ領土を持っている。これよりも不思議なのが国が七十年も続けば戦争、内乱などは何かしら起こるはずです。なのに起こってないそうです。しかも、詳しく聞いてみるとも う百年もそういうことは起こってないそうです。私たちにとって百年前といったら戦前の話ですよ？」
そこで、御影が言っていたことを思い出した。また、夜空に顔を向ける。
「『ギルドに依存しているから』」
春樹さんは首を傾げたがだまって続きを聞こうとしている。
「『戦争が起これば ギルドは介入できなくなる。事実、ギルドは戦争中の国では業務を停止することを規則で明文化しているし、そもそも、ハンター自身が寄り付かなくなる。この世界ではハンターと人々の生活というのはきっても切り離せないものがある。戦争をしたところで、民衆の生活は苦しくなるし、国は遠征用、モンスター用の兵士がいることになる。しかも、遠征の途中には、モンスターがいるところもある。電撃戦で片をつけようにも篭城されたら相手は攻撃しなくとも、モンスターに攻撃される。明らかに守りのほうが有利。戦争を起こしたところで勝機がないんだよ』って」
「それは、『御影』って人が？」
さっきまでうなずいてばっかりだった竜介が聞いてきた。
「ああ」
竜介は難しそうな顔だった。
「『御影』ってどんな人なんですか？」
「…どんな人か。んー……影の薄い人、かな」
そういうと、竜介と春樹さんは頭の上ではてなマークを作っていた

がこれ以上思いつかないので笑いながら寝転がって、また星を見た。
鎧が自分になじんでまるで服を着ている感覚になり始めていることに気がついた。
「あいつ大丈夫かな？」
思わず出た言葉に顔をしかめながら、目を地上で燃えている火に移した。

十九話　三つの国と一つの組織（後書き）

いろいろ遅れてすいません。
文中に戦争は起こっていないとありますが、少々例外があります。
御影の試験中の話はもうちょっと後で。

二十話　人と竜

黒い塊が夜の草原を疾走する。
それは、突進してくる猪より速く、驚いたことにその黒い塊は人間であった。
そしてその足取りは物理的にも精神的にも軽いものであった。
竜介は一人草原を走っていた。
▽▽▽
森丘に限らずエリアの夜は静寂に包まれるということはない。
虫は静まった多くの人間や動物たちの代わりに騒ぎに騒ぎ、時折吹く風は草原や森を揺らしそれ特有の音をたてる。
しかし、今夜はいつもより少々変化があった。多くの人がいるからか、もしくはこの辺りを踏み荒らしたからか。それでいても、少数のおきている人間はそれには気付くはずもない。そもそも、人間にとって自然は御しがたく、度しがたい。こちらの世界では特に『御しがたく、度しがたい』と思うことすら人の傲慢なのかもしれない。それぐらい、自然というものは不思議なものだ。時に酷く、時に優しく、時に救い、時に見放す。
…もしかしたら、この世界を覆っている自然のはみだし物である人間は自然とまた同じくらい不思議なものなのかもしれない。
▽▽▽
試験一日目が終わり、その夜。
もう今にも消えそうな焚き火を囲むように寝転んでいる、この世界では少数である黒髪の男が三人いた。三人とも目をつぶりどうやら眠っているようであった。見張りや罠を一切ない辺り初心者ハンターであることははっきりするが、この周りには彼らを襲うような動物はおらいないのも事実であり。もし、いたとしても、森の中でこっそりと見張っている『教官』たちに試験の合否はおいといてともかく守られていたことだろう。

不意に黒い服を着ている少年の目が開いた。それは、エリアの危険でないところとはいえ、狩りに来る格好ではなかった。
少年は顔をしかめながら、寝転んでいたためついた泥や砂利を払い、寝起きのためか顔をしかめた。それと同時に、案外汗をかいていることに気付いたようで、手で汗をぬぐった。春と夏の中間ともいえる現在。日本と四季がある程度にかよってるこの辺りでは夜とはいえ、少々寝苦しくはなっていた。
無言で立ち上がり、ハンマーを手に取り背中に止め具でとめ、うっそうと茂った森へと体を向けた。
「どこに行く気だ？竜介」
無言で立ち去ろうとする少年に言葉がかけられた。
少年は声のする方向を向くと、鎧を着た男は目をつぶったまま、口だけを動かしていた。
少年はなぜか鎧を着たまま寝るのは窮屈じゃないのか？などという、およそその質問とは全く関係のないことに思考がいっていた。なんにせよ話しかけられるとは思いもしなかったので返答はすぐにはできなかった。
「…寝なくていいんですか？」
少年はそういい、闇夜の方へ再び振り向いた。
「こっちにきてからな、なぜか睡眠時間が短くなったんだよ」
その言葉に再び少年は彼のほうを向いた。彼の言葉のどこかに少年が反応した。事実、彼はこの世界にきてから睡眠時間が少なくなってきていた。それは、守護霊のおかげで体力が増えたからなのか、もしくは、そういう風にしくまれたからか。
「そう…ですか」
その言葉の何がが少年の琴線にふれたのか分からないが少年はそうぼそっとつぶやいた。
「まあ、おきちまったものはしょうがないし、見張りでもしようと思ってな」
「の割には、目をつぶっていましたね」

「不思議と目をつぶったほうがわかることがあるんだよ」
そう彼はしみじみといった。それは、守護霊の恩恵だけではなく、ただ、森の中心で虫の声を聞くこと自体が新鮮であったがために思ったことであった。
「まあ、詳しいことは聞かないが、行くならできるだけ早く帰ってこいよ。４時間か３時間程度しかまだたってないはずだから。明日だってあるんだから寝不足になるなよ」
ともいった。彼は話は終わりだというように寝る姿勢を変えた。
そのとき少年は初めてあることを聞こうと思った。その衝動は突発的であり、なんとなくという言葉で形容できそうなほどであったが、そのことはある日からずっと気になっていて誰にも聞けずにいた。
「朱山先輩、人ってどういうのを人って言うのでしょう？」
少年からのいきなりな質問に彼はさすがに少々戸惑った。
「…それは人間の定義って意味？」
「ええ」
少年の顔は深刻そのもので単に不思議に思っただけではなく、必要に差し迫っての質問であることが伺えた。
「うーん、なんかいきなりだなぁ」
しかし、そう戸惑いつつも、彼の考えは数秒後にはでていた。
「考えれることじゃないの？」
「考えれること？」
思わず少年はそのまま聞きかえした。
「詳しくは知らないけどさ。人間以外の動物って考えて行動しないってわけではないらしいけど、結構その場その場の本能に忠実じゃない？たとえば、この先どうすればいいかの選択を常に考えることができたりするのが人間だと思うよ」
二人とも黙っていた。虫の声が不思議にも静寂といっていいほど少年には気にならなかった。少年自身が今考えている問題がその『考えている』ということ自体が問題の答えだという暴論とも屁理屈といってもいいものが、妙に自身の腑に落ちたのだ。

そして、その静寂を破ったのも竜介であった。
「そう、ですか」
といいつつ、溜めていた息をはいた。
「期待してた答えと違うかった？」
「いえ、予想していたのと違っただけです」
といって竜介は笑った。笑った後竜介は気付いた。ここ最近こういう笑いがなかったということに。
いつの間にか彼は目を片目だけあけて、竜介が笑っていることに対しただ純粋に微笑んだ。
「じゃあ、いってきます」
「ああ、何しにいくかだけ、教えてくれない？」
「こっちにきてから、なぜか早く腹が減るようになりましてね。別に大丈夫ですよ。俺の守護霊からもらった能力は『竜』になることですからね」
「『竜』？」
かれの疑問をよそに自分ひとりだけ軽く笑った竜介はまた森のほうへ向いた。その笑いは自嘲的であった。彼はその疑問に答えてくれそうにないとわかると、
「そう、大変だな。いってらっしゃい」
そう一言いった。
「いってきます」
その言葉を残すと、一瞬で竜介は闇夜に消えていった。
「速っ！」
思わず彼、大和が声を上げたのも仕方ないことだったであろう。

二十話　人と竜（後書き）

遅れたのにこの駄文である。なぜか最近忙しい。
もともと、少々分かりにくくしようとしようとは思ってたのですが、ただでさえ自身の語彙のなさで分からない文章がもっと分かりにくくなっただけでした。しかも短いし。最初の自然の件、作者も何で書こうと思ったのか分からんし。

二十一話　初めての調合

ハンターという職業は大変難儀な職業だ。
力が強ければいいというものじゃない。捜索するのにあまりにも時間がかかりすぎると、力を発揮できない。
食べれるかどうかわからず適当に実を食うと、最悪死んでしまう。
別に、知識や、索敵などだけではない。力、耐性、知識、器用さ、時には直感や運さえもハンターの実力を左右させる。
力が弱いハンターは、淘汰され。
違和感に鋭くないハンターは、奇襲を受け。
頭が悪いハンターは、自滅し。
器用でないハンターは、知識を有効活用できない。
アリスからそのようなことを聞いていた大和は痛感していた。いや、正確に言うとこのパーティーと行動して一日になるがずっと痛感していた。
小型のナイフを見つめ、薬品のようなにおいに顔をしかめる。
今回はというとハンターの基礎技術の一つに調合というものに関してだ。
ハンターは戦いが長期戦になったり、物資が不足している場合、その場その場で物資を調達しないといけない。エリアにあるものは素材のままでは、使い物にならないことが多い。だから、素材と素材を組み合わせて新しい道具を作るのがほとんどである。それをひっくるめて『調合』とよばれる。『調合』でできるものは薬、爆弾、ボウガンの弾、罠、などさまざまである。
朝日に顔が照らされた春樹さんに作業を覗かれ、
「難しいですか？」
と聞かれる。春樹さんの顔を見るとと苦笑いされていた。俺は唸り、目の前にあるものを隠したい思いに駆られながら、一旦ナイフを置いた。

唯一の救いは横にいる竜介もできていないということだ。これで竜介ができていたら、申し訳なくなってしまう。
この世界には回復薬という安直なネーミングの薬がある。前の世界ではありえないような薬効で、瞬間的に傷を回復させる。服用や塗布によって使用し、物が体の中に残っていたり骨が変な方向に曲がったりしていない限り、使用できる。この世界の人々がモンスターに対抗できるようになったのは、これができたからといっても過言ではないらしい。
それを作るのは薬草とアオキノコを『調合』しなければならない。さっき説明したとおり『調合』と一言で言っても、やり方はそれぞれ違う。アオキノコと薬草をを薄く刻み、刻んだものを混ぜて、布に包み、搾り出した深緑色の液体が回復薬の作り方となる。
こう聞くだけなら簡単だが、薬草はともかくアオキノコはかなりの薄さで切らないといけない。そうしないと薬草と混ぜて搾り出すときに液体があまりでなくなる。
薬品を作る調合は料理に似ているとよく言われるらしいが、自分が作る料理というのはざっくばらんにきったものを適当に突っ込んだといった感じでかなり大雑把にきっているためあまり薄くきるということに慣れていない。そういえば、アリスの家にいたお手伝いさんのフィーさんは野菜とかをかなり薄く切っていた。もしかしたらフィーさんのほうがうまく作れるかもしれない。
目の前には、無残な姿になったアオキノコが横たわっている。ほとんどのものは途中で切れてしまっていたり逆に途中で太くなっていた。
春樹さんに苦笑を返しながらも、一応、刻んだ薬草と不恰好にきったのを混ぜ、布にいれ最初から持っていた空き瓶にいれ、布をねじりつつ絞る。空き瓶といってもかなり小瓶だが。
ふと春樹さんの手元を見るともう完成した回復薬が一瓶にたっぷりと入っており、もうコルクのようなものでふたをしている。思わず自分のものと比べてしまいため息がでてしまう。自分の瓶にはまだ

ぜんぜん液体はたまっておらず、布から深緑色をした液体が水滴のごとく、ぽたんぽたんとゆっくりと出ているだけである。いわなくてもいいと思うが春樹さんのものは水滴ではなくゆっくりとであるが液体が流れるように出た。どこにそんだけの水分があるのかと聞きたいぐらい出た。もしかしたら、アオキノコと薬草の水分が出ているというより化学反応に近いものかもしれない。においも薬品に近いし。

絞ったときに深緑の色をした液体が指についた。どうしてもこの深緑をした液体を回復『薬』とよびづらい。深緑の液体…回復薬をじっと見つめ、まあ、体に害はないし、人が飲んでるものだからいうほど味もひどくはないだろうと回復薬がついた指をなめてみた。想像を絶する味だった。もちろん悪い意味で。

まず、なめた瞬間舌が少々ぴりぴりし始め、鼻が薬品のにおいで少々ツンとなり、本題の味に関しては、食べたことは当たり前ながらないが、雑草を煮詰めて、濃縮したような味だった。

一舐めだけだったので、吹き出すほどひどくはないが、小瓶とはいえ、この量いっぱいを飲むとなると特に寒くもない季節だというのに寒気さえも、し始めた。

「大和先輩は初めてだったんですね」

そう竜介が瓶にふたをしつつ話しかけてきた。今日はなぜか昨日より砕けたような話かたをする。それでもいまだ先輩をつけているのは、本人曰くどうしても慣れで『先輩』とつけてしまうらしい。

「ああ、なんというか、これはひどい」

「まあ、あんまりお世話になりたくはないですね」

といって、竜介は顔をしかめる。

そもそも回復薬を作ろうとなったのは、もともと作る必要性があったからだ。支給された『応急薬』は3個しかない。もともとエリアを走り回るだけでも、これだけというのは心細い。それに竜介の課題には『ランポス』の素材が必要であり、怪我をする可能性はかなりあるのだ。自分の持分を分ければそろうのだが、モンスター素材

というのは存外高く売れるらしく、竜介が遠慮した。だから、試験材料に指定されている、『薬草』と『アオキノコ』を苦肉の策で調合して回復薬にしようという話となった。
そもそもランポス程度なら竜介は一人で簡単に狩れてらしい。しかも素手で。だから一人で行こうとしたのだが頼んで、自分もつきあわせてもらうことにした。自分には狩りの経験が絶対的に不足しているのは二人を見れば明らかである。竜介は圧倒的な力。春樹さんは地図を見た瞬間読み取れる。自分は圧倒的ともいえる力はないし、地図だって自分が今どこにいるのか探すのにすら時間がかかる。経験はつんでいたほうがいい。それに自分が倒れても確実に助けてくれる味方がいるというのは心強い。
唯…。
「すまんな、なんか利用してるみたいで」
「だから、気にしないでください」
笑いながら竜介はいう。
「いや、申し訳ないというか…」
確かに自分はただ単純な実力だけではランポスに結構簡単に倒せる。ただ、事実最初の戦闘で、一発攻撃をもらっている。そのほかの戦闘はとどこおりなく行われたのも事実だが、不安材料がどうしてものぞかれない。だから、竜介という圧倒的な実力をもつ存在は、背中を守るという意味以外に、しくじったときの、確実にフォローしてくれる存在というのは自分にとってもとてもありがたいものであった。
その反面、竜介は自分といて特に得なんてないのだ。竜介はランポス程度ならその字面のとおり瞬殺できるのだ。逆に自分と言るとフォローをしなければいけない。そう、足手まといなのだ。
大和は、自身の今までの一般的に短い人生の中で足手まといになったことはそうなかった。だから、足手まといになるということに対して、罪悪感ともいえてしまうような感情を抱いてしまうのである。
そして、その罪悪感と同時に感じたのが、

「俺って弱いのかな？」
という思いである。アリス曰くランポスは雑魚だそうなのだが…。
すると、その言葉を聞き取った春樹さんが、じっと地図をみたままこういった。
「太剣といえども、ランポスを一撃で殺せる初心者ハンターも珍しいと思いますけどね」
「そうなんですか？」
「ええ、一応数人そんな人は見ましたが、腰が引けてたり、武器をただ、振り回しているだけだったり、初めての戦闘がランポス三体っていうのも、結構ハードルは高いですよ。ふつうはじめは草食のものから始めるのがふつうだそうですし」
「草食から？戦闘の訓練として意味あるのか？」
「動物をたたき切るというのは結構重労働ですよ？骨だってあるし」と暇をもてあましている竜介が話に入ってきた。
「でもそこまで重労働って感じでもなかったけどな、いや、確かに最初はかなり疲れたけどさ、それも精神的っていうか、なんというか…」
「…そうですか。私は近接武器じゃないからよく分かりませんね」
「これもやっぱり守護霊の影響か？」
そこで三人とも黙った。本当に守護霊の影響でこうなったのか考えてみるもよく分からないということだけだった。
「そもそも…、守護霊っていうのもどこか曖昧ですしね」
「まだ春樹さんはいいですよ。俺なんて一言きかれて、姿も見ずに目が覚めたんですよ。守護霊なんて存在がいるかどうかも俺にとっては疑わしいですよ」
そういって、竜介は荒々しく髪をかいた。
「まあ、この話は俺の友達とも数回しましたけど…」
「何も分からんかったと」
「ああ、副作用とかいろいろ考えたみたいですけど、結局分からなくて、結論が生きていけるだけ運がいいってふうになりましたけど

ね」
「副作用、か」
そういって、竜介は手のひらを凝視していた。
▽▽▽
その後、最初もあわせ合計三個の回復薬を作った。三個でなれるほど器用ではなく、結果は竜介も同じで春樹さんと比べると悲惨という言葉に限るが…。
俺は調合で作った数個の回復薬の瓶にコルクでふたをし腰のベルトの専用のポケットの応急薬の横に入れた。
その量は横に入っている応急薬の小瓶より少なめでありそれがどこか不恰好であったが、どこか愛着ができた。
「気に入りましたか？」
といきなりバックパックの準備をしていた春樹さんに質問される。
もしかしたらにやけてたのかもしれない。
「まあ、なんとなく…ですね」
といって、笑った。
「私も始めて作ったときは化学の実験の気分を思い出しましたけどね」
春樹さんはそういいながら空を見上げ少々遠い目をした。
元の世界を懐かしく思っているのかもしれなかった。そう思うと今の今まで不安から思い出すことを避けていたが自分も同じく元の世界のことを思い出し始めた。
そういえば初めての化学の実験のとき…。あの時も、そういえばあの時の実験のときも…。
…。
ため息が思わず出た。
「どうしたんですか？大和先輩」
「化学の実験の同じ班にな…」
そういい、ひとつため息をつく、竜介の方向を見ずに続ける。
「通算十個以上の試験管を割ったやつがいた」

「「え　？」」
道具の準備をしていた春樹さんまでもが手を止めてこりらを振り向く。
当たり前ながら、小中高の学校生活の中で通算でビーカーを割る数というのは三個程度が相場である。誰が三個という結論を出したのかは謎であるが。
「化学の実験になるたびに割っててな、触らないってことになったのだがな。触らなくてもふとした拍子に割りまくってな」
としみじみと続ける。
「だから、幼馴染として、しょうがなく、その割ったガラスの処理をしたんだよ。なんか、その思い出しかない…」
あいつに任せてたら普通に指きりそうだったしな…。
横に目を向けると竜介はどう言葉をかければいいのか迷っていた。
「そいつ、女っていうのもあって料理はできて、皿とか割ったこと見たことないんだけどな」
「えーと、まあ、世界にいろんな人っているんですね」
「そうだな…」
変わったやつが俺の周りに集まってきている感じがぬぐえない気がして仕方がないがな。
そこでふと思った。御影は俺の家の近所で竜介は俺の家の近くの校区で、春樹さんは俺の家の結構近くでこちらの世界に来たらしい。ここに元の世界から来た人が三人、御影を合わせれば四人いることになる。ただ、春樹さんと竜介と会う前に自分たち二人だけこちらに来たと思っていたように、もしかしたら、もしかすると…。
「こっちにきているのかもな」
口をついて出た言葉は何の根拠も、何の証拠もなかったがどこか現実味を帯びていた気がした。

二十一話　初めての調合（後書き）

とあるフラグをここで立てるつもりは一切ありませんでしたが気付けばそうなってました。どんなフラグかはご想像にお任せ、というか書いてあるも同然ですが…。

ついでに作者は高校生なのに最近の実験で試験管を一個（本？）やらかしました。

二十二話　豪勢な昼食？

戦闘、といっても、ほとんどランポスだけであるが、は基本的に自分と竜助がランポスに近接攻撃を仕掛け、春樹さんが一部援護するという形であった。基本的に竜介と自分は交代していき、戦闘をこなしていく。竜介の場合圧倒的な力で一蹴できるのだが、自分の場合そうではない、春樹さんの援護が入る余地がある。一体だけに攻撃されるのならば全然問題ないのだが、相手は複数。特に知能の低いランポスは相打ちの危険性も考えず同時に攻撃する可能性が高く、事実、春樹さんの援護が回避せざる終えない状況を攻撃に転じることが可能となることはよくあった。その代わり…。

「す、すいません」

「いえ、こちらこそすいません」

といった感じの謝り合戦が開催されることとなった。

なぜかというと春樹さんは基本的に五メートルから十メートル程度はなれている。それ以上近づくと自分が大きく動いたときや、ランポスが急に飛び掛ってきたところで、当たる可能性があるからだ。正直、同士討ちなど笑えない。ところが、激しく動く自分が射線上に入ってしまうことが多く、自分は異常に鋭くなった勘でどうにかよけていたが、掠ることもある。しかし、使っている弾は、ギルド支給の無料配布されている弾である、通常弾ＬＶ．１のため、直接当たっても、鎧のおかげで衝撃がくるだけですむし、この世界のボウガンというのはかなり特殊であり、弦の力と火薬の力を併用させ発射してるらしいが、明らかに弾道が曲がっており、明らかに照準とずれているように思えるので、春樹さんが悪いとか言う前にこれはしょうがないのでは？とおもうのだがどうやら精神的な問題のようだ。そして、自身より年上で落ち着いていてそれでいて、自分たちの引率をしている人ともいえる存在である春樹さんに謝れるとこちらが申し訳なくなり反射的にこちらさえも謝ってしまう。その結

果がこの謝り合戦である。
そんな謝り合戦を尻目に竜介が、ランポスを剥ぎ取っていた。
「集まりましたよ」
竜介はそういうと二枚の鱗を見せた。
自分たちが探すのが下手なのかランポスの鱗は思うように集まらなかったのだが、さすがに集まり始めた。
「『アオキノコ』と『薬草』はもうとり終わりましたよね？」
自分はもう見慣れてしまったランポスの死体に目を向けながら春樹さんに質問した。
「はい」
「あとは大和先輩の竜骨【小】5個と春樹さんのモスの苔皮1枚と俺の苦虫3匹ですね」
「どれでも危険地域でないところで取れますし、昨日キャンプした辺りまで戻りましょう」
その提案に竜介と自分はうなずく。
竜骨【小】は骨の中でも比較的堅く軽い骨である、【小】と銘打ってあるが一メートルあるものもあるため縄で背負っていかないといけない、ランポスからはとりにくく、アプトノスなどの大柄な草食なモンスターからよく取れる。アプトノスは縞々の体に固めの皮膚を持っていて、恐竜が連想できるような見た目をしている。基本的に群れを成しており、子連れであることも多い。性格は基本的に臆病で、仲間が攻撃を受けると反撃せずに一目散に逃げ始める。時折子供に攻撃すると時折反撃してくるらしいがあまり見ることはない。アリスとはじめてあった後の猫車の上でも見えていて、御影が暇つぶしに見ていたモンスターのほとんどがこれであった。ついでに、適応力がかなり高く大体の土地には住み着いているらしい。
『モスの苔皮』のとれるモスは地味な色をした背中にコケ時折キノコの生えた豚のような生き物でキノコが生えておれば基本的にいる。頭に堅い皿のような部位があり、危害を加えるとそれで突進してくる。

双方ともこちらから危害を加えぬ限り無害であり、ランポスがよく出る場所では逆にランポスを警戒していない。だから、安全地帯である昨日の場所のほうが見つかりやすい。
『苦虫』は少々でかいアリの腹部を膨らましたような見た目らしく。少々効果がいまいちであるが解毒効果があるらしい。味は知らないが『苦虫』というぐらいのなら苦いのだろう。捕食対象にされにくくするため苦くあったそうだが、苦いとかそんなこというより贅沢言うとアリを生で食いたくない。父親の見ていた番組ではアリを食っているものもあったが、興味をそそられるはずもなく。そもそも虫を食うという行為自体を好くやつが現代日本人にいるかどうか…。そういえば…。
そこで考えるのをやめた。とりあえずこの世界に来て初日の満月食堂で親友が巨大蜂を食ってる姿がはっきりと頭に思い浮かんでしまった。
と、とりあえずだ、苦虫は結構そこら中に生息しているらしく、支給用に配られた虫網を使えばわざわざ危険なところをうろつかなくとも大丈夫だろうといった話だった。
「帰る途中にいるかもしれないしな」
「そうですね」
と竜介が自分の発言に同意する。
「そうと決まれば、戻りましょう。それで、戻ったら一旦、全員別行動にしましょう、怪我の危険性もあまりないでしょうし。あと、まだ昼までに時間がありますから、今日はモスとアプトノスで取れた肉でなにか作りましょう」
その春樹さんの提案は喜ばしいものだった。訓練が始まってからは携帯食料だけだったからだ。携帯食料は本当においしくない。しかも、量的にいえば、一口二口で食べれないこともないというレベルで腹は膨れるけれども、あんまり食べた気はしなかった。
それは竜介も一緒のようであり、戻っていく途中、昼飯のメニューについて延々と話し合っていた。

▽▽▽
自分は無言で大剣をふりおろす。
返り血がかかり、アプトノスの低く呻くような悲鳴が生々しく聞こえる。
首が地面に落ち、惨たらしく倒れる。血のにおいがし、回りに複数いたアプトノスは一斉に逃げ始めた。
「ごめんな」
そういいながら背中の皮を裂き背骨の周りの肉を切り取り肋骨の長い部分をとりだす作業を始めた。
やはり、ランポスは自分を守るためという理由でまだ殺すこと自体の抵抗はそこまでなかったけれども、目の前でただ草を食べていた草食のモンスターを狩るのは少々きつかった。
この作業を後数回行わないといけないそう思うと気が重かった。しかし、これもなれないといけない。いや、なれてしまうのだろう。
事実、初めてランポスを狩ったときのような衝撃はあまりなかった。
▽▽▽
キャンプに戻ると竜助と春樹さんはもう戻っていた。
「あ、帰ってきましたか？って、丸ごともってきたんですか・・・」
さすがの春樹さんも苦笑していた。自分は一頭のアプトノスを背負っていた。正直重いが、そこまでの距離が離れていたわけではないので、特に問題なかった。ただ、やはり元の世界のままの筋力だったら持ち上げれたとしても歩くのはきつかっただろう。
「ええ、もったいなかったので」
そうはいったものの正直どの部位がおいしいとかそういうことがわからなかったのも事実であったが。
ふと地面をみると、何かの動物の皮が干してあった。こけがついているからおそらくモスの苔皮とはこれのことだろう。その横にアプトノスを横たえるようにおいて、なんとなくたったままそのモスの皮をじっと凝視していると、
「とれましたか？」

竜介が火をつけるために枝を組みながら聞いてきた。
「ああ、何とかな」
背負っている骨、つまり、竜骨【小】を見せるようにいう。
「じゃあ、俺も苦虫はとっちゃいましたから、明後日提出すればいいだけですね」
「そうだな」
最低でも三日間フィールドで野宿しなければいけないので、もちろん提出はあさってになる。
「まあ、これでやっと密猟とか嫌みをいわれずにすみますね」
竜介が顔をニヤニヤさせながらいった。
「密猟って…。ここらへんはともかく地方では結構誰でもやってるって聞いたんだけど？」
竜介の隣に座り荷物を降ろし、兜と上半身の鎧を脱いだ。今まで、蒸し暑かったのが、気持ちのよい風にが、汗を一気に乾かしはじめ、とたん上半身が涼しくなる。もう、夏も近くなってきている。上半身の鎧を脱ぎきると
「まあ、あそこのイケメンさんと違い、俺はあまり社交的でないので…」
と竜介は返し、春樹さんの方をみながら肩をすくめた。なにかあったのだろうか？地元のハンターとうまく言ってないだろうか？そんな考えが浮かんだが、竜介は口元に伸ばした人差し指を当てて、『黙っといてください』という風にジェスチャーをし、怪訝な顔をする自分の耳元で小声でこういった。
「ちょっと、一人に嫌われましてね。こっちから離れてるんです」
竜介は元の態勢に戻るとふぅと軽いため息をついた。
「お前も大変だな」
自分はそういいながら苦笑する。
「まあ、こんなことに巻き込まれて生きてるだけでもマシですしね」
『生きているだけでまだマシ』御影の言葉を思い出した。
「そういえば、俺たちがこっちにきたとき、早速密猟で捕まったな」

「それは…運がわるかったですね」
「いや、捕まえられたけれど助けてもらって、衣食住を提供してもてるから、運がいいといえばいいのだが…」
というより、あのままアリスと出会わずにいたら、大怪我、下手してたら死んでたかもしれない。
竜介と一緒にだべっていると、春樹さんが
「大和君。早くさばかないと腐っちゃいますよ?それとも私がさばきましょうか」
といった。自分は完全に駄弁る態勢に移行していたため、急いで起き上がり。
「ああ、すいません。今からやります」
といって、さばきにかかった。といっても、実際の裁き方をよく知らないので時折春樹さんのアドバイスをもらった。春樹さんから聞いたら、地元の猟師さんに聞いたとか。そのアドバイスもあり初めてにしてはうまくさばけた。
▽▽▽
「「「いただきます」」」
三人声をそろえ食べ始める。
品物は春樹さんが採ってきてくれた山菜と肉のスープとただ純粋に塩だけふった肉である。
自分が狩った以外に春樹さんのモスも含まれてるため肉の割合が異様に高いが、そんなに塩を持っていないため味が濃いというより薄く、少々特有の臭みもあった。それでも今まで携帯食料ですましていた食事にくらべるとかなり豪勢でそして比べずとも十分おいしかった。
「にしても、珍しい経験をしましたね。大和君」
とふいに笑いながら春樹さんが話しかけてきた。
「珍しい経験?」
自分は首を傾げた。
「一から食材を料理して食べるという経験は珍しいものですよ」

「ああ、そうですね。確かにいい勉強になった気がします」
「毎日食べているものが生きていたというのは実感しづらいですしね」
「まあ、こっちにきてからはずっと実感できますね」
と竜助がぼそっとつぶやいた。それを聞くとふとひとつの疑問がわいた。
「竜助と春樹さんはいま、どうやって生活してるんですか？」
「私も大和君と同じく初めてあった人の家で恥ずかしながら世話になってます」
「？竜助はちがうのか？」
「いやー。あってからそこの娘さんに嫌われましてね。居心地も悪いんで出ていってテント生活ですよ」
「え、食費とかどうしてるの？」
「ランポス狩って、素材とって、売ったり、草食獣狩って食ったり」
「アルさんも別に娘は年頃なだけだから気にしなくていいっていってるのに…」
春樹さんがため息をつきながら言う。アルさんとはおそらくその世話になっている人のことだろう。
「どちらにしろ、テントの方が自分の気にあってます。自分勝手に過ごしたいんで」
と竜助は空を見上げつぶやいた。
つられて空を見上げると雲はほとんどなく試験が終わるまでに雨が降るなんていう事態はなさそうだなとなんとなく思った。
「やっぱり少々味が薄いですかね？」
と春樹さんが肉にかぶりつきながらいう。
「そうですか？俺はこのままで十分なきがしますけど？」
と自分が答えると、竜助が
「俺も薄いと思いますけどね…。そういえば塩って唐辛子より結構値段がやすいからついつい買いすぎになるんですよね…」
とつぶやいた。どうやら、物価を知っているってことは竜介は本当

に完全に自炊しているようだ。自分もアリスのメイドである、フィーさんの買い物についていったことがあるが、いまだに物価がよくわからない。それでも、塩はそこまでいうほど高くなかったはずだ。そこで自分はふとあることを思いついた。
「そういえば、こっちの世界の塩って内陸辺でもやすいですよね？」
「そういえば、そうですよね」
「？塩ってそんなに高いものですか？」
「えーと、竜助君も知ってるかもしれないけど、塩ってね基本的に海でしかとれないじゃない？だから、内陸部にいくにつれて、輸送費とか税金とかでいろいろとられちゃうから、だんだん値段が上がっていっちゃうし、塩って大切だから、どうしても買わなくちゃいけないしで値段が結構上がったりするんだ」
「へー、でも、この世界って結構狭いですよね？たしか、村が結構沿岸部ですけど大陸の中心のここまで、車で数週間しかかりませんでしたよ？」
「確かに、そうだな。そこが結構関係してるのかもな」
そう自分が答えたものの、やっぱりというか結局推論の域を出なかった。
「逆に蜂蜜は高いですよね？」
竜介が思いついたようにきき、
「回復薬にまぜると、回復薬グレートつまり回復薬の上になりますしね」
春樹さんはそれに一応という風に答えた。このことはこの世界では常識レベルだ。
「蜂蜜混ぜたら、薬効があがるというのもおかしな話ですけど」
自分があつあつのスープを啜りながらいうと、
「いえ、ただ単に回復薬が蜂蜜を入れるのが一番まだましに飲めるだけだそうですよ」
春樹さんが肩をすくめながら否定する。
「なにそれ？」

思わずスープを噴出しそうになりながらも何とか質問する。
「いえ、くわしい話はよく知りませんがそうらしいですよ」
「…じゃあ、よく効くっていうのは心持の問題？」
「おそらく」
といって春樹さんはうなずく。心持って…。思わず自分の頭を抑える。
その後とりとめもないような会話をした後、
「明日一日どうします？」
と春樹さんが聞いた。俺たちはすでに課題は終わっており、明日一日はただ過ごせばいいだけであり、最悪、ここら辺で、ごろごろしていても全くの問題はない。
「俺は金稼ぎもかねてランポス殺しに行きますけど」
と竜介が手を上げながら答える。
「じゃあ、俺もついていっていいか？」
自分は経験不足である。ついていって、多く経験をつんだほうがよいだろう。
「ええ」
「そこについていこうかな」
と春樹さんも答える。明日も三人で行動することになる。
「じゃあ、明日はランポス狩りってことで」
と竜介が少々笑いながらまとめる。やはり、一人で狩るよりも複数人で狩る方がうれしいのだろうか？
「食べ終わったらどうします？」
ふと気付いたように竜介が付け加えるように言う。
「とりあえず体を洗いましょうこのままじゃ、少々不潔です」
「そうですね」
首の辺りを触りながら返事をした。よく考えれば昨日からずっと鎧を着っ放しでかなり汗臭くなっている。それに加え、泥もついており、結構汚い。この世界は場所によっては異なるものの風呂があることにはある。しかし、この辺りは基本的には体を拭くことで済ま

せている。一応、ギルドの自治区はいろんなところからいろんな人が集まるため、アリスが言うには高めらしいが銭湯もある。
といっても、この状況ではおそらく川での水浴びになるだろう。おあつらえ向きに近くに川もあり、川幅も大きくゆったりと流れている。そういえば何かの授業で、日本の川と外国の一般的な川の違いは流れる速さと川幅だ、といっていた。この川はどちらかというと外国の川に似ている気がする。
そんなことなどをとりとめもなく考えていたら。
「とりあえずこれを食べて、体を洗ってから夜までのすごし方を考えましょう。じゃないとさめますよ？」
「そうですね」
自分がそういうと、同じく手が止まっていた竜介と一緒にまた昼飯を食べ始めた。

二十二話　豪勢な昼食？（後書き）

だれか、サブタイトルのネーミングセンスを。
今回はリアル事情によりかなり遅れました。すいません。
また更新速度を戻していきたいと考えてます。

二十三話　その頃二人は…

あちらの世界にあるような電灯というものはなく、基本的に明かりは松明や蝋燭でとっている。そのため、星明りは、はっきりと見え、月のある無しは夜の明るさにかなり関係してくる。しかし、こちらの世界に住む人にとって、月が夜の太陽で、星がはっきり見えることは当たり前のことで、そのようなこと歯牙にもかけなかった。もちろんそれは、大和と御影を居候させているアリスもその使用人であるフィーもそうであった。

▽▽▽

テーブルに座ってアリスと話をしながらの久々の二人きりの食事が終わった。黙って流し台の水が入ったたらいにアリスの分の食器もまとめて入れた。話の内容はいつもは食べ物とかについてなのですが、今日ばかりは最近、帝国の内戦について話した。

帝国は世襲の皇帝つまり、代々、皇帝の子供を皇帝にしてきた独占的な支配体制の国である。王国もそうであるが、帝国は王国と違い世襲制の領地と領主というものが存在せず、皇帝の命令が直接伝わっていく。一応市長などはいるが、皇帝の命令を具体的にするという役目である。しかし、最近３０になったばかりの皇帝が急死した。もちろん後継者は世襲であるが、兄弟はいなく、後継者候補は年端もいかぬ子供が数名いる程度である。皇帝が後継者を指名していれば事態はまだマシであったが、その年で死ぬとは思っていなかったらしく後継者を指名していなかった。そして現在帝国では次の後継者をめぐって内戦が起こっている。大きな戦いは起こっていないが、後継者候補への襲撃事件は何回も起こっている。

ここから遠く離れた帝国であるが、内戦が起こりかけていて、それを警戒してギルドが閉鎖。閉鎖したということは実質的に帝国領内でのギルドの依頼が受けれなくなり、帝国近辺の雪山、火山で取れるものの流通が滞り始めている。雪山や火山は直接的に生活には関

係しないものの、一部の薬の材料、宝石や鉱物などハンターに関わるものが高値になり始めている。
アリスのピッケル代も高くなるだろうな。
そんなことをきているメイド服の袖をまくり、たらいに手を入れ、石鹸を泡立てながら考えていると、
「早ければ明後日帰ってくるのよね」
とアリスがなんの脈絡もなくつぶやいた。誰が？などということは聞かずともあの二人だということが分かる。あの二人が試験を受けに入って数日、おそらく今頃二人は試験の二日目の夜を迎えているでしょう。
「その話、もう今日で何回目だと思ってるのですか」
そういいつつ、私はため息を軽くついた。正確に言うと四回目である。
「アレだもんね、フィーあの二人のこと苦手だもんね」
とアリスがやけに間延びした声で返事をする。
「いきなり、身元不明の密猟者を連れてこられて苦手にならないほうが珍しいと思います」
しかし、そうはいっても最初に比べればちゃんと話したりしているほうだ。最低でもにらみつけたりする必要はなさそうだった。というより、にらみつけたら苦笑いされ、わざわざするのがばかばかしくなった。
「二人とも別世界から来たらしいからね～」
アリスは声を出して笑った。
「信じてるのですか、その話？」
アリスのほうを顔だけ向ける。
「まあね」
アリスの声音から本当に信じていることが分かり、石鹸の泡がついた手で思わず頭をおさえそうになった。
その、二人がもといた世界の話は少々聞いている。正直言って、何かの与太話にしか聞こえない。モンスターのような竜種はおらず、

夜でも光が町にあふれ、とんでもなく早く空を飛ぶ機械がある世界。確かに夜に町に明かりをつけようとした試みはあったらしいが、松明ではその付け替えがなかなかに大変で、今自分たちを蝋燭はすぐ消えてしまう上に量もかなりかかる。唯一の例外として、夜や、暗い場所で狩りをするときによく使われる緋夕石というその名の通り緋色つまり、ちょうど夕日のような色に光る石があるが、まあまあ値が張り、盗られるのがオチだということで、そういう計画は頓挫した。第一、夜までやってる店は大体がそれぞれが松明で外に明かりを照らしていて、そこそこ明るく、そこまで明るくする意味はないと個人的には思う。

そこまで考えたところで皿洗いの手が止まっていることに気付き、手を再び動かし始めた。

実を言うと、アリスも異世界の話については疑ってたが、普段は一切態度に出さないが大和が本気で帰る方法について悩んでいて、御影はその悩む大和を心配していることを知ってから異世界について信じ始めていたのだが、その事実をフィーは知らない。

「もうちょっと人を疑うということをしてください」

アリスと出会ってからこれをいい続けている。数ヶ月に一回はいっている。最近は数週間に一回は言っている気がする。

「まあまあ、いいじゃない。あの二人だって悪人じゃないんだしさ」

「何を根拠に…」

「勘！」

今度はアリスにもよく聞こえるように思いっきりため息をついた。

私を助けたときもそうだった。帝国で奴隷身分から私を解放してくれたのはアリスである。しかも、使用人として、給料までだしてくれて。敬語で話すと『敬語で話さなくてもいいよ』といわれ、アリス『様』というと『呼び捨てでもいいよ』といわれ。今ではなれて、友達兼使用人といった感じであるが正直最初アリスとはどう接すればいいのかよくわからなかった。私が一人で生活できると分かるとこの家だってかなりの金品があるというのに雇って、いや、出会っ

て間もない私に一人で留守番を任して、狩りにいったこともしばしばあった。
一度、なぜ私をそこまで信用するのか？と聞いたことがあった。
『悪い人に見えないから』『なぜそう思われるのですか？』『勘！』
という、今と一切変わらない会話がなされたことがあった。
「勘で物事を判断しないでください。それにあの二人は…少々異常です」
「異常？別世界の話は確かに変だけど…」
「そこもそうですが…」
いうかどうか少々迷った後で口を開いた。
「二人を尾行したことがあったのですよ」
「うん、知ってるよ」
思わず皿洗いの手がぴたり止まる。
「えーと、なんで？」
焦ったせいで口調が乱れた。
「数週間前だったかな？ヤマトとミカゲが外に出るたびにちょっと間をおいてフィーが出てたときあったもん」
「ま、まあそれはさておき、まずミカゲさんを尾行してきたときですが…」
ばれてたことに動揺しつつも話を続ける。
「ですが？」
アリスも案外ノリノリで話を聞いているようだ。
「人ごみに入った瞬間見失いました」
「え？」
「しかも、何回も何回も、最悪のパターンでは角を曲がった時に見失いました。影が薄い薄いとヤマトさんに言われ続けてるとはいえこれは異常です」
「ミカゲっていつの間にかいなくなって、いつの間にかいるもんね」
とアリスは腕をくんで、いろいろと思い出していた。正直言うと他にも買い物に行ったときにいないと思ったら後ろにいたり、隣にい

るかなと思っていたときにどこにもいなかったりすることが多くて、それでも、いつも最終的には後ろか隣にいるので、こちらとしても、もはや気にしてないですが…。
「ヤマトさんも少々異常です」
「うーん、ヤマトってそんな変かな？」
「ヤマトさんは確かに気さくな方ですが…」
「あれ、案外高評価ね」
「苦手であることには変わりありませんし、信頼するかどうかは別ですけどね」
といつもの口調でいう。
「むぅ、強情な。数ヶ月も同棲してるなら…」
「『同棲』じゃなくて『同居』です！」
ときつい口調で訂正しておく。
「別に変わらないじゃん」
あっけらかんとアリスが言う。
「大違いです！！」
そして、それも再び訂正。
「細かいことは気にしない、気にしない」
「細かいことじゃないからいってるのですけど…」
なんとなくアリスはいつか悪気なく、男をなかせることになると思う。
「まあまあ。で、ヤマトの方はどうなったの？」
ため息をつきながら口を開く。
「全部ばれました」
「えーと、どういうこと？」
「そのままの意味です。玄関にいくと待ってたり、尾行中のこちらに手をふったり。どうして気付いたかきいたら、いつも『なんとなく』って返されるんですよ」
「ヤマトは勘いいらしいからね」
「勘がいいのレベルを超えてると思います」

確かにあの二人は人がいい。ミカゲさんは無口だが、決して自分の世界にふさぎ込んだりしているわけじゃない。買い物の手伝いもしてくれたのも事実であるが、やはり変なのである。別世界からきたという話もそうだが、異常な影の薄さ、異常な勘のよさがそれをさらに異質な感じを生み出している。

「まあ、私は人を疑うより信じる主義だしね」

「それで押し通せるアリスを時折尊敬します」

「確かにあの二人は変わってるよ。でも、悪人じゃないから」

「…その根拠は？」

「勘！」

お決まりの会話をまたもした。これで何回目だろう？

「そのお人よし体質も考え物ですね」

といって、たらいを持ち上げた。顔がにやけているのが自分でも分かった。

▽▽▽

高い工事費を払えば水道が作れるがこの家に水道はない。というよりも、水道が作られてある家というのも珍しい。だから、近くの川で水を汲んでこないといけない。近くの川といっても、この立地はかなりいい場所にあり、裏口を出てすぐに川がある。

持ってきたたらいを川の近くに下ろし、食器についた石鹸を洗い流しはじめた。

食器を洗いながらも、考えるのはあの二人のこと。

私が何を言ってもアリスはあの二人を信じるだろうし、あの二人を追い出すことなんて絶対にないだろう。私がアリスの好きなところはそこであり、心配なのもそこである。

そう考えると、アリスを忠告するつもりで言っていたのだが、自分のいった言葉は無駄なのではないだろうか。どちらにしろ、二人はこの家にこれからもおそらく住むことになる。

そこまで考えがいたったところで、ミカゲさんの、確かアレは、一週間前だった。そのときの言葉を思い出した。

そのとき私は、買い物に一緒に言ったとき、今と同じようなことを考えて、どうせなら仲良くなろうかなと思い無理に話題を探して、話しかけて、あまり話せずに終わってしまった時だった。
『別に、そこまで無理して仲良くなろうとしなくても大丈夫ですよ。知ってると思いますが、自分は無口ですし、大和ともそんな用がない限り話しません。だから、気にしなくても大丈夫ですよ。』
たぶんそのときミカゲさんは笑っているつもりなのだろうが、私にはやはり無表情にみえた。
無理して仲良くならなくても大丈夫というのはどういうことなのだろうか？
空を見上げると、いつもと変わらない綺麗な星と満月が黒い夜空を飾っていた。

二十三話　その頃二人は…（後書き）

今回は今までほとんど名前しか出てこなかったアリスのメイド（使用人と書くより夢がある）であるフィーさん視点です。
ちょっとしたフラグと世界情勢と、フィーさんの過去と心境変化、とほんとにちょっとしたこちらの世界の紹介です。
実はあまり重要ではありません。書くのにかなり時間かかりましたが…。

二十四話　狩られる者と狩る者

試験三日目
まだ太陽も見えず、薄暗く、肌寒かった。
春樹さんはまだ寝ている。自分を食べてしまう肉食の動物がいる近くに寝ているというのにぐっすり寝ている点、春樹さんって案外図太いのかな？と失礼なことを考えていると、砂利がこすれる音が聞こえ自分は無言で目を開けた。
「大和先輩、おはようございます」
「ああ、おはよ」
そこに立っていたのは、口元が血で真っ赤に塗れた竜介だった。
「…口元に物騒な液体がついてるぞ」
「おお、と」
そういいながら口を黒の服の袖で拭う。
「生で食ってるのか？」
黒の服で目立たないとはいえ、濡れててかっている服を見ながら聞いた。
「ええ、まあ」
と竜介は目を逸らし、頬をかきながら答える。そんなことすれば、食中毒の腹痛でのた打ち回りそうなものだが、竜介は昨日もやっていたのにそんな様子は一切ない。というか生で食べようと思ったことなんてなかった。
「まあ、いいか」
この世界に来て慣れた思考停止をしつつ、服から視線を戻した。
「大和先輩や、春樹さんにはさすがにすすめれませんがね」
「すすめても食べないよ」
と笑いながらいう。
竜介はためてた息を吐き出して、額を拭った。
▽▽▽

朝日がぎりぎり地平線から出てるか出ていないか微妙な位置で、まだ少々薄暗い。吹いてくる冷えた風が頬に触れる。
「さて、今日はランポスを狩るという予定ですが…」
と春樹さんは地面に広げた地図を風に飛ばないようにおさえる。
三人とも準備は万端で荷物は背負い、無線機を耳につけ回復薬応急薬は腰のポーチにつめて、武器ももちろん背負っている。
「少々、奥に向かいたいと思います」
そういって昨日いったところとはまた別の、山に囲まれたちょっとした盆地のようになっているところを指した。
「別にいいですが、なぜそこなんですか？」
すると、春樹さんは地図のあるところを指差した。そこには『危険』とかかれていて、よく見るとその盆地のようなところは『危険』と書かれた文字から伸びた線で囲まれていた。つまり、今日行く予定の盆地は『危険』であるということだ。よく見ていると昨日の場所は『注意』という文字から伸びた線に囲まれていた。
「…大丈夫なんですか？」
と俺はいった。その、誰か書いたか分からないが、手書きの綺麗な『危険』という単語の活字にちょっとした不安を覚える。
「大丈夫ですよ。まあ、はっきりいいますと、この試験は今回から難しくなったといわれてますが、ランポスが一番の敵です。それも、試験一週間前に、飛龍はすべてかりつくしていて、ランポスの群れもある程度狩られています」
「ランポスには群れのリーダーがいると聞いたことがあるのですが…」
「これで何とかします」
そういうと、ポーチから黄色に塗られた何かを出した。
「支給されたセンコウダマです。…えーと、ふらっしゅばん？閃光手榴弾？っていえばわかるかな？」
一瞬『センコウダマ』が『閃光玉』に自動変化されなくて、分からなかった。もちろんハンターの基本の『き』どころか、一般人でも

知っている『閃光玉』を脳内で変換できなかったことに恥ずかしく思い、あぁといいつつ顔をおさえてしまう。
「まあ、よく使いますから自然に覚えていけばいいでしょう。で、ドスランポスは二体同時に出てくることはなかなかないらしいですし、ドスランポスの取り巻きも閃光玉である程度足止めできますし、ついてきても普通にはしって逃げれます」
苦笑いをしつつ春樹さんが解説をする。
それでも、やはり不安を感じたが、春樹さんがここまでいうのだから、大丈夫だろうという気もしてきた。
「じゃあ、そうしましょうか」
「竜介君はどうします？」
と春樹さんが今までじっと話を聞いていた竜介に話を振る。
「別に問題ありませんよ」
「それじゃあ、ここに向かいましょうか」
といって春樹さんは地図を懐にしまう。
「太陽がこっちだから。こっちですね」
と太陽の方向、つまりいまは朝だから、東を指した後、北を指す。
「あってます」
「じゃあ、俺が前、竜介が後ろを」
「分かりました」
そういって自分たちは進み始めた。
・・・・
始め異変に気付いたのは竜介であった。
そのとき、いきなりランポスが飛び掛ってくるような、森や背の高い草は生えていないような場所ではなく、開けた草原にいたので、みんな警戒はあまりしていなかった。
三人で『この世界でも太陽は東から西に移動する』という話で春樹さんの理科講座が始まりかけたそのとき急に竜介が
「すいません、ちょっと静かにしてください」
といった。先頭にいたため竜介の顔は見えなかったが、声がいつも

になく真剣であり、疑問も持たず、話をやめ、動きを止めた。
途端、会話で気にもしていなかった木々が風で擦れ合う音、どこかで聞こえる鳥や動物の声。その中に、
「人の声か…？」
俺がつぶやく。
「ええ、そうです」
竜介がすぐさま肯定する。
「別にこのテストは受けてるのは私たちだけじゃないから、不思議なことではありませんよ」
春樹さんは人の声を直接は聞こえていなかったようだった。
「ええ、そうです。だから問題は…」
そこで遠くのほうでモンスターの咆哮が聞こえた。咆哮は山彦のごとく、反響し周辺に広がっていく。
「竜介君。この声は」
「たぶんドスランポスです」
人の声とドスランポスの咆哮。頭の中ではこの二つは疑いのなく結びついた。不思議と、監視員がいるから大丈夫だという考えが一切わかなかった。いや、そのこと事態は考えたがなぜか一瞬でもみ消された。
「いやな『予感』がする。行こう」
俺が少々、不安になりながらもそう伝えると、
「杞憂だといいんですが…」
春樹さんが顔をしかめつつライトボウガンの弾の確認をしつついった。
「まあ、行ってみるだけいってみましょう。何もなければ万事解決ってことで」
唯一、無表情で耳をそばだてている。
「何かあったら？」
俺が少々意地悪く聞いたら、
「その場合は、解決するしかありませんね」

と竜介はしれっといった。そのとき、春樹さんのライトボウガンがガチャリという弾の装填時特有の音をだし、それを合図に三人ともはしり始めた。

▽▽▽

状況は自分の想像と同じであった。いや、想像以上に最悪だった。襲われているのは、数人の自分と同じ試験受験者。ランポスがたかるように襲っている。

先頭にいたため初めに襲われている光景を見て、その瞬間、大剣の止め具をはずし、大量のランポスの一匹を大上段からの振り下ろしで切り殺した。

そのまま大剣をなぎ払い、数匹のランポスに軽い傷を負わせる。こちらの存在に一部のランポスが気付き始めた。

耳に付けている無線機から春樹さんの声が聞こえた。

『大和君、あまり先走らないでください！』

右斜めから飛び掛って来たランポスの頭を下から上に思い切りふり剣で切り落とし、そのまま後ろに剣を落としながら振り下ろした剣の先端を中心にして剣の柄を握りなおしながら剣の後ろに回り、刃を地面に垂直に立て防御の体勢をとる。ランポスを剣を盾にし押し返す。しかし、正面しか対応できないこの体勢ではどう考えても長持ちしない。そこまで考えがいたったところで、思わぬ方向からランポスが飛び掛ってきた。重い大剣では反応できない。すぐにそう分かったため思わず目を腕で覆うとすると、ランポスが空中で何かに当たり打ち落とされた。あまり見えなかったものの春樹さんの援護だと分かった。

『大和君、この量はさばききれません！』

「じゃあ、どうすれば！？」

無線機に叫びかける。

『いま、監視員に連絡をいれてました』

「間に合うんですか！？」

『分かりません。だから、竜介君に囮を頼みます。ドスランポスの

注意をひきつけてもらいます』
ドスランポスはランポスの群れのリーダーだ。ドスランポスが攻撃されているとなると、他のランポスも襲い始めるだろう。確かに、竜介なら逃げ切れるかもしれないが、いくら三人の中で圧倒的に戦闘能力が上の竜介であるが、その逆も十分ありうる。
「閃光玉は！？」
『ダメです、数が多すぎてほとんど意味がありませんし、何かしらの理由で襲われている人たちもその場を動こうとはしません。大和君は目の前のランポスをふきとばして下さい』
「やるしかないか！」
思いっきり盾にして剣を押し出し前に進み、数体のランポスをひるませ、思いっきり体をねじり、剣を横に薙ぐ。どうやら、竜介の力を信じるしかないようだ。
「竜介！」
と叫ぶと、後ろで待っていた竜介が、ひるんだランポスの間を縫い、明らかに一回りでかいランポス、おそらくドスランポスに体当たりを仕掛けた。
その隙間から人がはっきりと見えた。
その表情は必死で一人が盾で防ぎつつランスでつつき、他のボウガン系の飛び道具をもっている二人が援護しているようだった。しかし誰がどう見たってもう持ちそうにない。
ランポスがまだ飛び掛ってくる。しかし、これもじきに収まるはずだ。今竜介がドスランポスの注意をひきつけているから、他のランポスもドスランポスの援護に向かうだろう。後は持久戦だ。
人を吹き飛ばす勢いでとびかかってるランポスを目の前に剣を盾にしながら押し出し続ける。守護霊に強化されたがさすがに筋肉がつりそうだがそんなことを言っている場合じゃない。時折側面から来るランポスは春樹さんがライトボウガンで打って、近づけさせないようにしてくれている。実質的に倒せたランポスは数体だが、倒そうと大剣を振ろうとすると隙ができ、ランポスにかまれるか、吹き

飛ばされるかされ、そこに群がられて、そこからまた復帰できる自信はないから、このまま耐えるしかない。
『不味いです！もう一匹ドスランポスがいます』
無線機から竜介の大声がランポスの鳴き声とともに聞こえた。
「最悪だ」
と思わずつぶやいた。竜介はもう一匹のランポスをひきつけているから、竜介の力は借りられない。
『少々考える時間をください！』
無線機から春樹さんの声が聞こえる。が、考える時間なんてない。最低でも十匹はあちらに群がっているのだ。
ランスは長いため、あまりに敵に近づかれると攻撃がしづらくなる。この場合囲まれているから突破するのが一番よく、突破するためには、突進すればよいのだが、しかし、それをする気配は先ほどから一切ない、春樹さんの言うとおり何かしらの理由があるようだ。
自分の悪い癖。
考える先に手が出た。
「喰らえ！」
守りから攻めへ。もてる全力の力を使い、体をねじり刃を横に大きくなぎ、目の前にいたランポスを吹き飛ばす。吹き飛ばしたランポスは他の数体のランポスを巻き込んで地面に倒れ、その間を大剣を肩に担ぎはしる。かなり走りにくいが、武器である大剣を捨てるわけにも行かない。牙をむき噛み付こうとしてくるランポスをぎりぎりでよける。数体が鎧に噛み付かてきたが無視して突っ込んだ。例の集団に飛び掛ろうとするランポスを飛びながら切りつける。
例の集団を見てみるとライトボウガンが二人、ランスが一人、そして、倒れているのが一人見えた。どこかを怪我している。ボウガンを打っている女の隣に行き、
「今のうちにそいつをどうにかしろ！」
と焦っていたからか、かなり乱暴に言い放ちけが人をかばうようにまた守りの姿勢に入る。

「か、回復薬がもう、」
声は震えていた。
「俺のベルトにある回復薬をつかえ！」
女はいきなりのことで目を白黒させたが、すぐにわれに返り腰のベルトから回復薬を抜いた。
包囲網の中に無理やり割って入ったため、外にいたときに比べ明らかに突進してくるランポスが多くなっている。後ろもボウガンで牽制してるもののボウガンは一定数打つとリロードが必要であり、その隙を作るために本来壊れやすさから殴ってはいけないとされているライトボウガンでランポスを直接殴っている有様だ。
ランポスが二体同時に突進を仕掛けてきた。尋常ではない衝撃を受けつつ、足を踏ん張り思いっきり押し返す。
「な、治ったけど。意識が…」
後ろで震えた声がした。
「戻らないのか！？」
「はい」
こくりと女は頷いた。
「おい！お前！」
とランスで防御している男に答えかける。
「俺のことか？」
男はかなり息切れしていた。
「そうだ。合図したら突進して道を切り開け。抜けた先にライトボウガンを持った人がいる。二人はランスがあけた道を行ってくれ。俺はこいつを引きずっていく」
「待て、それじゃあ、あんたが…」
「3、2、1で行け。3、2、」
「すまん」
「1！」
一言謝りながらもランスは盾と槍で自身の前方を突破する突進をランポスたちに繰り出した。

ライトボウガンをしまった二人も走って後に続く。
俺は大剣を背中のとめ具でとめ、気絶した男の襟首をつかみ引きずる。ランスが突破したあとにはもう、ランポスがその穴を埋めようとする。焦って足を進めるのを早くするが、引きずっている男は鎧や装備を着ているためかかなり重く、早くなった気はしない。
今、自分は武器をぬける状態じゃない。目の前のランポスたちには無力である。
そう考えると、頭から血がぬけていく感じがした。
呼吸がはやくなる。冷や汗が背中をぬらす。勘ではなく本能が不味いと告げる。
しかし、放って行くわけには絶対行かない。
十メートル。そう、たった十メートルだ。ランポスの妨害をかいくぐって十メートル歩けばいいんだ。
目の前に来るランポスをよける。しかし、一歩一歩進むごとに、かすったりし始めた。どこに来るのか分かるが、男を引きずっている以上大きくは避けられない。
目の前にランポスがおどり出た。
はぎ取りナイフを抜き、片手だけでもち応戦する。
かみつきをよけ、頭をはぎ取りナイフで切る。
ランポスは絶命したが、はぎ取りナイフがはずれずやむ終えず手放した。
一歩進めもまたランポスが、いや、
一回り大きく、際だったトサカ、ランポスより発達した爪。
ドスランポスが目の前に躍り出てきた。
ドスランポスがこちらを一睨みした。それだけだというのにほんの一瞬息ができなくなった。
冷や汗が頬を伝う。まずい。
焦って大剣を抜こうとするが、男を引きずっていたため片手が硬直してうまく腕が回らず、明らかにドスランポスの噛みつきの方が早い。

手で攻撃を遮ることもできずに、思わず目をつむり歯を食いしばった。
が、
聞こえてきたのはドスランポスの断末魔と顔にかかるなま暖かい自身にかかる血しぶきのだった。
おそるおそる目を開けると。
「大丈夫か？」
あの「教官」が血で塗れた大剣を持ち、堂々とたっていた。

二十四話　狩られる者と狩る者（後書き）

なんかいろいろとすいません。主に投稿の遅れといつも以上の駄文に。
言い訳させてもらうと、
戦闘シーンを書くのに時間がかかった。
リアル用事がかなり忙しかった（テストとかテストとか）
と、大きく二点の理由で遅れてしまいました。
恒例の謝罪は置いとき、内容について少々。
ゲームの中では最初から最後までただの鬱陶しい雑魚敵であるランポスですが、現実に戦闘となるとそう簡単には行きません。初心者ハンターの間では群れで行動するランポスは難敵といってもよいぐらいです。その群れになると身体能力が上がっている大和でもただのごり押しでは通じません。結局何がいいたいかというと、こちらの世界では雑魚敵も侮れない存在になっているということです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6313r/

二人のギルドカード

2011年11月8日22時13分発行